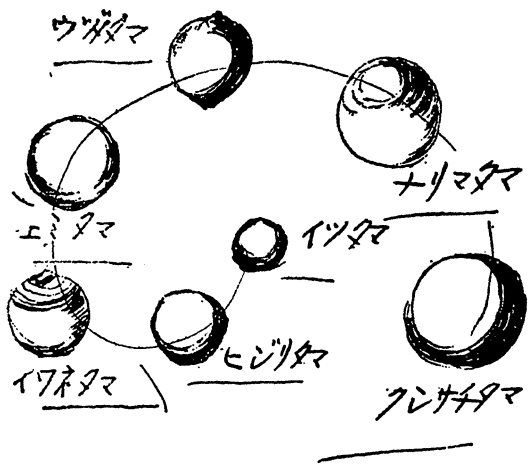
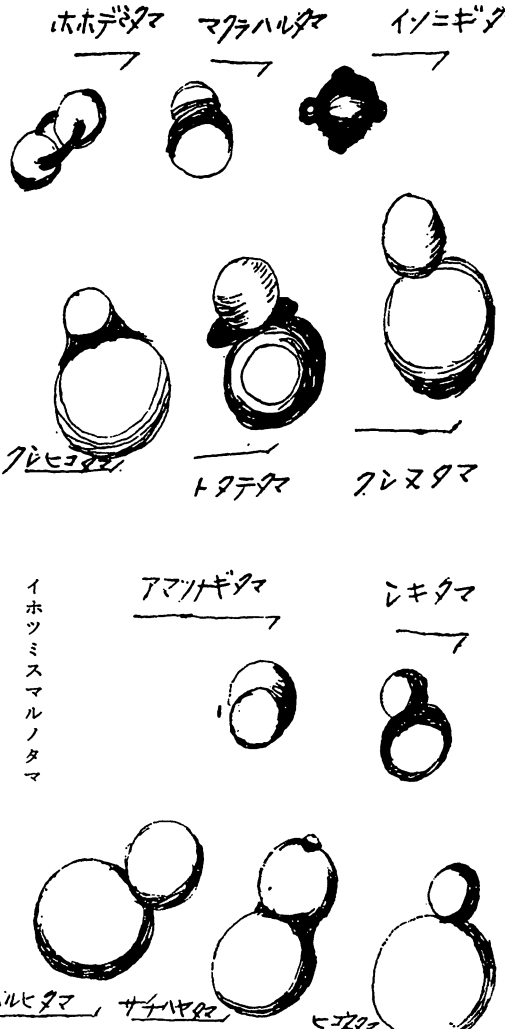



ヤサカノマガタマ

# 相似象


ホホデミタマ
マクラハルタマ
イソニギタマ
クルヒコタマ
トタテタマ
クレヌタマ
イホツミスマルノタマ
アマツナギタマ
レキタマ
ベルヒタマ
サチハヤタマ
ヒコネタマ

# 目次

相似象学会誌＝相似象＝第四号

〔口絵〕ヤサカのマガタマ図（一頁）
イホツのミスマルのタマ図（三頁）

一、カタカムナ文献カムヒビキ特輯について……九頁

二、前　書……二五頁

〔註〕▼科学識（一七）　▼「古代」の定義、日本古代史の資料（十一）
▼大いに参考になる（一八）　▼八鏡文字、日本上古代文明の物的証拠（十三）
▼天然自然の美的成り立ちや美的機能構造（一九）（美とは何か？）
▼奇妙さ量（二四）　▼タキオン（二五）
▼アマ始元量の仮説（二六）　▼漢字渡来以前の日本最古の七五調のウタ（一六）
▼カンとヒビキ（四〇）　▼カタカムナ文献を世に出す為の配慮（一八）
▼科学の大転換（四二）　▼大昔の神話を科学がとりあげる意味（二一・四九）
▼大学と小学（四六）　▼「哲科学」の必要性（四三・二五九）
▼日本人の奇妙さ量（外国人には何か神秘的で薄気味悪い日本）（二六・五〇・一〇六）

三、カムヒビキ第一部……五一頁

（一）タカマクラナナヨッギを表現する表象物、ヤサカノマガタマに関するカムヒビキ（五一）
〔註〕▼アマ（五四）（一〇一）　▼数と物の結びつきを示す日本語（六〇・八九）
▼カミ・カム（五六）　▼アサヒとフトヒ、遠心と求心（六四・六六・八六）
▼七の周期（六〇）　▼原子核から出る微粒子はどこへ消える？（六七）
▼〈ヒ〉（六五）〈ナリマ〉（七一）　▼宇宙のあらゆる相似象の原型はどこに？（六七）
（二）宇宙生気（イキ）を表現する表象物、イホツノミスマルノタマに関するカムヒビキ（七八）
〔註〕▼機能（八〇）　▼万物万象の生命現象を発現させて居る力（七九）
▼直観と易占（八〇）　▼アモリ（天降り）の真の意味（八二）
▼モロカゲ（八三）　▼日本人の祖先は太陽崇拝族ではなかった（八四）
（三）マガタマの示唆するナナヨッギ（七の周期）の例（九一）（五三・六二）
〔註〕▼七年周期（九一）　▼太陽光彩と黒点の周期（九三）
▼七十年周期（九二）　▼首都の移動と気象の周期（九三）
〔ハレー彗星の表　92〕〔都と陵の移動と標高の表　94〕〔富士火山灰層の図　96〕
▼七百年周期（九三）　▼大規模火山の爆発、寒暖、海浸海退の周期（九三）
▼七千年周期（九八）　▼地層、化石、年輪、珊瑚礁等（九六・九八）
四、カムヒビキ第二部……九九頁
（一）始元世界と正反宇宙を表現するカムヒビキ（九九）　大宇宙の擬音に基く高度の抽象語（一〇四）

〔註〕▼〈ア〉(一〇〇)　▼アマ（天海雨女……甘えとバチ)(一〇一)
▼日本語の特質(一〇一)　▼身ぶりや話術を要さぬ程の日本語の表現力(一〇二)
▼Y方向(一一一)　▼赤ん坊に乳を吸はれる方向・アナ(一一二)
▼ノリト(一一三)　▼起源を論ずる場合の注意(一一〇)
▼アマナ(一一四)　▼奇妙さ量（反の要素）の大小はアマナ量(一一二)
▼ミナカヌシ(一一五)　▼直訳不可能なモッタイナイ・オカゲ様等々(一一五)
▼アマハヤミ(一一七)　▼超光速の虫ノシラセやインスピレーション(一一七)

(二) 時間空間量の性質を表現するカムヒビキ(一二〇)（現代人の時空概念には無い上古代人の発想)
〔註〕トキ・トコロ(一二四)　▼時空の伸縮変形同時性を考へた相対性理論(一二七)
▼集積位相・互換重合(一三一)　▼在位置量、電磁波、電気磁気、力等の正体(一三一)
▼時間・空間(一三六)　▼正進・反転・循環性の時空(一三二)
▼アインシュタインの相対時差とタイムマシン(一三七)（科学に弱い一般人を煙に巻く)
▼空想と直観(一三九)　▼科学の盲点を衝く上古代人の直観の哲科学(一四一)

(三) 恒星空間の有様を表現するカムヒビキ(一四二)（マカカハコクニ、宇宙に充満する物質について)
〔註〕▼電離層(一四五)　▼電気の海と原子の発生の直観(一四五)

(四) 天体の有様を表現するカムヒビキ(一四七)（マカタマの表象物として示されたもの)(一五一)

(五) 宇宙の力が、生命の原動である事を表はすカムヒビキ(一五二)（チカラがイノチに変る物理)

〔註〕▼向力(一五三)　▼万有引力や重力とはケタ違ひに巨大な力(一五三)

▼番力(一五五)　▼科学では未解明の「奇妙さ」量の根拠(一五五)

(六) 宇宙の生命が、電気を生むことを示すカムヒビキ(一六二)(現代科学と上古代人の直観との違ひ)(一六四)

(七) 電磁波の物理を知ったカムヒビキ(一六二)(現代科学と上古代人の直観との違ひ)(一六四)

〔註〕▼電磁波と輻射波(一六六)　▼私共は審判者ではないが……(一六七・一七四)

(八) 電磁波が、物質や生命質をつくるといふ物理を示すカムヒビキ(一六八)(サヌキアワナギ)

(九) 物質の機構を示すカムヒビキ(一七七)(ワクムスビ・オメタグヒ・ヤクサイカツチ)

(十) 反物質の存在を示すカムヒビキ(一八一)「反物質」の考へ方の違ひ(一八〇・一八五)

(十一) 質量の物理を知ったカムヒビキ(一八八)(スッキリしない科学の定義の例)(一九一)

(十二) 物質の結晶の物理を示すカムヒビキ(一九二)(原子分子の結晶力はどこから? )(一九一)

〔註〕▼環境(一九三)　イカツオホワタ(大地大気の電気)に気付いた製鉄の経験(一九四)

(十三) 「生気増幅電流」のサトリを示すカムヒビキ(二〇〇)　生きる為のクヒとバチ(食と性)

〔註〕▼半導体の電気現象(二〇四)　▼最高の栄養は電気の補給(二〇六)

(十四) 元素の種類とその機構を示すカムヒビキ(二〇七)(アメノヒトツネ・アワナギ・ツラナギ)

〔カタカムナ声音符の相似象による元素表 212〕(アマナクニ、アナマククニ)

(十五) 個体発光の物理を示すカムヒビキ(二一三)(熱を伴はぬ蛍光燐光、キリストの冠光の意味)

(十六) 「心の現象」の物理を示すカムヒビキ(二一七)(カヒハリムクロ、骨と心)

〔註〕▼能のハヤシ(二二八)(一四八)　▼「マ」と「ハヤシ」のかけ声(二二八)
▼カタムキ(二二九)　▼平衡感覚的直観力の劣化(二三〇)
▼分極固定の癌症状(二二九)　▼最も能率の良い修養法・健康法(二三〇)

五、余　論……二四〇頁
1. カタカムナ文明と他の古代文明との違ひ(二四〇)　地球単位の文化を築く基準(二四九)
2. 天皇家とカタカムナ文化(二四二)　古代史の欠如の不明朗さを解明する道(二四五)
3. 昔はよかった(二四七)　どの民族にも普遍的にみられる古代へのあこがれの心情(二四八)
4. 相似象学の立場・直観の物理(二五〇)　日本語に対する日本人の直感の劣化(二五二)
▼直観性能の発揮(二五四)　カンの鍛練の重要性(二五五)
▼三種の神器のナゾの解明は天皇家だけの問題ではない(二五三)
▼「イノチ」と「クラシ」を別の語で言ひ分けずに居られぬ日本人と、「ライフ」一語ですむ民族(二五〇)
▼言語こそ民族の歴史の生きた遺物(二五〇・一四)

後　記……二六一頁
相似象学会について

# 一、カタカムナ文献
## カムヒビキ特輯について

前号に於ては、カタカムナ文化の概要を述べた。本号では、カタカムナ文化の内容を、〈カムヒビキ〉によって解説する。〈カムヒビキ〉とは、カムのヒビキ、則ち、「カタチに見えないモノを、ヒビキを以てサトル」ことである。その内容は、現在の科学常識には抗するものが多いが、現代の、科学、技術の在り方に疑問を抱き、人類の歩みに、反省の念をもつ人々にとっては、まことに大きな示唆をもたらし、現代人の考えを、根底からゆさぶるものがある。

前号に予告した通り、三種の神器の中の、「マガタマ　ミスマルノタマ」の表象物の意味は、今回のカムヒビキによって解説するが、「カムナガラノミチ」については、次号に詳述する。従来、「カムナガラノミチ」と謂はれるものは、神道的な色彩でのみ扱われ、宗教的な、神秘思想の言葉と解されて居た。しかも、「カムマニノミチ」とか「カムナマニマニ」等といっても、それがどういふ道であるかといふ具体的な内容は何ら示されて居ない。私達は、カタカムナ文献の解読により、はじめて、「カムナガラノミチ」に、『本末の両方の意味』のあることを、

知ったのである。

その内容は、まことに、容易ならぬ洞察がこめられ、簡単に説明できることではないので、号を改めて、詳述することにした次第である。日本人の起源を求める思考が、万葉や飛鳥奈良の時代を探って、満足できるものでない、といふ事は、もはや明らかである。又、古事記日本書紀や魏誌倭人伝あたりの古文書の研究によって、日本民族の発祥のもとを調べることも、ムリな注文であったといふ事も判明した。そのような従来の目のつけどころよりも、もう少し深く、遠くにさかのぼって、「日本民族の起源」を究明し、「日本文化の原点」を明らかにする手がかりはないものか?……

相似象学の研究は、この要望にこたへうるものである。私達は、あくまで、過去の先入見や神秘思想にとらはれることなく、独自の勘考を以て、「カタカムナ文化」なるものをとりあげたのである。

カタカムナの用語になれぬ人々の為に、解説や註を附しておくが、カンのよい人々は、註などはとばして、カタカムナ人の「ヒビキ」をジカに、きゝとっていたゞきたい。又、便宜上、現行のカタカナ文字で記載してある「ヒビキ」を、前号の図象文字にあてて、彼らの気持を、直接に、感受するようにしていたゞきたいものである。

(註)西方の諸国をはじめ、隣国のシナに於ても、立派に歴史上の存在を示して居た時代を、我が国に於ては「神代」と称して居たり、又、シナからの文物渡来以前を、全くの未開状態とし、大和朝廷以降のみで「日本史」を編纂したりする、といふような、不自然な有様がまかり通ったのも、弥生縄文以前の、日本古代の歴史が、今の所、全くわからぬからである。資料がないからといって、現在みつかったものだけで解釈してしまふわけにはゆかない。多くの古代研究の混迷やゆきづまりを打解する道は、どうしても、少くとも、「縄文前期以前」にさかのぼるのでなければ、ツヂツマが合ふ筈が無い。

こゝで、先づ私達が明らかにしておかねばならぬ事は「古代」といふ事の定義である。他民族の歴史に比べれば、日本が古事記日本書紀の時代に、既にあれだけのものをのこして居たといふ事は、驚くべき事であり、歴史の浅い国の人々にとっては、一千年前でも古代であろうが、日本民族にとっては、二千年前でも、まだ充分古代とは言へないのである。私達の考へる日本の古代とは、縄文前期（一万年前）といはれる時代よりもはるか以前にさかのぼると思はれる、カタカムナの上古代をさして居る。それが、紀元前何年頃にあたり、原人やクロマニヨン等の人類とどのような関係にあるか等といふ事は、大きな問題であるが、しかし、今の私達には、それを考証するだけの能力もヒマも、又意欲もない。なぜなら、私達は、おそらく現在の一般の人々が、「古代」と思って居るよりはるか古い時代に、現代の我々の思ひもよらぬ高度の文化を以て、我々日本人の祖先が、この日本の地に生存して居た、としか思へぬ文献を知り、その内容が、たゞならぬものである事をつきとめ、その内容の解明に、最大の関心をもって、全精力を集注して居るからである。

その内容が、あまりにも、今までの研究者の、思ひもかけぬ種類のものであった為に、後代人には、その意味がわからなくなってしまひ、僅かに、神の名などとして、断片的に伝へられ、少くとも科学が、現代のレベルに達するまでは、そのナゾを解く糸口すら、見つからなかった、といふ事らしいのである。

従来の、文学的、宗教的研究のみならず、近代の考古学的、又地球物理的、地名学、言語学、年代学等々の研究によっても解くことのできない、日本民族の起源、日本語の起源、要するに、日本古代史のナゾは、私達のいふカタカムナの上古代と、漢字渡来以後の歴史との間の消息が、解明されぬ限り不可能であらう。

ところで**日本の古代史の資料**は無いといはれるが、果して本当に無いのであらうか？　今までに知られて居るもの以外に、資料は無いのであらうか？　我々は、この問題から、改めて考へ直してみる必要がありそうである。漢字採用による古事記日本書紀編纂の前後、日本列島に、特に大きな天変地異があったとも伝はって居ない、とすれば、その間に、何らかの、為にする者の意図の介入のあった事が察せられる。

日本の古代のナゾを解き、「三種の神器」に、どのような意味があったかを知り、我々日本人が、真に回帰すべき、民族の心の故郷を見出すには、この何者かの意志によって、覆ひかくされた、そのカミの真相を、古事記以前にさかのぼって探るしかない。

私達は、その覆ひかくした者が、誰であったか？　それが、いつの時代で、誰と誰との間に、どのよ

うな争ひがあったか？　といふような事を、調べようとするのではない。学者でも、専門家でもない私達が、「カタカムナの文化」なるものを紹介するのは、それが、たとひ、何時代のものであれ、何民族のものであれ、これほどの内容の文化に対し、我々現代人は、謙虚に、それを扱ふべきである、と信ずるからである。

時代考証や、従来の資料との関連づけ等の仕事は、専門家におまかせし、私達が従事するのは、誰、彼といふ名称や、事件の詮索ではなく、その内容の「実質」である。則ち、私達自身がもって居る、この日本人の心――外国人には不可解なものにうつるらしい我々「日本人の心理」のもとは何であったか？　後代、シナ、インド、西欧の文化をコダワリなく受け容れて、日本独自のものにつくりあげて来た、「日本文化」なるものの特徴は、どこにあったか？　要するに、日本民族の「特性」とは何か？　その「原点」は、どういふものであったか？……といふ、日本民族の、本質、本性を、そのカミ（起源）にさかのぼって、具体的に、明らかにする事である。

私達の研究は、前号に述べたように、楢崎が、終戦直後、兵庫県六甲山系金鳥山、俗称狐塚の辺に於て、平十字氏より示された、「カタカムナ図象文字」による巻物が基になって居る。楢崎は、それ以前に、満洲に於て、老子教、盧有三（ロウサン）老師より、日本の古代には、高度の文明をもつ「噫仁八（アジン）族」が先住し八鏡文字を使って居た、といふ、老子教の古伝をあかされて居たので、このカタカムナ図象文字が、その八鏡文字ではないか？　といふ直観と、純粋の好奇心から、解読を志したのであった。

私達は、その文献内容の解読に全力を注ぎ、且、その内容の重大さを、最大の根拠として居る。従っ

て、その時代を考証するとか、物的証拠を固めるといふ方は、後まわしにになって居る。もとより、物的考証の試みは、個人の能力の限外である為でもあるが……。ところが、一般の人々にとっては、内容の「実質」などよりも、先づ、それに関する確かな物的証拠の有無が先決条件で、それを示さねば、アタマからうけつけようとはしないのが大部分である。最近、アスカ期前後の考古資料が、各地に発見されつゝあるように、これだけの文化をもったカタカムナの遺物が存在しない筈はないのであるから、必ず、将来、発見されるに違ひない。しかしそれは、おそらく、アスカ期頃の資料の発見以上の、非常な困難さが想はれる。

唯、私達が、そのような物的証拠を要求する人々に言ひたい事は、このような場合、従来の、考古学的な考証のみを証拠とする、狭い解釈にこだわる限り、日本の古代史は進展し得ないので、私達が、カタカムナ文化の、何よりの、ゆるぎない「物的資料」と確信して居るものは、我々が現に、今も使って居る、この『日本語』と、『カタカナ文字』である。

我々が、今、公的にもって居る最古の文献は、古事記、日本書紀、古語拾遺等であり、そこに記された言葉が、最古の日本語の記録とされて居る。しかし、イザナミ・イザナギ・アメノミナカヌシ等々の、単なる自然発生的な固有名詞とも思はれぬ言葉が、一体、何を意味して居るのか?は、全く不明であった。このナゾを解くものが、私達のいふカタカムナ図象文字による文献である。このカタカムナの解読によって、今まで神や国の名などとして伝へられた言葉の意味がわかってみれば、それらが、到底、後代人の、古事記日本書紀等の作者の智慧などで、創作のできるシロモノではない事が明らかであ

り、又、現行のカタカナ文字は、漢字の省略がもとではなく、カタカムナ声音符を原型とするものである事も、判明したのである。（カタカナ文字の起源に関する本格的な研究は、今日まで、まだ無かった。）

このように、カタカムナの上古代より、現代の我々にまで、受け継いで使はれて来たこの『日本語』と『カタカナ文字』こそ、何よりも確かな、民族の遺物と観てもよい、「物的証拠」ではないか？……

この、最も大きな民族的遺産であり、今もなほ、そのおかげで、我々が「日本人」と称ばれ、それが骨肉にまで滲透して、我々の精神構造をも支配し、日本人同士には、極めてアタリマエの何でもない事として通じあへることが、外国人には、まことに「奇妙な、フシギな民族」のように思はれる、この「日本人の日本語」といふものを、その発生のカミ「起源」にさかのぼって究明しうる者は、そのカミ（起源）の祖先以来、この日本の地に住み、この日本語によって代々を生き継ぎ、その微妙なニュアンスのハシバシまで、こと細かに感じ分けることのできる、我々日本人自身の手による以外、あり得ぬ筈である。ギリシヤやスメルやアソカ等の古代の文字の解読に燃やされたと同じ情熱を、我々は、我々の古代のコトバに注ぐのは、当然である。

楢崎が、はからずも入手して、遂に解読し得た「カタカムナ」の内容は、従来の、国学や神道研究による、古事記日本書紀等の解釈とは、全く趣の異なるものであった。個々の単語には同じものがあるが、古代神秘思想的な臭ひは全く無く、しかも、現代科学とは、別体系の高度の物理に基く、哲科学が展開されて居た事が判明したのである。又、所謂「神代文字」として伝へられて居るものは、カタカムナの図象文字ではない。それはおほむね、古事記前後の頃の、象形や朝鮮文字記号類似のものが多い。

日本の古語の研究は、決して、古事記や万葉集がゆきどまりではなかったのである。カタカムナの図象文字や、カムヒビキによって伝へられた、これらの日本最古の五・七調のウタこそ、後に万葉のウタへも、又、謡曲にも、和歌・俳諧にも発展した源流であり、真に、漢字渡来以前の「日本の文化」を、アリノママに示す、古代の日本人のココロのヒビキに他ならぬものであったのである。

しかも、それは、単に日本民族の起源のみならず、およそ「人間の文化」といふものの「原点」に迫りうるものであることを、確信するに至ったのである。そして、ひいては、今日まで、ナゾのまゝであった、日本史に於ける「天皇家」の立場をはじめ、古事記日本書紀等の文献や、モロモロの古文書等の、正当な価値付けをも、可能となす程のものである。「日本人の起源」は、「天皇家の起源」と、同一でなくてもよい、と考へても、差支へのない現代になって、このカタカムナの文献が出現した事は、まことに意味が深い。(余論参照)

国家には興亡があるが、民族は国家とは別に生きつづけるものである。私達は、日本といふ「国家の起源」をではなく、我々日本語を使ふ「民族の起源」を明らかに知りたい。むしろ、「国家」といふワクをはめられる事でゆがめられた本性を、ただすことによって、民族の、一人一人の「人間」といふ生物の、本来の生き方を見直したい。……

しかし……

フランス人はフランス語を誇りとし、その民族を愛するのが自然であるように、我々は日本語を誇り

とし、この民族に愛着をもつのが自然であらう。おほむね民族は、国家と結びついて運命を共にして来た。民族と国家とは、区別できぬ事が多く、人々も混同して居る場合が多いが、しかし、民族は自然発生であり、国家は人為的、二次的なものである。「民族愛」と、「愛国心」とは、本来、次元の異なるものである。

どの民族に於ても、個人としては、善良な夫であり父親である人々が、国家とか軍とか、大きな社会組織の中にあっては、おそるべき虐殺や、公害の執行者たり得る。(ナチスやベトナムやミナマタ病などの例をあげるまでもない。)個人としての人間と、社会組織の中の人間とは、別の人格をもつことになる。「個人」の人格や意見といふものが、「社会」といふ巨大エネルギーの中では、無力に等しい現代のような世の中で、カタカムナ等といふ上古代人の文化をもち出す事に、何の意味があるか? といふ批判がある。……

「たとひ、その文化が、いかにすばらしいものであったとしても、それは、カタカムナ人の生きた、上古代に於てこそ可能であったので、それは、もはや現代社会とは無縁のものである。なるほど、カタカムナの古代は良かったかもしれない。しかし、一たび異民族(天孫族?)が攻めて来たら、それは忽ち亡んだではないか? 天孫族が勝った、といふ事が、近代化への進化の第一歩であり、古代文化は、古代に於てのみ成り立ち得た。古代とは、個人と個人のカカハリの時代であり、それは、今日でも、個人と個人の間では生き得る世界である。しかし、個人の間でなら通用するものも、大きな集団社会となれば、もう別な力が発生するのだ。従ってカタカムナの文献を保存し、個人のレベルでそれを尊重し、伝

へる事には文句はないが、それを出版物として世に問ふ意味はない。」……このような批判があるのも当然である。

民族の原点を探り、大本にかへって出直そうといふ運動が、「夢よもう一度」の感傷となり、「昔はよかった」と、歴史を逆行させようとする、ムダな努力に終り勝ちなのは、本来、「個人」の問題として扱はるべきものが、何らかの意味で、団体組織をもち、社会的に発言し出すと、忽ち「個人」の意志以外の力が発生し、本来のスガタを失ひ、「事、志と異る」結果となるからであらう。

例へば宗教にしても、優れた思想家によって、人から人へ、直接に伝って居る間は、その精神は正しく生き続けるが、一たび、社会的な組織をもち、支持者がふえてくると、本人にそのツモリはなくとも、対外的には「挑戦」となって「抵抗」をまねき、内部的には、正しい理解をもたぬ未熟な信者があらはれ、それが又、対外的に誤解を増す因となり、およそ運動といふものは、大きくなれば初期の目的をソレてしまふし、大きくならねば、何の力ももたぬといふ、矛盾をはらむものである。

カタカムナの文献が、数万年（?）後の今日の私達の手に伝へられるまで温存し得たのも、それが、何ら社会的に参与しようとせず、個人の私物として、壁の中に閉じこめられる位に秘せられ、その内容は全くわからなくなる程に隠されたことによって、ようやく「消滅」だけは免れたのであって、もしそれが、少しでも表に出て、何らかの「運動」を起して居たら、モトもコも無くすことになって居たであらう。

このようにして伝へられたものを、今、私達が世に出すに就いては当然大きな配慮がなければならぬ。私達が、個人の勉強会の「会誌」といふ方法をとって居るのは、これが、あくまで「個人」の問題である、といふ、本筋をわきまへる故である。

「運動」は、社会や政治や学問の場に於ては有力であるが、個人の精神の問題は、「運動」によってカタヅクものではない。

縁あって、この会誌を読み、カタカムナ文化の内容にふれた人々は、めいめいが、「自分」の問題として考へ、自分の「直観」を鍛練することの意味を知り、実行し、それによって、自分自身の問題を解明するところに、真の意義がある、としていたゞきたい。自分自身の体験を新たにし、知性（サトリ）を高め、そして、その結果が、自分の属する家庭や社会に、何らかの、従来とは異なる貢献となって表はれる、といふのが、本当に社会を動かす「底力」といふものであらう。そうした底力によるのでない、何らかの意味で、外部から挑発され、強制された、人間の意志による運動のエネルギーといふものは、必ず相反する抵抗をまき起し、結局、初期の志とは異なる、「そんなツモリではなかった」結果を招く事になるのがオチである。シナの古い哲人は、「徳二三ナラバ、動イテ凶ナラザルハナシ」と喝破して居る。

本人の意志がどうであれ、「出版」といふ行為自体が、社会に対する一つの挑戦であり、自己主張ではないか？……

とすれば私達は、自分がマチガヒなく動かす事のできる数人の人だけを相手とし、一冊の出版物も無しに、カタカムナの文献を、又、壁にこめるようにして、次の時代に伝へることに、止むべきであるか？……そうすれば、確かに、「誤解」や「挑戦」の危険は避けられるかも知れぬ。私達も、ムダなエネルギーを費すことなく研究に専念し、潔ぎよさを汚さずにすむであろう。

しかし、たまたま私達が入手して、あたへられたこの文献解読の「サチ」を、私達だけで独占し、私物化した為に、消滅させてしまふ危険の方はどうなるか？……私達にわかり得たものなら、世には私達以上に、よりよくわかる人もあるに違ひない。心ある人々に、できるだけ広く伝へる為の、ささやかな出版による、少々の誤解や抵抗はやむを得まい。自分達の手に負へぬ程に拡げるようなマネをせず、あくまで、個人から個人へ心ある人々に訴へる道をとるしかない。……これが、私達のギリギリの結論であった。実際、私達は、カタカムナ文献解読に力を集注し、余力は乏しいから、当分、この体制を出る事は不可能である。あとはもう、自然の縁にまかせるのみである。めいめいが、自分の「ナリ」を精一ぱいつくすところに、おのづから自然の秩序が保たれ、真のチカラは、カゲにあって、表にあらはれるものではない、といふサトリを、カタカムナ人は、くりかへし示して居る。

個人の名や業績を世に残す為の、人間的な努力ではなく、又、自分の力を劃し、切磋琢磨のチャンスを拒否する類の、自己満足やひっこみ思案でもなく、私達は、及ばずながら、カタカムナのサトシに相似したい。

数万年（？）の間、唯、自然の生物の性来そのまゝの態度で、民族の根の、無意識の「底力」となっ

て、生きつゞけて来た、**カタカムナの伝統**といふものは、時代がいかに変化しようとも、社会組織が、カタカムナの古代とは全く異質のものに変革されようとも、いやしくも、人間の本性の中に、生きつゞけるものである。それなしに、「日本人」としてのみでなく、「人間」として、生存を全うする事はできないもの、則ち、「人間の本性」が、いかなるものか？　を探求する人々にとって、それは、つねに新しく、又、つねに回帰すべき、「原点」の象徴なのである、といふ事を、私達は、カタカムナ文献の内容の解読によって、はじめて「ハッキリ」と、認識することが出来たのであった。

この、「ハッキリと認識する」といふ事が、今まで、我々日本人には乏しかった。その必要もなかった。事実、理由など説明できなくとも、「実質」さへわかって居ればよい事である。他国語に直訳できぬアリガタイ、モッタイナイ、オカゲサマ等といふ言葉をつくり出したカタカムナ人の心情は、今日の我々も、何となくわかって居るのである。カタカムナの伝統は、リクツではなしに、民族の心として、無意識の「底力」となって、日本語の中に生きつゞけて来た。

無意識にもって居たものであったからこそ、強かったこの力が、しかし、一たび状況が変り、異民族との接触にあへば、タワイもなく動揺し、自分自身のもって居るものの真価を見失ふのは、無意識の故のモロサである。もはや我々は、このカタカムナの伝統を、無意識の裡に子孫に伝へる事は危くなって来た。現代の日本語の混乱は、過去の歴史上にあった幾度かの危機よりも、はるかに大きな試練に、我々が当面して居る事を意味して居る。

このときに当って、カタカムナの伝統が、真の力を発揮するには、もはや「何となく」ではなく、自

分自身のもって居るものを、ハッキリと認識しなければならぬ といふセト際に、我々は立って居るようである。そして、それは、決して単なる一民族の興亡のみでなく、「人類」といふ生物の存亡にかゝはる、根本問題であるといふ認識である。

現代人の中にも、現代文化に絶望し、動物の世界や、未開社会の生活をかいまみて、古代人の素朴な、健やかな心情を想起し、反省や、アコガレの念を覚える人は少くない。しかし、単に、「古代にかへれ」と言ふのでは、解決にはならない。

私達が、カタカムナの文化を紹介するのは、それが、この種の願望の、情緒的な満足にとゞまる程度のものでは、決してないからである。なぜなら、いかに我々が古代をあこがれても、自然の進化の流れは、もはや再び逆行させる事はできないし、もしも、かりに「古代」にかへったとしても、それは、人類史の頁を、数万年間、足ぶみさせるだけで、数万年後の人類は、おそらく我々と同じような歴史をくり返し、現代の我々と同じような「文化生活」に陥って、又、古代をあこがれるしかないであろう。かつて、苦しい欠亡の中にあって、人々は夢中で救世主を渇望したが、今や一応満ち足りた文化生活の世となっても、人々は、より深刻に、しかし何をどのように求めてよいかもわからぬままに、無意識に、目を虚空に、古代に、注いで居る。

古代 といふ言葉で、人々があこがれて居るものは、一体何なのか？ この真意がわからぬ限り、我々人類は、今までのような迷妄の歴史の循環から脱して、マトモな、成熟の過程に、真に「進化」することは不可能であろう。

カタカムナのサトリには、我々が、我々の数万年間の歴史から、真に聡明に学んで、人類の将来に、明るい夢を托し得るに足る、**人類の文化の原点**ともいふべきスガタが、示されて居るのである。

どうか縁あって、この会誌を手にされた人々は、一人一人が、自分のココロに問うて、この古い上古代人の言葉のヒビキを、かみしめて、読んでみて頂きたい。

たゞし、同じ言葉一つでも、例へば、カミとかアマとかいふ言葉にしても、それが、全くのムクの中から、その言葉がつくり出されて居た時代と、さんざんアカやヨゴレの附着したあげくの、使ひ古しの言葉として受けとられて居る現代とでは、その言葉の「初心」を、スナホに感じとる事は、非常に難しいことである。

しかし、人間の心は、「そう成らう」と思へば、則座に「成れる」といふ、新しい力が、刻々にあたへられて居る。国家間の闘争や、公害問題等におびやかされ、人類の滅亡も近いといふ、悲観論が叫ばれる現代の風潮の中にあって、この上古代人の、イキイキと明るい感覚をよび覚すことは、いかなる妙薬にも増して**起生回生の新しい力**を、もたらす事に成るに違ひない。

次章以下に述べる、彼らの「日本最古のウタ」の数々を読んでいたゞけばわかる事であるが、カタカムナの人々の間では、このような簡単な表現で、ズバリと、一こと言へば通じあへたものらしい。しかし、それだけでは、今の人にわかりようがない。説明しようとすれば、現代語を使はねばならぬ。そうすれば、現代人の概念が混入し、科学の智識が邪魔をする。解説は、至難のわざである。

現代人の先入見にある、科学思想や宗教神秘思想、哲学等の考へ方との違ひを整理する為には、科学

用語や、宗教哲学の概念用語も使はねばならず、その為に、「難しい」といふ印象をあたへてしまふ事にもなる。

今日では日本人も、科学的にしかものが考へられぬように教育されて居る。しかし、思へば、それは、近々百年間の現象にすぎない。我々は、それ以前に、カタカムナの伝統といふ、数万年のキャリアをもつ民族である。

一応の手がかりとして、説明は附しておくけれども、できるだけ拙い解説にわづらはされる事なく、彼らの、単純、明朗、闊達な言葉のヒビキを、どうか直接、めいめいのココロの波動の、共振の感応を以て、聴きとって頂きたい。日本人なら、それが可能な筈である。そうすれば、私達が、消極的すぎると非難される程に、慎重に、このカタカムナの文献を扱ふ気持も、又、その意味の重大性も、納得されるであろう。

（昭和四十七年二月六日）

# 二、前書

「光よりも速いものは存在しない」と、決定的に、今までの科学では思ひ込んで居た。ところが、核科学に関する或種の実験過程に於て、超光速の粒子「タキオン」(註)が捉へられた。そこで、そのタキオンが、宇宙空間に、どのように存在して居るか？　といふ事が、問題にされて居る。タキオンとは、中性子陽子等とも異り、「奇妙さ量」(註Ⅳ)の多い微粒子であり、追試は困難といはれて居る。奇妙さ量とは、最近の科学がとりあげた、一種の物理量であり、ストレンジネス(STRANGENESS)の訳である。このような時に、カムヒビキの内容が明されることは、現代の人々にとって、「大いに参考となる」であろう。(註Ⅱ)

〈カムヒビキ〉とは、我が国の上古代に、我が国土に、先住して居た「カタカムナ人」によって、アマハヤミ(後出註)を利用して感得された、高度のサトリの事である。アマハヤミとは、タキオンではないが、カタカムナ人が、生物体覚とも謂ふべき、鋭敏な直感によって、聴覚的に体覚した、いはゞ最も「奇妙さ量」の多い、無限高速粒子の事である。則ち、「アマ」の力

は、光以上の超高速で、宇宙空間に波及して居ることを、彼らは感じたのである。およそ「力」といふものは、引力等のように、最も速く、瞬時的に傳播するものである。彼らは、そのアマハヤミが、天然自然の「美的成り立ちや美的機能構造」（註Ⅲ）をもたらして居る様相を、超音波的なカムヒビキとして感知し、その内容を、子孫に伝へる為に、主としては声音その他の音響効果を用ひ、或ひは物の形に托して表現する、表象物を多数創って居た。則ち前号に解説したところの、声音符によるカタカムナのウタヒや、ヤタノカガミ・フトマニノツルギ・マガタマの「三種の神器」と謂はれるものを始め、その遺された文化一切を、私達は、古い和語のまゝに、〈カムヒビキ〉と総称して居る。

生物体覚を失った上古以降の後代人にとっては、〈カムヒビキ〉の内容は、あまりにも高度すぎて、全く理解の出来ぬものとなり、その為に、三種の神器などに托された意味も伝はらず、図象文字を漢字にうつす際にも、古事記等にみられるような、神話や神の名などとして、意味のわからぬものにされてしまったと想はれる。（前号、古事記との関係等参照）

長い間、全く意味もわからぬままに、断片的に伝へられて居た〈カムヒビキ〉も、その内容を解説しさへすれば、現代の人々なら、思考的に理解し得るだけの「科学識」（註Ⅰ）があるし、殊に日本人には、無意識の深層に、カタカムナ人のサトリが潜められて居るので、〈カムヒビキ〉の音を聴いただけで、何となく判る、「奇妙さ量」が多いのである。つまり、科学の

常識でみれば「奇妙」といふしかないが、日本語を使ふ日本人なら、本能的に、共感できるものがある、といふ事である。このことが、外国人からみれば、日本人は〈奇妙さ量〉の多い、フシギな、時にはオソロシイ、気味の悪い民族だ、といふ感じをあたへることになる。よい方のあらはれも、悪い例でも、日本人同士なら、説明しなくても通じあへるものがあるが、外国人には理解困難、という事が多いのは、外国人にとって「奇妙」とうつるものを、日本人は、日本語の発祥の上古以来、身にそなへもって居るからだ、と言へるであらう。

(註1)科学識　科学知識と言へば、小学生の科学知識も、大学教授の科学智識もあって、その内容レベルはまちまちである。こゝに「科学識」と言ひわけたのは、「現代の科学の智識として最高度の認識内容」をさす為である。なぜなら、例へば、従来の科学の考へ方では、「奇妙さ量」などといふものは採り上げなかった。しかしながら一方で、「現代科学でも解明のできぬ、神秘としか言ひようのないモノがある」といふ事実は感じて居たが、いやしくも科学者は、「神秘」などを表面に持ち出すべきではないと考へて居た。ところが、日本の科学者が何と笑はうが、人類の最新の「科学識」に於ては、既に原子爐内に、超光速の粒子(タキオン等)が捉へられ、光速粒子の場合と異って、衝突に際し、エネルギーのやりとりの無い事が判明し、「反物質」に属するモノではないかと言はれて居る。そして従来の常識では、解明出来ぬモノが存在する事を認めて、それを、「時間空間量」のように、測ることの出来る

「奇妙さ量」（ストレンジネス）と名付けたのである。ところで、それなら、つまり、「時間空間量」を「元」とする説明がありうるなら、確かに存在すると認めた「奇妙さ量」の、その考へ方を一歩進め、そのような「奇妙さ」をもたらす本体を究明して、その「元」を探るべきであろう?……

さて、私達がカタカムナ人のカムヒビキを、現代人にとって、(註Ⅱ)大いに参考になるとするわけは——代数で、わからぬものを「x」とおいてから、だんだんに、そのわからぬ「x」を解いてゆくように、現代科学が、最近に至って、はじめて素直に、「奇妙さ量」として認める気になった、その「x」に当るものを、私達の祖先のカタカムナ人は、〈カム〉と称して居るからである。彼らは、現代人のもうもって居ない鋭い体覚によって、潜象（カム）の「アマ始元量」を感受し、その物性を美事に把握して居たのである。カムヒビキは、電気現象や、時間空間量の問題をはじめ、現代科学では、まだ全くのナゾである、生命の起源や、天体の発生、精神現象等についても、我々の科学常識では思ひもよらぬ、広大なスケールを以て、大局から高度の判断を伝へて居るのである。

分子や原子、光量子等に当るものを予言して居たとか、光が粒子である等といふような、アイデアをもった人は、紀元前の昔から存在し、さほど珍しい事ではない。そして、それらは、単に個々の見解にとどまる場合もあり、又、一応その人なりの宇宙観を以て、体系化され、あるひは又、社会的、政治的精神的な問題とも関連した、哲学思想に構成される場合もあった。従って、一般の常識からすれば、カ

タカムナの「直観物理」と雖も、せいぜい、それらと大同小異のものに違いないと、よく読みもせずに片づけられてしまふ……。しかし、もしその程度のものにすぎぬなら、私達が、殊更に、とりあげるにも及ばないので、そのような程度のものでは決して無いといふ事を、心ある人々に、正当に説明するのが、私達訳者の立場である。私達は、あくまで批判者であり紹介者であって、審判者ではない。

(註Ⅲ)天然自然の美的成り立ちや美的機能構造　天然自然といふもの自身に、「美」の意識はないが、天然自然の為すワザ、つまり、空や雲や星や海や山や石や花や鳥や人体等々のスガタに、「美」を感じ出したところに、人類の文化の発祥、人間的心情の芽生えがあり、その「美」とは何であり、どうして天然自然が、このような「美的」な成り立ちや、「美的」なハタラキを示すのか？　を解明する度合や様相を以て、その民族の文化のレベルやニュアンスが表はれると言へよう。

絵や彫刻や音楽詩歌等の芸術とよばれる分野は、直截に、この「美」を指向し、「美的なワザ」に参加するものであるが、「美」は芸術や文学や美学等だけが扱ふものではない。各種の方面に分化発達した学問や技術も、又、人々の日常生活も、要するに、この天然自然の「美」に感応し共鳴するまでに内容が充実するのでなければ、真の文化とは言へぬし、科学も、天然自然の美的機構、則ち機能と構成を、充分に説明できるものでなければなるまいと思はれる。

画家が対象を見つめる眼は、画家の自由な選択にまかされて居るが、しかし、ここぞと思って、画架をすえて眺める、その場所が、実は、その辺で、最も電圧の高い地であるといふ「美観電圧」の物理と一致するのである。(第一号参照)則ちそこから眺める風景が最も美しく、人は、そこに立てば最も快

くなり、それを「美」と感じ、画家は絵ごころをそゝられるわけである。そして、そこで描かれる美の創作には、画家個人の能力だけではない、その地の高い電圧、則ち、アマココロ（アマ始元量の微粒子）の参与（アマウッシ）がある。「天才」といふ言葉をつくった人は、まさにこの、「アマ（天）のハタラキ（才）」といふような直観があったのであろうか……。仏像を拝するにも、最も崇高な美を感じさせる場所があり、家を建てるにも、ものを置くにも、最も安定した、落着きを得る場所や方角がある。それにかなへば、人は健康になり、精神も和らぎ、何よりも気持がよくて、即ち、そのような場所は美しく、そこにあるものは「美」を感じさせる、美的機能構造をもつのである。カタカムナの上古代人は、電圧など計らなくても、自分達のスナホなカンによって、それらを知って居た。（イヤシロチ・ケカレチ）。我々は、電圧計で測定して、はじめてナルホドと頷くのであるが……。とにかく科学が、現象面に表れたものや、実用に役立つもののみを追ひかけ、手におへぬものは勝手にカットし、見えないものは無視し、「美」などは、科学が扱ふものではないといふ態度では、困るのである。

茶の湯の手前を「美」とみるなら、懸命に働く人々の姿や、心をこめて語る人の顔からも「美」は発散して居る。「美」を扱ふ筈の芸術や文学の作品に美でないものもあれば、「美」を扱ふつもりのない学者の論文が、格調の高い美しさを示すことがあるのも、おのづからその人々の人柄の、「美的」レベルをあらはすものである。

上流智識人はともかく、「美」などとは全く無関係にみえた、古来の貧しい人々の生活の中に、世界のどの民族にも稀な、実に美的な民芸品（日常の生活用品や手仕事の道具とかオモチャ等々）を、手近

の材料で、安価に、まことに豊富に創り出して居た日本の庶民は、無意識の裡に、みづから、天然自然の為す「美的」なワザの中に、とけこんで、生きて居たことになる。

しかし、無意識でやって居ることにはモロサがあり、いつ覆されて、消滅するかもわからない。「美」は、やはり、人間の知性が、それを「美」とサトルところから、「文化」と言ひ得るものが、昇華されてくると思はれる。

ただし、民芸品が高価な飾りものになり、何もしらずに、美しい民芸品をつくって居た無名の庶民が、なまじ意識をもち出せば、もはやそこから、本来の「美」は失はれることになる。とかくこのような事が起って、古くからの美しいものが、近代化の波と共に亡び去ってゆくのは、まだ、その「美」をさゝへる「知性」の度が、民族的に未熟の故であろう。

我々が外国を旅行し、日本では見られぬ華麗な宮殿や、豪壮な寺院の美に感動する一方、たまたまゆきずりの町角の、民家の窓の手摺りの鉄細工の模様や、その窓辺に咲いて居た色鮮かな花とか、又、名もしらぬ田舎の村で、ふとみつけた、小さなロマンの教会のたたずまいの素朴さとか、その中でヒッソリと、ひとり膝まづいて居た女の姿、あるいは古い家並の軒につるされて居た、古風なランタンや、パン屋や鍛治屋の古めかしい看板……等といった、何気ない平凡な、昔からの庶民の生活のスガタの、その健やかな落着きの確かさ、美しさにいたく打たれる事があるのは、この間までは、日本にも至る所にみられたものが、今や急速に、あるいは殆ど失はれてしまひ、かへって遠い異国で、はからずもそれに出あったことへの感慨であり、それは、又、我々の「美」の感覚には、**民族の根**の共通性がある事

を、考へさせてくれるのである。

今のところ日本最古の遺物とされて居る縄文前期（一万年以前に及ぶ）の発掘品には、文句なしに、我々を感動させる強い迫力がある。その力強さとは、もう現代人にはマネのできぬ、豊かな生命力の発現である。そうした力強さは、他民族の古代の遺物からも感じられ、それらが、人類に普遍の「美」の真理を衝くものであればこそ、現代人の美感覚にも訴へるのであろう。

天然自然は、人間が気がつかなくても、つねに「美的生産」を続けて居る。天然自然の許容力は無限に大きく、彼らの側から人間に挑戦してくるものではない。人間が、それをサトリ得た分だけ、その機構が明らかになってくる。

人間が、天然自然に反抗して、人間独自の美をつくらうとしても、所詮人間は生きて居る限り、天然自然の支配をまぬがれる事はあり得ず、たとひさからって死んでみても、天然自然のフトコロに還元する速度を、少々早めただけである。

シントメリーを「美」と感じる美学に対し、密度差のあるカタヨリや、ヒズミをも「美」と感じる「感じ方」を我々日本人は、カタカムナ以来もって居る。しかし、カタヨリやヒズミは、不安定な状態で、本来は、カタヨリやヒズミのない状態に復元しようとする、動きが伴って居る。しかるにカタヨリやヒズミの「美」にひかれすぎることは、偏執的な好みにふける事になり、自虐や自滅の危険に陥る。どうしても、カタチに表れたものの「背後」（カム）に、最も根元的な〈ヒビキ〉を感じるだけの「直観力」なしに、芸術を創作し、「美」を究明する行為が「マトモ」に動き続ける筈はないであらう。カタ

ヨリやヒズミに「美」を感じうるのは、その「背後」に働いて居る、目に見えぬ「大きな力」を見て居るからこそである。しかるに、ただカタヨリやヒズミをもてはやせば、徒らに奇異を追うて、ゆきつく所は破滅しかないが、「美学」の理論としては、それも一種の、反の美 といへない事はない。

人間が、天然自然の風物や、人間の肉体や顔に、「美」を感じ、しらずしらず「美」にひかれ、美を求めて、研鑽するのは、鳥や虫や花や、毛ものの世界にも通じる、普遍のスガタである。則ち、女性を求めて、男性の間に陶汰が行はれ、「男性美」の選択権は女性にあるが、女性も亦、そうした陶汰に堪えた、優秀な男性の愛情と好みにこたへて、「女性美」を高め、そのように、男女が相互に研鑽することにより、劣ったものは亡び、優れた種族が生き残る、といふのが、健全なスガタである。

人間が、天然自然の「美」にひかれて、しらずしらず、みづからを高める結果になるのは、要するに天然自然の「美」に感応して、みづからを「起励」するからである。そして、みづからの振動が高まり、天然自然のヒビキに感応しうるまでに高調したとき、人は、天然自然の「美」の根元を、カイマミル事ができるわけである。そのような「美」の「根元」を、知りたいと希求するおもひは、人間の最も純粋な知性の発動であり、どんなに強い物質や名声や智識等の欲求よりも、高次のものである。なぜなら、「美」の「根元」を知るとは、宇宙の森羅万象を生み、我々の生命を生むモトを知ることになるからで、それが「アマ始元量」である事を、カタカムナ人はサトったのである。

「美」にも、さまざまの種類や、スケールがあるし、又、「たで喰ふ虫もスキズキ」ではあるが、「美」の感覚の洗練の、マトモさの基準は、どこに根拠があるかと言へば、結局アマの密度差、則ち、「奇妙

さ量」の多寡によるといふ事になる。

要するに、彫刻や音楽等の芸術的創造も、人間の側の能力だけで、真の「美」がつくられるものでは決してない。といって、そこに神秘思想をもちこむ必要も無い。芸術のみならず、凡そ宇宙の万物万象の成り立ちや、機能構造の根源に、アマ始元量の存在を直観した、カタカムナ人のサトリによって、私達は、始めて **美というものの発動する、根拠** を知ったのである。

註（Ⅳ）**奇妙さ量**　現代の科学者が、ストレンジネス（奇妙さ量）を認めたといふ事は、従来の科学の態度にはなかった、大きな転換である。今までにも、科学では未知の、神秘な未解明領域がある、といふ事は謙虚な科学者は皆わかって居ながら、しかし、神秘思想じみた言ひ方は忌避して来た。ところが「タキオン」のようなものが出現し、今までの科学智識では、何としても説明がつかないから「奇妙」なのである。物理学者のみならず、生命の起源を探求する人々の間にも、「奇妙さ量」を設定したい気持は、大いに動いて居るようである。それをスナホに「奇妙さ量が多い」と認めた科学者があるといふ事は、敬意を表すべき事件である。

ただしかし、それが単に「奇妙さ量」といふ次元にとどまって居る限り、それは、一般人が漠然と抱いて居る「神」や「仏」等の「造物主」の概念と、さして変り映えが無い事になり、科学が神秘を受け容れたようなことになる。いやしくも科学者としては、そのような事は憚かられる、といふ抵抗があるわけであらう。

カタカムナ人は、「奇妙さ量」などといふ事は言って居ない。そこで私達は、とにかく、現代の我々よりも、確かに「感度」の良かった上古代人が、鋭い直観によって感受し、勘考して述べて居る言葉に謙虚な眼をむける態度になってこそ、真の科学精神の発揮ではないか？　と言ひたいのである。

しかしながら、現実に於ては、カタカムナの直観物理を解説して、現代の一般科学の理論に無い事を言ひ出せば、忽ち横槍を入れられる。権威ある専門家に、「非科学的だ」と否定される事は、一般人にとっては、「無価値である」と烙印を押されるのと同じである。「奇妙さ量」を認めた科学者はあっても、「アマ始元量」の存在を認める事は、現在の科学常識では不可能である。しかし、何らかの形で、「アマ始元量」の存在を認めぬ限り、科学は「真理」を見出す事はできない。

「真理」とは、単に科学上のものであるばかりではなく、人間の精神の問題についても同じく真理であるから、古来の哲人の中には、「アマ始元量」の存在を体験的に直観して「真理」に到達した人々があり、その境地は、「正覚」とか「悟り」等とよばれ、世界的な「間主観」として、古今東西を通じる「真理」と認められて居る。孔子が「天命を知る」と言ひ、アソカが「人天交接」と言った言葉等は、明らかに、この「アマ始元量」のサトリに達した消息を、表現したものと想はれる。

しかし、孔子やアソカは、「科学者」ではなかったし、彼らが仮りに現在に生存して居ても、ノーベル賞の候補には上らなかったであらう。我々は一般に、ノーベル賞とは、人類最高のものに与へられると思って居たが、しかしよく考へてみれば、ノーベル賞を定める審査員の、能力以上のものに対しては、審査不能である。科学的にその存在が確認されぬ限り、現代科学では、「アマの元」を認めるわけ

には ゆかぬ立場であるから、依然として、真理の探求は、孔子や釈迦等にみられるような、個人の体験の域に止まり、科学はガンコに、真理への眼を、みづから、ふさぎ続ける事になる。

▼アマ始元量の仮説　今のところアマの元に基づくカタカムナ人の直観物理は、単なる仮説にすぎない。しかし、仮説といふものは、それがマトモなものであれば、必ず後世の研究によって、承認されるであらう。現代人の科学をふりかへってみると、我々が子供の頃学習した理論は、もはや古典理学といはれ、質量の元は崩れて、時間空間の元にとって代られ、粒子性・波動性の重畳理論の出現によって、現代理学に衣替へされた。しかし今日では、既に、時空の元も破綻を来し、しかも、替るべき理論がまだみつからぬといふ有様である。

今日の科学は、もはやヤミクモに、偶然を期待した、マグレ当りの研究の時代ではない。真摯な科学者が、一生をかけて、地道に、丹念に、一つのテーマを微細に追究するには、単なる思ひつきに任せるのではなく、その奥に、科学者自身の哲学があり、基本方針があるのでなければ、真に価値高い研究は生れない。大規模のグループ的研究にしても同様で、研究者として何よりも肝腎な事は、「本質」と「方向」を見抜く、「カン」の鋭さである。

現代科学に抜けて居るところは、「本質は何であるか?」といふ洞察である。例へば、電気のハタラキはわかるが、電気の本質とは何か?　磁気の現象はみえるが、磁気の本質は何か?　原子・素粒子の本質は何か?　光・熱・力・電磁波・輻射・時間空間・万有引力等々として、科学が捉へて居るものの本質は一体何か?……又、人間の発生が、亀や蛙や魚や、植物とも「相似象」である事はつきとめた

が、さて、生命の本質とは何か？　心とは何か？　精神現象の本質は何か？　美とは何か？　善とは何か？　等々の本質的な質問に対しては、皆ゆきづまって答へられない。物理で求める生命質の最下限が、分子下のレベルで手をつなぎ、物質の電気現象と、生命の電気現象とが、結びついたことはよかったが、それなら、生物と無生物の区別は？　となるとハッキリと説明できない。

科学がもう少し進歩して、さまざまの分野で奇妙さ量に突き当り、それらが指向する方向をつないでゆけば、イヤ応なしに、カタカムナ人が〈アマ〉と称した「始元の量」の存在にゆき着くしかないであらう。それを何とよぶかは自由であるが……おそらく現代人は、それを、「思考」によって追ひつめるであらうが、上古代人は「直感」によって感受し、太極から全体を達観して、大づかみに本質を把握し、本性を観じ、そこから、「相似象」として、微視的なものを勘考し、生命質や物質の最下限の生成過程をサトったのである。

「顕微鏡もなかった時代に、現代の我々がようやく発見したような事まで知って居た筈がない」と思ふのは、大きなアヤマリである。巨察がマトモであれば、微視は「相似象」で観じ得るものである。しかしアベコベに、微視的角度から入った現代科学が、迷路に陥って居るのは、巨察の能力が乏しい故である。その点カタカムナ人の直観物理は、モノが現象（カタチやハタラキ）として現はれるモトの、本質を、直感によってサトったところから出発して居るので、顕微鏡や望遠鏡的観測の技術に於ては、現代科学の比ではないが、しかし、なまじイキナリ微細構造から入りこんで、本質を見失ふよりは、マトモである。現代人が、本質究明の方は手が出ぬままに放置し、末端の、いぢくれる所を微細につついて迷

路に入りこみ、その種の研究の成果が、数多く発表される事を以て「科学の進歩」と称してみても、実は「アンバランス」な状態を出ない。個々の研究の中には優秀なものがあり、カタカムナの直観物理に接近するものがあっても、綜合すれば、さほどでもない事になる。

科学といふものが、全体的にはアンバランスで、それぞれの専門家がたてこもり、部外者を寄せつけぬといふ有様では、専門外の者が、正しい知識を得たいと思っても、結局、科学としては、頼りないものを押しつけてくる事になり、我々は、それを、アイマイのまゝ、ウノミに丸暗記するしかない。現に、中学校などで教へて居る、電気の初歩の説明ヒトツにしても、陰極陽極の名称すら混迷して居る為に、子供心に、「電気といふものは難しいものだ！」といふ第一印象を、強く焼きつけてしまふツミは深いものである。「電子」が「電気の子」と書くなら、電気にもオヤがあるのか？　電気は一体どこから生れ、消えてどこへゆくのか？……　このような素朴な子供の質問にも、現代科学は明答できない。又、例へば、小学校の理科の授業で、真空の実験を示され、真空の中には、「ナンニモ無い」と教へこまれて育った我々には、真空の中でも、酸素や水素等の物質は無くても、目には見えないが「何かがある」と感じ、又、原子の内部にも、宇宙の真空中にも、「ナンニモ無い」とは考へなかった、カタカムナ人の直感を、スナホに受け容れる事が、非常に難しくなってしまったのである。

このように反省してみると、その点、上古代人の直感はスナホで、「電気（イカツ）」といふモノも、毛髪や、皮膚や毛皮をこすっても、その存在が認められるし、男女の接触にもあらはれ、又、雷（イカツチ）のように、大気の中にも存在する、身近なモノ、といふ感じから、サヌキ・アワの男女の、「正

反の電気性」としてとらへ、直感のおもむくままに思考を進めて、天然自然の成り立ちのような巨大現象から、原子以下の微細なものに至るまで、「相似象」として、一貫して、その本質、本性を把握して居るために、その説明の趣旨は明快でスジミチが通り、素人にも、その道理が、スラリとのみこめるのである。電気（イカツ）のオヤが何であるか？　のみならず、兄弟も、オジもオバも祖父も祖母も、そして又、マゴも、ヒマゴも……といふ風にわかるのである。

「専門家」になる為なら、従来の学問を勉強する必要があらうが、マトモな常識を得る為なら、カタカムナの直観物理を学ぶことが、最も能率のよい勉強法である。なぜなら、専門といっても、従来のものは、いはば跛行の学問であるから、結局は、末端で混迷し、キリキリ舞ひをさせられて居る事に自分では気付かず、高度の学問に携って居るように錯覚して、ガンコに他者を寄せつけぬ、気狂ひじみた姿に陥る危険も出てくるからである。

そのような事になるのは、科学自身に狂ったところがあるので、それには、何かの「標準」を示さねば、その狂ひに気がつく事は出来ない。その意味で、狂って居ない、基準となるものは何か？　と言へば、私達にはカタカムナ人の直観物理がある。

しかるに、そのカタカムナ人の直観の内容が、従来のような、神秘思想によって翻訳された「神話」などであっては、その役を果す事は不可能である。そこで、それが単なる神話などではなく、「上語（カミカタリ）」として、その誤訳を整頓すれば、こういふ意味になり、このように体系化される、といふものを示して、将来の科学の進むべき方向の参考としても、又、一般常識としても、とりいれ得る形にしておくこ

とが、カタカムナ文献を解読した者の、責任であると思ふのである。

今までのように、科学も哲学も芸術もバラバラでは、どこに人間としての、正しい学問の道があるのか?……我々のあとから生れ育つ者に、又、我々と同じアヤマチを繰り返へさせるしかなく、個々バラバラの専門の一つを、如何に細かく勉強してみても、人間としての正しい判断力が、養はれるものではない。むしろ逆に、マトモな判断力を、迷はせることになる。

私達は、自身が科学を学んでみて、せっかく一生懸命苦労して覚えた事が、ハシから修正され、根底から覆へされる。このような事の無い、もっとドッシリした学問はないものか?……と思はざるを得なかった。権威ある学会の定説が、次の時代には否定され、当時無視されて、不遇のうちに死んだ人の意見が、正当であったとしても、誰も責任をとらず、むしろ、科学の進歩と称して、疑はれもしない。……真に鋭い直感に基く理論であれば、科学の発達と共に、その正当さは実証され、理論の精密の度が加はる事はあっても、根底から、訂正しなければならぬ事はない筈ではないか?

しかしながら、いかに鋭い直観が大切だといっても、現代にあっては、科学に素人の思想家の思いついた理論では、一部に鋭いものがあって、一般人の信頼を得る事は出来ても、高度の「科学識」の批判に堪える事は出来ない。どうしても、鋭い直観と、高度の科学識の伴った、「勘考」でなければならないのである。

**▼カンとヒビキ**　スナホな気持で考へてもみても、人間は、偉そうな事を言って居るが、地震一つ予知

できぬではないか？　自分の健康の為に良い食べものと、有害な食品との、判別さへもつかぬではないか？　又、恋愛結婚をしながら離婚する等、配偶者の撰択すらしばしば失敗する。人間以外の生物は、そんな事はないし、天候気象の異変なども、前以てわかって居る。そのような能力のある、生物の「体覚」といふものを、もう一度、マジメに見直すべきではないか？　運動や芸能方面のみならず、機能といふものは、訓練次第で、大きく発達するものである。人間の本来もって居る筈の生物体覚も、スナホな方向に訓練するなら、五感的な機能のみならず、思考的な知性をも含めた人間性の全般を、正常に発揮させ得る筈であって、そのような人間の発達の可能性の、人類的な一つの「頂点」を示すものが、この、カタカムナ人の「直観文明」であったと思はれるのである。

思考の前駆となるカンが鋭くなければ、マトモな発想の出るわけがない。このカンこそ、生物が、誰でも有って居る「本性」に基くものであり、その「本性」は、宇宙天然のすべてのモノに通じる「基盤」である。天然自然の様相は、絶えず変化し、その動きは、刻々に、人間の耳に聞える「音」となり、あるひは、人間の耳には聞えぬ「ヒビキ」として、宇宙空間に伝播して居る。すべてのモノは、この「ヒビキ」の中で、文字通り、その影響のもとに存在して居る。その「ヒビキ」を、イチ早くとらへて、対処するのが生物の「カン」である。自然界の生物、虫や鳥や毛もの達は、今でも皆それをやって居る。ところが、現代の人間は、そのような体覚は、甚しく劣化して無きに等しくなってしまひ、一方我々の科学は、まだそのような「ヒビキ」とは何であり、どこから発して居るのかといふ事を、解明し得るだけの智識をもって居ないから、さまざまな「ヒビキ」が伝播して居る事を、殆ど無視して居る。

（僅かに宇宙線、タキオン、未知領域等のある事を感づいて居る程度で、電磁波や万有引力の出所も明らかではない。）

しかしながら実際には、宇宙空間に於る天体の発生には発生の、消滅には消滅の、星の爆発や衝突にも、大星雲の流れにも、銀河系や太陽系の移動にも、地球や月の運行にも、そして又、地球上の諸現象にも、およそ森羅万象には、それぞれ独自の「ヒビキ」が伴って居る。我々は当然、それらの「影響下」に生きて居るのである。

それらの「ヒビキ」を、生物的な鋭い「カン」を以て感受し、単に無意識に対処するのみでなく、人間の思考能力を最高度に駆使して、その意味をサトリ、人間語では無いものを、人間の声音にうつして、表現して示したものが、カタカムナの〈カムヒビキ〉なのである。現在のような時代に、このカタカムナ人の、これ程の高度の直観内容を、神秘思想の神話のまゝにしておくといふ事は、あまりにもモッタイない、不幸なことである。（カンの項参照）

▼**科学の大転換**　近代科学に圧倒されて、「科学」の範疇には入らぬ、先人の稀有な体験の如き、貴い遺産まで、哲学とか文学等に分化された学問の、単なる一部門に片付け、すべてを、科学に追従させて居る、現代人一般の態度を改めるには、科学自身が、大転換をするしかない。バラバラに末端を修正する程度では、徒らに修正に追はれるのみで、いつまでたっても、「根本的なもの」にゆきつけない。最も「根本」から入るには、どうしても「生命」とか、「電気」といふものを扱はねばならぬ。

なぜなら、古来、人々が、心とか霊とか魂とかダイモンとか、天とか神とか仏とか、生命とかとよんで、神秘の対象として居たものの本質を、又、愛とか慾とか悟りとか徳とか、自由とか、真理とかよんで、追究して居た人間性の本来性を、又、聖者とか、正覚者とか仙人等といふ表現で、示さうとして居た境地の正体を、そうしたものを、従来のような、文学や哲学や宗教などの、情緒的な説明としてではなく、どうしてもその意味を、ハッキリと、科学的に、根元から、解明するのでなければならぬからである。そこから体系化されるのでなければ、科学の大転換は出来ない。部分的に修正されたものは、又すぐに矛盾が出てくる。どうしても、物質と生命質を一貫して、我々の生命が、宇宙のイノチにつながる、もっと大きな規範を示しうる科学でなければならぬ。それには、真に鋭い直観によるしかない。

現代科学を否定せよといふのではない。実証実験を厳密に規制する、従来の科学の基本態度は、あくまで尊重されるべきであり、その功績の面も、大きいからである。そして又、現代科学を推し進める勢は、歴史的に必然のものであって、好むと好まざるに関らず、止めようとして止るものではないが、同時に、一方に於て、別体系の科学が育って行ってもよいといふ事である。ものにはすべてフタッ（正と反）のカタチのあるのが、自然の相（スガタ）である。科学のありかたも、従来のような一つのものに固定せず、フタスガタがあってよい筈である。

則ち、各種のデータを、綜合的に判断する、**直観の哲科学**の重要性を認識し、高度の直観を尊重し、その訓練を必須条件とする学がなければならぬ、といふ事である。

要するに、真実を、どこで把握するか？……である。事実の様相の、一部を以て、真実なりと思い違

へる事なく、真の支配的な関連が、どこにあるかといふ、真相の把握が深くなければ、ほんとうに広い視野から、個々のデータを、取捨撰択する事は不可能である。そして、そのような高度の判断をなしうる為に、今のところ、人間の「直観機能」以上に感度のよい観測器は無いのである。従来の科学的な観測手段によるデータの収集のみでなく、「人間の直観」といふ最高の観測器の活用を、もっと重要に考へるべきではないか?

現代科学も将来修正されるかも知れぬが、……ともかく、西洋の土に発祥した科学のみが、人類の学問ではない。私達は、現代科学にさからふのではなく、それとは別に、カタカムナ人がカムヒビキとして把握した「コトワリ」を、現代の我々は、かく考へる事ができるといふ「仮説」を示し、現代科学の見解を、部外者として攻撃するのではなく、やはり科学で苦労した、内部の者の反省として、打ち出しておく事が必要であると考へたのである。則ち、科学を学んだ者の中から、従来の科学を大転換する考へが出るのも、これ亦必然の勢であろうし、それによって、「真理」と「科学」を結びつける、カケハシも通じるであらう。

カタカムナ人のサトリを、体系化するに当って、私達が、最も心して、厳に自誡して居ることは、従来の科学的思考で、カタカムナ人の直観物理を理解しようとしても、それではダメだといふ事である。科学智識は、直観物理の内容を、翻訳し説明する為に役立てるのはよいが、上古代人の「直観」には、我々もやはり、「直観」を以て、「共振」してゆくしかないのである。彼らは、鋭い体覚で感受した直観に基いて「勘考」して居る。彼らの直観して居ないものまで、現代人が思考でアレコレ論じたり、あま

つさへ、彼らの直観内容を、現代人の「思考」で修正したりする事は、極めて危険である。

なぜなら、現代人の直観知性は暗く、どうしても、科学的思考のクセが抜け難いからである。我々が、いかに、鋭い直観知性の重要さに気づいて居ても、もはやこのまゝでは、自力だけで、天然自然のヒビキを、直接に聴くことは不可能である。私達は、我々の判断に、ワザワヒをもたらす思考のクセをおさへて、彼らの残した言葉を、卒直に聴く態度になるまでに、三十余年間、上古代人の直観を実習して来た事になる。

カタカムナ人の直観に対しては、現代人も、それ以上の直観を以て迫るしかない。直観性能は劣化したけれども、態度としては、彼らと同じスナホさになる事はできる。それに、彼らの時代と、現代との間には、人類的に育って居る、数万年(?)の経験の蓄積があるのであるから、私達としてはそのプラスの面を発揮して、要するに、「レベルの高い直観」を以て、迫らねばならぬといふ事である。「レベルが高い」といっても、本質は、あくまで、カタカムナ人の如き、生物の本性に基いた、「性」「食」の本来の「ナリ」(本能)の「自然さ」を見失ってはならぬ。

現在こゝろある人々の間で、屢々「自然に還れ」とか「原点に回帰せよ」「心の故郷」「初心に立戻れ」等と叫ばれて居るが、さて、それなら、その立ち帰るべき原点が、何であるかを究明するのは、「哲学」の専門か?「歴史学」の分野か?「芸術」の領域か?「宗教」のナワバリか……といふのでは困る。

▼大学と小学　今までにも、科学者の中には、自身の精神のよりどころを、孔子や釈迦やキリストの教へに置き、意識無意識に、それを精神の支へとして、専門の研究に従事する、といふような結びつき方はあった。同じく顕微鏡をのぞいて居ても、そこから重大なモノを見出す人もあれば、見過してしまふ人もある。同一人でも、以前は見落して居たものを、精神的に成長した後年、たまたま発見し、念の為、以前の写真を調べてみたら、チャンとうつって居ながら気付かなかった事に、我ながら驚く、といふような事もある。

どのような生き方をするにせよ、何の専門に携はるにせよ、人は、日夜、自分自身の、「ココロ」とか「アタマ」「イノチ」等とよばれるものの、支配下にある。言ふまでもない事であるが、ココロやアタマやイノチは、それを専門に研究する人々、たとへば宗教家や哲学者や生物学者等だけが、とりくむ問題なのでは決して無い。意識しようがしまいが、誰しも、その時その時の、自分のココロやアタマやイノチの条件に左右されて居るので、それ故に、同じような与件に対しても、さまざまの違った結果が出てくるのである。

孔子はつとに「大学」と「小学」を分け、「小学」とは、今で言へば各の「専門の学」をさし、それに対し、いやしくも人間である以上、誰でもわきまへねばならぬ、生存の基本態度とはどのようなものであるか？　といふ、いはば、ココロやアタマやイノチの「根本問題を究明する学」を、「大学」としたのであった。しかるに、そのような哲学的な意味をもつ「大学」といふ言葉を、西洋の歴史の中に発生し、「綜合」の意味をもつ「ユニヴェルシテ」の翻訳にあててしまった明治時代人の感覚に、アヤ

マリがあったのである。従って、「大学」といふ言葉の本義に基けば、「大学」とは、文科理科等の、区別以前のものであり、どれ程の専門の大家の学であっても、それだけでは「小学」なのである。

科学が、ココロやイノチなどは扱はぬといふのであれば、単なる「小学」であるから、科学者の中でも、「大学」を求める者は、専門の学とは別に、個人的にココロやアタマやイノチの問題にとり組むしかない事になる。学問が、文科系統、理科系統に細分化されて、専門的に発達したのは、既成の事実であるが、その為に、ココロやアタマやイノチを扱ふ「大学」を、オロソカにしてしまった事は、近代人の最も大きなアヤマチでった。

ココロやアタマやイノチの問題は、単なる哲学や文学や心理学、理学等の、専門分野の扱ひに、分割してすむものではない。「専門」などの意識無しに、古今の哲人達が、期せずして、挨を一にして指向して居たものを、カタカムナ人は、「ズバリ」と直感で把握し、有史以来の哲人達が、苦辛に苦辛を重ねたあげく、体験的な用語を以て、個人的見解として、文学的哲学的に述べて居た事を、カタカムナ人は、やさしい和語で、極めて端的に、卒直に、しかも現代の科学用語以上の適確さを以て、表現して居たのである。

正直に言って現代の我々は、理科系統の諸科学に於ても、文科系の諸部門としても、ココロやアタマやイノチのような「大学」の問題は、まだ扱ひきれないのである。

思へば既に孔子の時代に、孔子が「大学」と「小学」を分けて、「大学」の意味を、あれ程に強調しなければならなかった、といふ事は、我々に、改めて、大きな反省の念を起させる。そもそも「小学」

といはれる専門が、いろいろに分化して、研究を進めるようになった、そのもとはと言へば、「大学」で目指して居る、人間の「本性」「本質」といふ問題を、よりよくわかり、人類の文化度、幸福度を、高めたい為に他ならなかった。そのソモソモの気持が失はれて、個々の専門が割拠するようになり、……孔子が、イニシへに学び、堯舜の「古代」を想起して、そこに、回帰すべき民族の「原点」を観じ、生涯を賭して注意を喚起した、仁や徳などの「大学」の道までもが、「哲学」といふ専門の学の中の、しかも、「東洋哲学」といふ一部門に閉じこめられてしまったのである。

そのような有様になったのも、孔子の「仁」や「徳」といふような表現は、個人の体験的なもので、一般理論化が出来ぬ為の、後代人の誤解にも原因があるが、孔子自身の目ざした「カン」は、あくまで正しかったのである。そして、この孔子のカンのようなマトモさは、いはば人間の「平衡感覚」のようなもので、どちらかに一寸傾いても、セツナに異和感が出る。それは生物的なカンである。そのようなカンは、いつの世、いかなる民族に於ても、無意識に、人々のココロの支へとなって生きつづけて居るものであるからこそ、人間の真理は、古今東西、変らぬものとされ得るのである。

縁あって、このカタカムナの「ヒビキ」に触れた人々は、従来の固定観念にしばられずに、少くとも、最近の科学が「奇妙さ量」を認めた態度になって、彼らの世界に接してみて頂き度い。彼らの表現は、単純のようであるが、非常に集積が多いから、現代科学の智識を以て、それをみると、恰かも彼らが、遠い将来を、鋭く見透して、「予見」して居たかの如くに思はれ、現代人が、最先端をゆくつもりの、例へば半導体や原子核科学の物理に対しても、又、反物質の発見についても、既に「直観ではこう

だ」といふ解答が、ズバリと示されて居たことに、驚嘆させられるのである。

この事を真に驚き、この「オドロキ」を、「真剣」に吟味するのでなければ、今の時代に、大昔の、神話を、科学がとりあげる意味は無いであらう。

私達が、「カタカムナ」人と指摘する上古代人を、所謂、一般常識の「古代人」といふイメージによって、類人猿的な姿で想像し、善良ではあるが、知性の低い、無力な未開野蛮な人のように、混同してはならない。大昔の人が皆、我々よりバカで、何も知らなかったように、思い上る現代人があるのは、トンデモない事である。又、ニューギニヤやアフリカ等の未開の山野を調べても、カタカムナ人の生態はわからぬであろう……。

「今の世に、堯だの舜だの、孔子だのアソカだの、あまつさへカタカムナ人などとは、時代錯誤も甚しい」、といふような、一般常識を以てしては、真の「人類的な反省」は不可能である。

カタカムナの直観物理の内容と、現代科学の見解とでは、一致するものもあるが、全く常識に反する事も多い。現代科学の理論の中で、どうもスジが通らぬところは、直観物理にてらしてみると、新しい示唆が得られ、現代科学がまだわかって居ない領域については、直観物理の内容を参考にして考へれば、道が開けるといふわけである。要するに、部分的に、カタカムナの直観物理の内容を、現代科学の智識で述べればこういふ事であると、説明することは出来るが、残念ながら、まだ、我々は、現代科学の智識を以て、直観物理の内容を、全面的に証明するには至らないといふ事である。しかし、我々は、

直観物理の「マトモ」さを、認め得るだけの「科学識」はもって居るから、それによって、現代科学を「反省」する事は出来るのである。従って、現代科学を信奉する人々にとっては、カタカムナの直観物理は甚しく抵抗があるが、現代科学に疑念をもつ人々にとっては、心が動き、大いに魅力がある筈である。

要するに、日本人が、西欧人から見て「奇妙さ量」が多いとうつるのは、日本文化の起源に、現代科学では未解明の潜象の存在を観破した、カタカムナのサトリ（高度の哲科学）の基礎があったからであった。そして日本文化は、現代まで、「日本語」を通して、その伝統を無意識の裡に受けついで居たという事が、楢崎皐月のカタカムナ文献の解読によって、ハッキリと認識されるに至ったのである。

（昭和四十七年一月十八日）

# 三、カムヒビキ　第一部

## （一）〈タカマクラ　ナナヨツギ〉を表現する表象物、〈ヤサカノマガタマ〉に関するカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
ヤホ　ヤチホ　　ヤサカ　マガタマ
アメ　アマヒ　　アキツ　ナナヨノ
タカマクラ　　ヨロヅ　ハジマリ
イツノタマ　　アキツ　トヨクモ

アメノウケ　コゴリ　コゴリミ
ヒジリタマ　アキツ　フトヒノ
アマヒクラ　ヤタチ　ホホデミ
イワネタマ　アキツ　アサヒノ
ヒコネクラ　ソトヨ　ニギスム
エミノタマ　アキツ　ヒコネノ
ホシマクラ　ウヅシマヒコユヅ
ウヅメタマ　アキツ　ホシマノ
サタテクラ　ヤシキハルホシ
ナリマタマ　アキツ　タカマノ
フタセクラ　オホキ　アソフク
クシサチタマ　アキツ　ヤサカノ　アラカタマ

先づ〈タカマクラ　ナナヨツギ〉の意味から述べよう。〈タカマクラ〉とは、宇宙の天体の座、則ち天球の全体を意味する。〈ナナヨツギ〉とは、「七の数で規制される周期現象」といふ事である。別項で説明するように、この「七の周期性」は、相似象として、人類の歴史に重要

な関連を及ぼして居る。

▼この事は、現代科学では、まだ充分に説明できないが、たまたまこれに該当するとみられる調査の実例があるので別項に解説する。

我国上古代のカタカムナ人は、その「七の周期性」の原型パターンとも言ふべき相（スガタ）を、宇宙の恒星空間に於る、星座の新陳代謝する相に見出した。つまり、天体の変遷が、「七」の周期性をもつことをサトリ、その事を、タカマクラのナナヨツギと言ひ、このサトリを、七種類の単玉に托して表現し、それを〈ヤサカノマガタマ〉と称したのである。則ちその七種類のマガタマのそれぞれを、イツノタマ、ヒジリタマ、イワネタマ、ユミノタマ、ウヅメタマ、ナリマタマ、クシサチタマと名付け、口絵のような形で、ナナヨツギの表象物として示して居た。前掲の、五七調で綴られたカムヒビキは、それらのタマに托された意味を述べたものである。彼らの鋭い直感のサトリを、現代語に訳すことは非常に難しい。それに、カムヒビキは、個々の歌詞の意味が、前後の歌詞の意味と幾重にも関連し、かけ合はされた意味をこめてヒビクので、それを直訳的に説明する事はムリであるが、一応の手がかりとして、それぞれの歌詞の意味の概要から解説しよう。

▼彼らは、要点のみを、ズバリ、ズバリと示して居る。その短い言葉から、歌詞の意味をきめるには、ここに掲げたカムヒビキのみでなく、他の場所で示して居るものをも参考として、彼らの用語になれたカンを以て、くみとるようにした。

〈ヤホ　ヤチホ　ヤサカ　マガタマ〉

とは、「タカマクラ（宇宙球）は、始端と末端の極限が永遠的に循環して居る」という意味であり、ヤホヤチホとは、数としては八百八千であるが、ヤは極限を意味し、天体に於て、生成、分化、親和、還元、極限、循環の変遷が、無限的にくりかへされて居る状態を表はして居る。通例マガタマと言ひ習はされて居るが、実は「アマとカムのフトマニのタマ」の意である。

〈アメ　アマヒ〉

とは、「宇宙の諸天体も、アマの微分されたアメから生成されたものであり、その発生源はアマヒである」といふ意味である。

▼アマについては屢々述べて来たが、要するに、アマとは、「アらゆるもののハジマリ」として、カタカムナ人が直感で感受して居た「始元の量」であり、それが、すべての現象事象の起源の「元」である。アマは、「目に見る事は出来ぬが、すべてのものを生み、育て、そして又、すべてのものがそこへ

還ってゆく」といふ思念である。しかし、それだけなら、一般の神仏、創造主等のイメージと変らぬ、天地創成説の一種にすぎぬようであるが、カタカムナ人のサトリは、それが単なる観念上の想像から出たものでは無く、確かに体覚的に感受できる「潜象の存在」である、といふ直感が基になって居り、彼らは、そのアマが、微分された「アメ」の状態で、宇宙の全域（アマ界全体）に、密充塡的に敷かれて居る様相を観じ、又、そのアメの濃淡からウヅマキ流が起り、光以上の超高速で、大宇宙空間に波及する力を、直接に〈アマハヤミ〉として感覚して居た。又アマの微粒子「マリ」は、変遷して、サヌキ（男電気）とアワ（女電気）の電気粒子となってマクミ（磁気）やカラミ（力）を現はし、又、すべての物質の中に入りこんで、例へば原子核や細胞核のようにその生命を支配し、又、アマウツシの実体として、自分たちの身心に、絶えず交流して居る、と観じて居た。そういふ気持が伝統となって、日本語では〈アマ〉といふ言葉で、「アマ始元量」を表はすと同時に、女性もアマであり、天も海もアマとよんだのであらう。カタカムナ人は、アマを空間的にとらへる時は〈マ〉と言ひ、個々としてはマリである。従ってマとは、個々のマリの集団系をさすと共に、それを生む空間、（アヒマ）でもあり、言ひかへれば、トキ（時間）とトコロ（空間）の発生源である。

〈アマ〉は宇宙球（タカマクラ）全体に遍満して〈マ〉を構成する始元量であり、〈アメ〉はその微分を示し、〈マリ〉はその結球を意味する。それは、目に見えぬ潜態のまま、左マワリ右マワリに旋転しながら運行し（マワリテメグル）集合したり融合したり重合したりして、〈マ〉全体に渦巻いて居る。

そして、宇宙の環境条件に応じて、マリは電気粒子（イカツ）となって「現象界」に表はれ、磁気や

力の位相を有ち、モコロを構成し、次第に、目に見える諸現象、則ち、天体や、天体上の諸物質をカタチづくる「元素」へと、変遷してゆく、と観じ、それらの様相を述べて居るのが、私達が「カタカムナの直観物理」とよぶものである。彼らは、潜態の中に更に、根元的なアメとマリを、感じ分けて居る。

▼カタカムナの文献には、他の民族の古代文字に多く見られる、商業の契約や、戦争の記録、又はウラナヒや呪詛的なものは全く無く、彼らの直観した〈イノチ〉のサトリと、そのサトリに基く〈クラシ〉の知恵が、イキイキとうたはれて居るのである。

▼〈アマヒ〉とは、「アマのヒ」といふ事である。〈ヒ〉とはモトを示す、元とか玄とか源泉（カミ）といふ意味のヒビキである。従って、アマヒとは、すべてのモノを形づくる根元（ヒ）であるところの、アマ始元量そのものを指すと同時に、更にそのアマのモト（カミ）則ち「アマのヒ」を指向する思念を含んで居る。

▼カミ・カム　カタカムナ人の〈カミ〉といふのは「神」ではなく、川の流れの源を「川上」といふように、すべて目の前に現はれて居るものの、そのモトを「カミ」へ「カミ」へと遡って、その本質を、あくまで知らうとする思念である。

川下の、最も川口に立つ者にとっては、その川の水の流れてくる上流はすべて「カミ」である。10キ

ロ遡れば、その地点はもはやカミではなくなるが、カミは更に10キロ20キロと遡り、無限的にカミへカミへと続いて居る。たとひ、その川の水の始まりを、山上の雨の一滴に突きとめたとしても、それで終ではない。カタカムナ人の「カミ」とは、後代人が想定したような「神」ではなく、真に〈カミ〉としか、言ひようのないものを、示すサトリであった。

〈アメアマヒ〉のアメは、潜象のアマの微分をさし、天の「雨」の如き思念の呼名である。アマヒは、そのアメを発現するカミ（起源）を示して居る。なほ、アマとアマヒ（アマのカミのカム）の関連については、次のミスマルのタマや、次号のカムナガラのミチによって、次第に明らかになるであらう。

〈カム〉とは、「カタチが見えぬ」といふ意味であり、その意味では、アマも、アメも、アマヒ等もカムである。一般に「見えない」といふ時は、形が小さすぎて見えない場合も、大きすぎて見えぬ場合もある。それなら、顕微鏡や望遠鏡が発達すれば、今まで見えなかったものも、スベテ見える筈であるが、いかに精巧な機械ができても、目に見る事の出来ぬ、『潜象』の存在がある、といふ事に、カタカムナ人は気がついたのである。カタチが見えぬといふ事は、存在しないといふ事ではなく、又、カタチは見えなくても、存在するモノがある以上、直感の鋭い者には、体覚できる筈である。なぜなら、存在する以上「チカラ」があり、「ヒビキ」を伴はぬ事は無いからである。

しかし、この『潜象』の存在を追求して、カミへカミへと遡ってゆけばゆく程、「奇妙さ量」は多くなる。カタカムナ人は遂に、すべてのモノの根元の、真の『カミ』を把握し、その正体を表現する言葉としては、〈アマ〉と〈カム〉といふしかない、とサトったのである。カタカムナのカミとは、決して、

人格化された神などではなく、「根源的な起源」の思念である。（カムについては次号詳述）

このような、アリノママの直感に基くサトリの言葉を、後代人が錯覚して、「神」を設定してしまったところに、ムリもない点もあるけれども、実は、その心理が、今日の人類の、マチガヒのモトとなったのである。

「この世には、科学や常識では説明しきれぬフシギな事がある」といふ話を聞いたり、又自分で経験したりした時、その原因（モト）や起源（カミ）を知りたい、と思ふ気持は、昔も今も変りはない。カタカムナ人の特長は、この、モトやカミを追求する際に、直観性能が、非常に優れて居たといふ事である。その為に、彼らは、真実の正体をつきとめるまでに、神秘思想や空想にソレたり、幻想をつかまへて錯覚する、といふ事がなく、ズバリと、その**奇妙さの正体**を、把握し得たのであった。

このような性能は、一般の後代人は劣化したが、個人的には、いつの世にも、優れた人があらはれ、その人なりの素質や知性の度に応じた表現を以て、めいめいの体験を示して居る。孔子老子の教へや、釈迦キリストの救ひ、ソクラテスやゲーテの哲学等々として、人類の古典と称されるものもそれであるが、何といっても、「カン」の度に於ては、カタカムナ人のサトリほどの、明達さを欠くのもやむを得ない。

カタカムナの示しは、大モトから、カミの本質をつかみ、まづ、宇宙の成り立ちから説明し、人々に、根本の心構へを教へて居る。そして、単に末端の生活経験を、オヤがコに、何となく伝授するといふ程度ではなく、非常に高度の物理に基く、「生命（イノチ）のサトリ」によって、生活の諸般にわた

る根本的な態度と方法、則ち真の「クラシのチエ」の数々を、明示して居たのである。（後章及び次号詳述）

我々は、カタカムナ人のような直感性能は無いけれども、彼らの〈カム〉の思念を、追体験する事は決して不可能ではない。しかしそれには、カタカムナ人達の間のような、簡単なサトシではついてゆけないので、例へば、川を次第に遡ってカミへカミへとたどるように、解説する方も読者も、足もとを蹈み違へず、マコトの川上をマ違へぬように誘導し、勘考を進めたいと念じて居る。

〈アキツ　ナナヨノ　タカマクラ〉

とは、タカマは宇宙球、クラは天体の位置する「座」則ち、星座のような、マとまった「場」をいふ。アキツとは「表現して居る」といふ意味であるから、則ちアキツナナヨノタカマクラとは、「ヤサカのマガタマの七種の単玉は、タカマクラの新陳代謝が、七百万年・七千万年のような、七の周期で反復されて居るといふ事を、表現して居る」といふ意味になる。そして以下の歌詞は、その一つ一つのタマに就いて述べる事になる。

▼**ヤサカのマガタマ**　といふ名称の、それぞれの声音の基底思念は、「極限に（ヤ）分れた（サ）カタチ（カ）のマヵタマ」、則ち、アマから、最も極微に分れた粒子のタマ、の意味を表はして居る。彼ら

は、宇宙の天体の生成消滅の相（スガタ）に、すべてのものの原型があると、直観的に把握した。そして、自然界の万物万象は、動物も、植物も、人間も、そして大地や石や水も、すべて、この極限に分れた粒子（ヤサカのマカタマ）が変遷して現象に表はれたものであり、それぞれの寿命を終へれば、やがて又、もとにもどり、アマに還元してゆく、相似象である、と観じ、それを、マガタマといふ表象物に托して表明して居るのである。鉄製の球形で示され、所謂古代人のアクセサリーの類では無い。（口絵）

**▼七の周期**　〈ナナヨ〉とは、地球から見て、地球の公転の一マワリの一年といふものを、一応の単位として居るが、宇宙的に、又、地球上に於て、単位のとり方は、何においてもよいわけである。ただし、どうして「七」の数で規制、反復されるのか？　といふ事になると、それは、昔からの言葉の通り「七フシギ」である。とにかく彼らは、宇宙には、「八」の数で規制される現象があること（オクタントの飽和安定状態、前号ヤタノカガミ参照）又、「六」で規制される立方体（オ…前号声音記号参照）、四相をもつもの（ヲ…仝）、三つの方向（アカ、アヤ、アオ…後述）、「二」の正と反、そして「一」（ヒトツ）のアマの「元」――といふように、「数」と「物理的現象」との結びつきのコトワリを、彼らは発見したのである。そして「七」といふ数には、歴史的な変遷の繰返しの規制のある事を、大きく把握したのである。（「オ」や「ヲ」が同時に六や四の意をもつ事は、カタカムナの声音記号によれば一目でわかる。）

どうして「七」で繰返へされるのか？　といふ、七変化のナゾについて考へられる事は、例へば、八（ヤ）は極限飽和安定の状態（オクテットタイプ）であり、原子の結晶構造も、電子八個で安定した、

崩壊しにくいものになる（身近なものでは、よく煮つめた本ものの佃煮やジャム類が、黴びたり腐ったりしにくいのも、その原子分子の構造が、（ヤ）になる所に、最大の理由がある）し、我々の地球の太陽系も、ヤタチ（八軸）で一応安定して居る。しかし、宇宙球（タカマクラ）全体が、極限まで固定してしまふような状態は起らぬであらう。つまり部分的には、諸天体にも万物万象にも、生成、発展、飽和安定、崩壊還元等の、さまざまの状態が存在し、統計的には安定静止（ヤ）の状態も考へられるが、全体として、全く停止不動の固着状態になる事はない。地球も太陽も刻々崩壊しつつ新生し、我々の身体も、一応健康体として安定して居るが、部分的には常に新陳代謝し、崩壊と生成のバランスの中で動揺して居る。すべてが刻々に、つりあひながら変遷しつゝある過渡の状態である。部分的にみれば、太陽も月も地球も静止して居るように思へるが、大きい目でみれば、メグリテ（自転）居る。もっとよくみれば、メグリながらマワリて（公転）居る。そして、更によくみれば、そこに、ナナヨッギ（七の周期でヨがツガレてゆく性質）がある、といふ直観である。

ところで、極限率を示す〈ヤタノカカミ〉は、八個の小円（タマ）と八個の間（マ）といふ、「円周」で表象されるが、歴史的な周期となると、サーキットでは表はせない。それは、例へば「植木算」を考へればよい。植木の間の数は、植木の数より一つ減さねばならぬ。つまり植木が八本なら、間は七である。則ち、歴史的な時間は、一方的な流れであるから、円周にはならない。安定（八）を求めて動いてゆくが、一つの段階（ヨッギ）ごとに、植木算が成り立ち、その変遷の周期は、「七」で繰返へされる事になるわけであろう。その七が、天体なら七百万年・七千万年、地球の気象なら七年・七十年・七百

年等といふ周期で、一段一段の「ヨ」が「ツガレ」るといふ直観である。

我々の生命も、地球の生命も、太陽の生命も、すべて、アマから生れた相似象であり、やがて、アマに還ってゆく相似象である。太陽や地球が安定して居るように見えるのは、生成崩壊のライフが、非常に長いだけである、と、カタカムナ人は観じて居た。

タカマクラには、我々の太陽のような星――それを彼らは、〈アサヒ〉とよんで居る――は無数的に出没して居り、そこには、極めて長いライフと、広い範囲にわたる、バランスのとれた、変遷の状態がある事を巨察し、それを、ナナヨツギ（七の周期性）の「原型」と観じたのである。このようなカタカムナ人の直観を認めれば、我々の周辺に、諸天体から、原子細胞の構成に至るまで、すべてに相似の象（カタチ）がみられ、モロモロの現象事象に、ナナフシギの周期性が、数多く見出されるのも、亦、我々の生活のリズムも、七日を以て一週間とし、人が生れゝばお七夜、七五三、十四才で思春期に入り、四十二―四十九才で更年期、死ねば初七日、四十九日、七周忌、生理のリズムも二十八日、躁鬱病の周期も七年といはれる。……等々、知らず知らずのうちに、相似の現象を呈して居る所以も、おのづから頷かれるであらう。

なほ、言ふまでもない事であるが、この周期を測る単位は、例へば、地球が太陽を一まわりする、一年である場合もあれば、地球の自転の、一日の場合もある。七年・七十年・七百年・七千年等の上昇高調波があると共に、日、時、分、秒等の、下降の収縮高調波にも、七の周期性がある筈である。光速度などの、天文単位で測られる事もあるし、又、秒以下の、電磁波的な周期のこともある。何か一つの単

位に統一し、スタートは一せいにとらねば、計算が合はぬ、等と考へる必要は少しも無いので、めいめいが、それぞれの単位の周期性を、相似象的にもって居るといふ事である。スタートはどこからきってもよいし、それぞれが重ならうが、ずれようが、それなりに、それぞれの周期で繰返へされ、その中で、多重的に、互ひに関係しあひ、バランスがとられて居る、その様相を、カタカムナ人はナリマと言ひ、ナナヨッギの変遷と観じ、以下の歌詞でそれを表はして居る。

〈ヨロヅ　ハジマリ　イツノタマ〉

とは、「イツのタマは、万物のハジマリを表はす小さなタマで、それは、アマの最も小さい単位の粒子（マリ）を表象して居る。」といふ意味であるが、同時にそれは、「モノには、微細に分れる性質（微分性）がある」という事を表明して居る。

〈アキツ　トヨクモ　アメノウケ〉

とは、「空に充満する豊かな雲（トヨクモ）のような始元量（アメ）のウケ（宇宙の気）から、諸天体が生成される、という事を、イツノタマが表象して居る」という意味である。

〈コゴリ　コゴリミ　ヒジリタマ〉

とは、「そのアメのウケが、大きなカタマリに凝集して、大宇宙の遠心核（ヒ）に成って居る」といふ意味である、（コゴリ　コゴリミと繰返へすのは、その凝集が、一回や二回ではなく、長時

間かゝって、繰返し繰返し集合し、固ってゆく、巨大なスケールを表はして居る）この巨大現象が、諸天体を発生するモトの玄（ヒ）であり、その大量のアメの凝集した巨大なヒ（核）を、彼らはフトヒと言って居る。則ち、「多くの太陽を生む、大本の太い陽（ヒ）」といふ意味であって、我々のいふ太陽のことは、彼らは、この〈フトヒ〉に対し、〈アサヒ〉とよんで居る。前述のように、カタカムナ人は、当時既に、宇宙には、多くのアサヒ（恒星）が存在する事を知って居たのである。このフトヒは、大量のアメの凝集したミ（コゴリミ）であるから、巨大な力の発生源であるが、『潜象』であって、目には見えない。丁度、目に見えぬ原子核から、陽子、中性子、その他の粒子が放出されるように、フトヒは、諸天体や、諸天体上の万物を構成する諸元素を生む元のヒ（玄）である。

（といふよりも、彼らにとっては、大宇宙の核として、フトヒの存在を直観的に把握したことの方が原型で、そこから相似象として、地球上のモロモロの物質の、分子原子以下の微細なモノや、人間の身体や動植物の細胞以下の微細現象に至るまで、洞察が及んだといふべきであらう。今日の我々は、顕微鏡下に認められる原子のスガタを知って居るから、つひ、そこからものを考へ勝ちであるが、カタカムナ人の思考は、逆のコースであったと思はれる。彼らは、大宇宙の核（フトヒ）の直観から、原子内の核の存在を、相似象として観じたに違ひない。我々の科学は、彼らの直観の、微視的な方は、原子や原子核等として実証し得たが、巨察的なフトヒの方は、まだ観測して居ない……。）

〈ヒジリタマ〉とは、「ヒを知る」意味であるが、ヒとは前述のように、「大もと」といふ思念である。どうしてヒが大もとの意になったか?……

▼〈ヒ〉　そもそもヒとは太陽（アサヒ）の陽をさすヒビキであり、ヒトツのヒである。則ち、すべてのものの「根元、始源」をさす思念である。火山の火や、落雷の火や、山火事などで、自然界に表はれた「火」をヒとよんだのは、それらの火のモトに、「アマのヒ」がある、といふ直感であった。「モトになるもの」が「ヒ」であり、従って、太陽（アサヒ）のモトはフトヒであり、フトヒのモトはアマヒである。そして、モトから分れたものの名にも、しばしば「ヒ」がついて居る。太陽の一マワリ二マワリを、一日二日の日（ヒ）とよび、身体にも、ヒザ、ヒジ、等の名があり、ヒコやヒメやヒマゴは、ヒ爺さん、ヒ婆さんからわかれて出た、子孫の意である。ヒビキの語源も、「ヒ」が、二次三次のヒ（ビ）を発生する（キ）、といふ思念から、響の意が出るので、〈カムヒビキ〉といふ言葉には、このヒの、最も根源的な、カム・アマのヒビキを伝へる意がこめられて居る。要するに、〈ヒ〉は「大もと」の意味であり、すべての「ヒ」は、大もとの、「アマヒ」から分れた、相似象である、といふ直観である。

太陽（アサヒ）がヒとよばれるのも、フトヒの相似象として、アマの巨大な空洞（アナ）から発生した「ヒ」であると観じたからである。おそらく太陽の中心核は、アマナであり、我々の見て居る太陽の光は、その空洞輻射であらう。現在の空洞輻射の、高熱の爐から生れる火の事を、専門用語でも「ヒ」とよんで居るのは「妙」である。火山等の自然の火も、ものの燃える火も、又、我々の心の中の火も、

すべてそのモトに、「アマのヒ」を観じたカタカムナ人の直観は鋭かった。ヒとは、すべてのモノの「核」となって生命を支へ、さまざまな物質を発生させながら、自身は目に見えぬ『潜象』である。（例へば原子核から陽子中性子等が生産される事は我々も知って居るが、現代の科学のどんな顕微鏡を用ひても、「原子核」といふ物質を検出する事は出来ない。そこから陽子中性子等が出てくることによって原子核の存在を認定して居るまでである。）そして、このような「ヒのヒミツを知ること」を、カタカムナ人は〈ヒジリ〉と言ったのである。後世「聖」の字をこれに当てたのも亦「妙」ではないか！

〈アキツ　フトヒノ　アマヒ　クラ〉

とは、「ヒジリタマは宇宙の諸天体を発生する根源のフトヒが、アマヒのクラであることを、表象して居る」といふ意味である。

▼カタカムナ人の直観によれば、このフトヒが、大宇宙の核であるからこそ、それが宇宙の大きな「遠心」となって、そこに向って、大きな引力が働いて居る、と観じたのである。我々は、漠然と、地球の「重力（求心力）」に対して、逆に働く力を「遠心力」とよんで居る。しかし、地球の引力に反する力を、遠心力と名付けた人の心理の奥には、何となく、どこか「遠くに大きな心（核）」があって、それにひかれて居る感じが、あったのかもしれない。

最近の科学で、原子核から出る微粒子が、極めて短い時間で「消失する」とか「飛び去る」とか言は

れて居るが、どこへ飛んで消えるのかはわかって居ない。又、「Y方向」とか、「第三方向」とか、「反の方向」等と称して、指向して居る方向も、カタカムナ人が直観的に把へて居たこのフトヒ、則ちアマのヒに向ふ方向を、アイマイに意味して居るらしく思はれる。カタカムナ人は、このフトヒから、宇宙的な生命力が、放出されて居ると観じたのである。

要するに、タカマクラに於て、フトヒから宇宙の天体群が発生する相（スガタ）が、すべての相似象の**原型**である、といふ直観である。前述のように、我々は、原子核から、陽子中性子等が、生産される現象を知って居るから、相似象の原型も、この原子核の方に在ると考へたくなるが、原型は、あくまでタカマクラの方にあることを、カタカムナ人に教へられたのである。現代人が、原子分子細胞等の、微視的なものの中に、原型があると錯覚し、物質や生命質の究極的な本体を、微視的なものの中に求めようとするのは、生成される過程としては、微細なものから出発する為であらうが、よく考へてみれば、微細なものに止まって居る間は、宇宙も天体も生命も無いわけで、それが集って構造され、ある「マトマリ」をもった時、始めて種々な現象や力が発生してくるのであるから、相似象の原型としては、大きなものによって、大極的に把握されたところにある筈である。

カタカムナ人は、この大きなものを巨察的に把へる能力が勝れて居て、原型を先づつかみ、そこから、微視的なものを追究し、目にみえぬものまで、相似象として判断する事が出来たと思はれる。であるから、「顕微鏡ももたぬ上古代人に、オングストローム単位の微細なものがわかるわけが無い」といふ非難は、全く当らないのである。直観とは、「巨察する能力の高さ」といふ事である。要するに全体

的に真相を把握する直観が鋭ければ、必要に応じて、細かいものを判断する事は可能である。科学は、微視的なものを確めて、大きいものの方がおくれたのである。私達の相似象学としては、自分達の思考の認識のアヤマリを改めて、まづ、相似象の原型を、忠実に出すべきである。カムヒビキの第一として、マガタマをとりあげたのもこの故である。

彼らがカムヒビキを聴きとったのと、我々現代人が、地球の裏側とでも、月とでも確実に通信し、宇宙飛行ができるのとでは、意味が違ふ。言ふなれば、我々は、「もし、今、カタカムナ人の直感性能があれば、この科学技術を、どのようにつかいこなすか?」を考へるべきであらう。

〈ヤタチ　ホホデミ　イワネ　タマ〉

とは、「フトヒから、八つの軸状に（ヤタチ）空間的な力のクラが、大きな岩に根の張りめぐらす如く拡って居り、その根のところどころに、巨岩的な存在の太陽（アサヒ）が、数多く分布して居る。」という意味である。ヤタチは八軸、ホホデミは正反つり合って発生する意であるから、則ち、フトヒの核から、宇宙空間に、八方、立体的に展開する軸のところどころに、我々の属する太陽のような恒星が、発生して居る、といふ直観である。

〈アキツ　アサヒノ　ヒコネ　クラ〉

とは、「前述の如くにして、フトヒから生れた、アマの子孫（ヒコ）のような、アサヒ（太陽）

の分布して居る、岩根の張る如きヒコネクラを、イワネタマが表はして居る」といふ意味である。

〈ソトヨ　ニギスム　エミノ　タマ〉

とは、「ヒコネクラの中では、それぞれのアサヒ（太陽）の外側（ソトヨ）に、太陽との引力関係を保って、多くの星が和やかに集って（ニギスム）一つの系（太陽系の如き）を成して居る。その相（スガタ）を表はして居るのがエミノタミである」といふ意味である。ニギとは「和」の古語である。エミとは、笑みであり恵であり愛であり美であり、要するに「魅力ある存在」を意味する。つまり、太陽の引力のもとに、多くの星が集り、笑みあふ様を、エミノタマによって表象して居るわけである。

〈アキツ　ヒコネノ　ホシ　マ　クラ〉

とは、「そのように、それぞれの太陽（アサヒ）には、ヒコネ、則ちアマのフトヒの子孫の系統に属する星の集団があり、エミのタマがそれを表はして居る」といふ意味で、アキツはここでも前後の歌詞にかかって居る。ホシマクラとは「星の集って居るマのクラ」則ち太陽系銀河系の如き、大小の星の集団の意になる。ホシとは「正反親和（ホ）の示し（シ）」の思念。

〈ウヅシマ　ヒコユヅ　ウヅメ　タマ〉

とは、「ホシマクラの中で、渦巻流（ウヅシマ）の星雲（ヒコユヅ）が放出されて居ることを、

ウヅメタマが表象して居る」といふ意味である。ヒコユヅとは、ユは水が沸いて湯になるように湧き出す思念、ツは個々、ウヅシマとはウヅの縞、則ちアマの渦巻き流（ウヅメ）の意、ウヅシマヒコユヅとは、アマのウヅメから、ウヅメクソ（中性子、陽子、陰陽電子等）が、無数的に放出されるスガタの相似象を表はして居る。（前号参照）

〈アキツ　ホシ　マ　ノ　サタテ　クラ〉

とは、前の歌詞をうけて、ウヅシマから出たヒコユヅが、分れて独立した星のクラ（サタテクラ）を、いくつも形づくって居る」ことを述べて居る。則ち、恒星空間（ホシマ）には、大小無数の星団があり、渦状星雲や、大小の彗星等があり、あるものは太陽系に入りこんで、流星や隕石となり、あるひは月のような衛星となって、地球や木星等の惑星の周囲をめぐって居る。このような天体のスガタの相似象のモデルとしては、原子内の電子の軌道に、更に軌道殻が幾重にも伴って運行して居る相を、想起すればよいであらう。

▼天空には、光輝やくアサヒ（恒星）や、そのヒコネクラ（太陽系など）の、ニギスム、エミのタマ（惑星）の他に、渦状の星雲ヒコユヅをはじめ、大小の星団の存在することを示して居る。さきのヒコユヅは、アマの渦巻流から、新しく発生しつゝある星の集団であり、実は、我々の太陽（アサヒ）も、太陽系の星々も、もとはと言へば、そもそもヒコユヅとして、アマのウヅメの流れから放出された、ウヅ

メクソから発生した微粒子が、集合し変遷したものであるといふ直観である。従って満天の星は、我々の目に同じように光って見えるけれども、その中には、ヒコユヅのように、生れたての星もあり、太陽系のように、崩壊の方向にむかひつゝある星もあることを彼らはつとに知って居た。彼らの直観によれば、同じような大小の星の集団と見えても、流星群はヒコユヅではなく、それは、かつての太陽系のようなヒコネクラが崩壊して、いよいよ最後の段階に近づきつゝあるスガタ、といふ事になる（後出）。宇宙には、このように、さまざまな過程にある天体が、生滅しながら、タカマクラ全体としては、バランスのとれた、八軸の展開体系（ヤタチホホデミ）を保って居ることを、次の歌詞で表明して居る。

〈ヤシキ　ハルホシ　ナリマ　タマ〉

とは、「満天の空に張りめぐらされた八軸上に、数々の恒星が展開して居る相の全貌を、ナリマタマが表象して居る」といふ意味である。ヤシキとは、「極限（ヤ）まで広く敷かれて居る（シキ）」則ち宇宙球の全体をさすところから、後世、大きな邸宅（屋敷）の意味が出たのであらう。ナリマとは「マのナリ」則ち、「マの本来性のスガタ」といふ意味である。ナリとは、「ヒトトナリ」「ナリフリ」の「ナリ」であり、「私ナリに」とか「それナリに」などとも、又「ナリユキ」「ナリワヒ」等にも展開する。「アリマス」と「ナリマス」とを言ひわける日本人の心情には、〈ナリマ〉といふヒビキをきけば、何となく、安定した、落着きが感じられるが

しかし固定的ではなく、イキイキとした、「進行形のバランス状態」として、うけとられるものがある。従って、そのような〈ナリマ〉の、中心核となって居る〈フトヒ〉も、決して固定した存在のように考へてはいけない。

要するに、タカマクラが、全体として、大きく八方八軸上に、正反対応して、つり合って居る象（カタチ）が〈ナリマ〉であり、それが、ヤタノカガミに表象されるオクテットタイプであり、タカマに発生するすべてのモノ、則ち、銀河系や太陽系の星団にも、地球にも、又、人体の構成にも、分子、原子の構造にも、あまねく、そのバランス状態の相似象がみられるわけである。（ヤシキハルは別言すればトキトコロウシに当り、科学では位置勢力としてその一端を捉へて居る。）（後出）

〈アキツ　タカマノ　フタセ　クラ〉

とは、「天空には、正反性の相反する二つの系統のクラが存在する」といふ意味で、前の歌詞にかかって、ナリマタマの表象する内容を説明して居る。フタセクラとは「二つに分れた星の座」といふ事であるが、その「二つ」の意味は、歌詞の前と後に二重にかけられて居る。ナリマタマの表象する方のフタセクラは、「正反性」を意味する。則ちまわり方が正反の反対になって居ることで、相似象としては、地球の北半球と南半球のように、正と反に対称しつつ、球心部では重合して居る相である。およそモノの保全自衛のスガタは球状であり、ソモソモ、一つ一つのマリも、正、反に働く偶力によって旋転（マワリ）が始まり、その場の力（主としては

アマの渦流）に応じて動き出し、周囲の天体との引力関係によって循環（メグリ）の運動が起る、と観じたカタカムナ人は、そのサトリを、四十八文字のウタに示して居る。（前号マワリテメグルのうた参照）（この相似象を簡単にみるには、熱い鉄鍋などに、水滴を落してみればよい。水は忽ち小さなマリとなってクルクルとマワリながらメグリ出し、案外長い時間、水の生命を自衛する。）

▼アマノミナカヌシとか、タカミムスビ、カムミムスビ等のカタカムナのヒビキは、後世の古事記等に、神の名として伝へられて居るのに、そもそものハジマリを示すこの四十八文字のウタの、アメのマワリとメグリのサトリは、古事記をはじめ、後世の神の名にも伝へられて居ないのは不思議であるが、これも、後世、カタカムナの真意が失はれた為であらう。

▼我々の属する太陽系は、タカマクラの北半球の東側に在り、我々の現在の星座のきめ方は、ここ数千年来の、たまたま地球からみた形によって、小熊座大熊座等とよんで居るまでであるから、長年の間には、それぞれの星は、各自の変遷過程をたどって運行し、今、我々の見て居る、熊や白鳥や柄杓の形は、やがて崩れてしまふ筈である。カタカムナ人の観察はそれと異り、自分達の眼前の星のカタチにとらはれず、天体の新陳代謝の相を巨察し、すべて、アマの微粒子のマリ（イツノタマ）から始まって、ココリコゴリて、ヒとなり（ヒジリタマ）イワネ、ユミ、ウヅメ、ナリマと成る、と観じたのである。そして更にヤ（極限）をすぎれば崩壊方向に赴くとし、その状態については、次の歌詞で表はして居

る。前述の「フタセクラ」にかけられた、もう一つの意味は、そこに示されて居る。

〈オホキ　アソフク　クシサチ　タマ〉

とは、天体が大きくなって爆発する様を述べて居る。アソフクとは、火山爆発の古語であり、アソとは、阿蘇の名に残るように、火山をさす、万国共通の古代語であった。クシサチタマとは、現代の天文学で言ふ巨星現象に当るもので、恒星（アサヒ）が極限状態（ヤ）をすぎると、どんどん大きくなり、あるとき突如大爆発を起して消滅し、構成物質は天空に飛散する、と観じ、その様相を、クシサチタマによって表象して居る、といふ意味を、のべた歌詞である。

〈アキツ　ヤサカノ　アラタ　クラ〉

とは、巨星の爆発によって飛散した大小のカケラは、やがて、もとのアメの状態にまで還元し、アマ始元量に収斂され、そして、又新たに、イツノタマ　コゴリココリミ　ヒジリタマ……と生成発展して、新しい星のクラ（アラタクラ）が出現する、といふ意味である。則ち、宇宙の天体には、崩壊方向に赴きつつある「クシサチ」と、新たに発生して生成途上にある「アラタクラ」との、二つの系統の星がある、といふのが、前述の「フタセクラ」にかけられた、もう一つの意味である。因みに、太陽や我々の地球はクシサチ系に属し、大小の流星群も、かって

はその辺に存在して居た星座の、則ちクシサチの爆発による大小のカケラであり、いづれも崩壊方向にあり、やがてアマに還元される、といふ観方である。同じ星団でも、ウヅシマヒコユヅと言はれるものは、アラタクラの新生しつつある系統である。この二つの系統は、「生成」と「還元」との正・反を指向し、途中から方向を換へる事は無いと観じて居た。もとより「生成」と「還元」は常に伴って居るから、その経過に要する時間は一様ではなく、条件によって伸縮され、例へば太陽や地球の年令を定める事はできない。しかし全体としての方向性を、全く換へて、例へばクシサチが、ある日、アマに還元する方向をやめて、アラタクラになる事は無い、といふわけである。

要するに、彼らは、このような長い天体の変遷、則ち、生成発展、崩壊消滅、還元循環といふ新陳代謝が、宇宙のタカマクラに、「七」の周期性を以て反復されて居る、と洞察し、そのスガタを、万物万象の原型として、ヤサカのマガタマの七種の単玉で表象して居たのである。

拙い解説では、カタカムナ人の、まことに雄大なサトリのヒビキを、充分に伝へる事は出来ないが、彼らの天文に関する直観的な把握が、いかに鋭いものであったかといふ事は、今日の天文学の智識にてらしても明らかであらう。後代人が、かかる高度の表象物であるマガタマを曲った玉とか、単なる古代人の装身具と混同して居た事は、甚しい認識の誤りである。後世シ

ナから伝来した所謂マガタマは宝玉製であるが、我が国には、それよりも以前に、カタカムナの表象物としての、「鉄製のマガタマ」があったのである。この事については、前号に述べたが、鏡についても、シナの青銅や鉄製品の伝来以前に、特殊な製鉄によるカタカムナのヤタのカカミがあったのである。（製鉄技術については次号詳述）

さて〈ヤサカのマガタマ〉に関するカムヒビキを要約すれば、次のようになるであらう。

『宇宙球（タカマクラ）は、無限のアメの集合系で、アマヒから発生し、始端と末端の極限が、永遠的に循環して居る、といふサトリを、ヤサカのマガタマによって、表象して居る。そしてその循環には、「七」の周期性があるといふ事を、七種の単玉によって、次の如く示して居る。

㈠ 先づ、宇宙のすべてのモノのハジマリはアマの微分されたアメである、といふ事を、表象して居るのが、イツのタマである。

㈡ その雲の如き宇宙の気（アメのウケ、則ちアマ始元量）が、次第次第に凝集して（コゴリコゴリミ）大きな、目にみえぬヒ（核）となる。これが宇宙の諸天体を発生する根源のフトヒであり、いはば、アマヒのクラ（座）である。ヒジリタマは、この事を表象して居る。

㈢ 次に、この大宇宙球の中心核（フトヒ）から、巨大な岩根の張りめぐらすように展開する、天空の八方の軸上に、正・反のつりあひを以て、多くのアサヒ（太陽のような恒星）の集団

が分布して居る（銀河系宇宙等）。その様を、イワネタマが表はして居る。

(四) さて、フトヒから生れた、アマの子孫のようなアサヒ（太陽）には、又それぞれ、その外側に、多くの星が、互ひに引力関係を保ちつつ、ニギヤかに集って居るクラがある（太陽系）。そのスガタを、ユミのタマが表はして居る。

(五) 宇宙空間には、大きなアマの渦巻き（ウヅメ）から、大小のウヅマキ星雲が放出され、たくさんの星のクラが、分れて、独立した、マトマリを成して居る。その有様を、ウヅメタマが表はして居る。

(六) フトヒを中心核として、満天の空に張りめぐらされた八方八軸に、多くのアサヒ（恒星）が分布し、その間には、アマのウヅシマから放出された星雲が在り、さまざまの星が、それぞれの変遷の過程をたどって生滅しつつ、しかも、タカマクラ全体としては、つねに正反対応して、大きくつりあって居る。そのスガタを表象して居るのが、ナリマタマである。

(七) 天空には、天体が、飽和安定の極限をすぎ、だんだん崩壊方向に赴き、遂に巨星となって爆発する（オホキアソフク）星があり、それを表象して居るのが、クシサチタマである。

そして、爆発によって飛散した大小のカケラは、結局アメの状態に還元して、アマ始元量にもどるが、又、それらのアメは、次の新しい天体の材料として、環境条件に応じ、再び、ヨロヅハジマリ　イツのタマ、コゴリコゴリミヒジリタマ、ヤタチホホデミ　イワネタマ、ソトヨ

ニギスム　エミのタマ……と、生成発展してゆく。そして又、極限（ヤ）の安定状態をすぎれば崩壊して、アマに還ってゆく。――我々の見て居る宇宙の天体には、おのづから二つのクラがあり、互ひに正・反対称して、逆の回転をして居る。と共に、時間の経過にも、正・反の二つのクラがあり、崩壊過程にある星（クシサチ系）と、生成過程にある星（アラタクラ）との、二つの方向性があるわけで、タカマクラ（宇宙球）では、そのような天体の新陳代謝が、七百万年・七千万年のような「七」の周期性を以て、永遠的に、繰り返へされて居る』。

## （二）　宇宙生気（イキ）を表現する表象物、

〈イホツノ　ミスマルノ　タマ〉に関するカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
　アモリ　スル　　イホツ　ミスマル
　　フタヤタマ
アキツ　モロカゲ　　ウマシ　イキ

フトヒ　ソトヨノ　ホホデミタマ
クシヌ　イソニギ　アマヒカゲ
アキツ　サカタル　マサチエミ
マクラハルタマ　トタテタマ
ヒコネ　クシヒコ　アマ　アサヒ
アキツ　フタカミ　シツハタテ
ハルヒ　サチハヤ　アマツナギ
アマツ　シキタマ　ヤマトヒコ
アキツ　フトチノ　ハナヒラキ
イツセ　トヨサチ　ニギホスム

〈ミスマルノタマ〉は、アマ始元量による、生命構成の要素を、十一種類の「双珠」に托して表現した、いはば、「生命」の表象物であるが、宇宙の生気（イキ）といふ事は、単に宇宙だけの生命をいふのではなく、ウマシイキ、「則ち、宇宙の力が、万物を生産してくる気」の意味で、いろいろの天体を始め、天体上に生存するさまざまな生命質や物質、則ち、分子、原子、電子、細胞等とよばれるものが、発現し、生成する、宇宙広域関連の「機能」のことである。

▼機能　とは機構の能力、則ち、「構成されることによって発現される能力」といふ意味である。発現される「力」とは、宇宙の生気（イキ）であり、そのイキの持続が〈イノチ〉であると、カタカムナ人は観じて居た。現代科学は物質と生命質を分け、生命質の究極を求めて、蛋白質、核酸、遺伝子等へ追ひ進み、結局、物質の究極の元素（CHONSP等）の原子に到達してゆきづまって居る。固体、液体、気体の、さまざまな現象をカタチ造って居るモノは、たしかに、そのような原子分子細胞等の物質であるが、しかしそのような物質を現象させてカタチ造り、生命現象を発生させて居るモノ、則ち、「生命の主体」は、物質そのものにあるのではない。

▼直観と易占　カタカムナ人は、生命質も物質も、共通の要素量（モコロ）によって構成され、その構成のされ方によって、それぞれのハタラキ（機能）が発生すると観じ、細胞や分子原子より以下に、更にいくつかの変遷の過程を考へ、最も究極の単位に、アマ始元量の微粒子（マリ）を直観して居るのである。前述のマガタマのイツノタマの〈イ〉も、ミスマルのタマが表象する宇宙生気〈イキ〉の〈イ〉も、このアマの微粒子をさして居る。〈イ〉といふヒビキは「コマカイ物」といふ思念であり、それが電気性をおびればイカツ（電子）である。則ち、この〈イ〉の持続〈チ〉が生命である、といふ直観が、〈イのチ〉といふ言葉を発想したわけである。同様にして、宇宙の生気が〈イ〉の気（イキ）であり、その〈イキ〉の発現する様相を、モノのカタチに托して表現した表象物が、イホツのミスマルのタマである。

カタカムナ人の心情では、人間の身体も、植物も、物質も、大地も、みなこの〈イ〉の機構として感じられ、例へば、我々の皮膚を損傷すれば痛んで、一時体内の電気状況が変り、復元をはかるように、大地も、穴を掘ったりして傷つければ、我々の身体と同じように痛み、大地の電気分布状況は変動して、その上に生育するものに影響をあたへるが、やがて、新しいバランスを得て、落ついてゆく、と観じたのである。この事は、今我々の精密な測定器をもって調査すれば、美事に証明されるのである。これは一例にすぎぬが、このように、カタカムナ人が、直観の物理によってサトって居た事を、後代人は、経験上の統計的なチエによって、方角や家相等々の易占の術として、神秘性をまじへて、とらへて居るわけである。

さて、ミスマルのタマが、ヤサカのマガタマの如き単一の玉ではなく、フタヤタマ則ち、「双珠型式」で表現されて居るのは、「我々の生命体をはじめすべてのモノが生れるのは、万物万象の始元量の〈アマ〉と、更に、そのアマを生むカミ（起源）の、アマヒの〈カム〉との、フタヤによって、宇宙の生気（イキ）が発現するのである」、といふサトリを表象して居るのである。前掲のカムヒビキは、この宇宙生気の発現の次第を、十一種の双珠の名をよみこんで、五七調の歌詞に綴ったものである。則ち、その十一種のタマとは、ホホデミタマ、クシヌタマ、イソニギタマ、マクラハルタマ、トタテタマ、ヒコネタマ、クシヒコタマ、ハルヒタマ、サチハヤタマ、アマツナギタマ、アマツシキタマである。順次その歌詞を解説しよう。

〈アモリ　スル　イホツミスマル　フタヤタマ〉とは、「イホツミスマルのフタヤタマは、アマ始元量が宇宙に降下（アモリ）する様を表はして居る」といふ意味である。アモリとはアマクダリであるが、カタカムナの時代は、後世の天孫降臨といふような神秘思想とは無関係である。則ち、アはアマ、モはモスソをひく感じの思念、リは離れる思念で、アモリとは、宇宙的関連を意味するヒビキである。

イホツミスマルとは、イホは五百、則ち数の多い意、ツは個々、スはスル、構成する、の意であるから、イホツミスマルとは、「マから現はれる、たくさんの個々のミ」といふ意になる。つまり、巨大な諸天体を始めとして、分子、原子に至る「物質系」や、天体上に生育する人間や動植物をはじめ、単細胞ヴィールスに至る「生命質系」等の、「あらゆる万物万象」をさして居る。フタヤタマとは、それらの、アマから降下する（アモリ）すべての物（ミスマル）が、皆、〈アマ〉と〈カム〉のフタヤ、則ち、言ひかへれば、宇宙生気の発現する本源のアマのフトヒに表象される「カムの力」と、宇宙の広域関連のモロカゲ（後出）を構成する「アマ始元量」との、二つのカミ（起源）に基いて、発生するものであることを、双珠の型式（別図参照）で示した、といふ意味である。

〈アキツ　モロカゲ　ウマシ　イキ〉

とは、「宇宙のすべてのモノは、宇宙の広域のモロモロのオカゲを蒙って、宇宙の生気（機

能）が、生成発現されたものである」といふ事を、以下の十一種のフタヤタマ（双珠）によって表現した、との意味である。

▼モロカゲ　とは、「モロモロのおカゲ」といふ、何気ない表現であるが、その内容には、実は、現代科学に無い、カタカムナ人独特の直観がこめられて居る。我々は、地球上の生物は、太陽のおカゲで生命を保って居り、太陽崇拝は、どの民族にも共通の、古代人のスナホな心情であると思って居た。しかし、私達の遠い祖先のカタカムナ人まで遡れば、一般の古代人よりも、更にスナホな直感によって、太陽のおカゲの他に、〈モロカゲ〉をサトって居たのである。

この、モロカゲを無視してはいけないといふ事は、例へば、桶といふものは、多くの板が構造されて成り立って居り、どこかの「一枚」が欠損すれば、そこから流れ出てしまふ。確かに、そこの「一枚」がなければ、中のものは保たれ得ない。しかし、そこの欠損した「一枚の板のおカゲ」だけで、中みが守られて居たわけではない。当然、桶を構造して居る、「モロモロの板のおカゲ」といふ事は、わかりきって居る。しかし、我々は、「太陽のおカゲ」だけを感謝して、〈モロカゲ〉を忘れて居た、といふ事を、私達は、カタカムナ人に教へられたのである。もっともモロカゲと言っても、身近にあって、強くおカゲを受けるものと、遠くからのものとの違ひはある。それはあたかも、子供が育つときには、親の庇護が文句なしに最も強いが、社会の影響も必ず参与して居るようなもので、我々にとって、太陽の恩恵がどれ程大きくとも、太陽の力だけで、我々の生命が発生したり、保持されたりしうるものではな

い。確かに太陽の輻射が、我々の生命質や物質をつくる素材を、最も多く生成するが、「生命」といふものは、太陽のおカゲだけではなく、又、太陽自身の生命も、モロカゲによって、宇宙生気（イキ）が発現されたものなのだ、と彼らは見抜いて居たのである。

いかに当面の恩恵が大きくとも、真の、「本末の関連」を、見マ違へたり、見失ったりするようでは、カンが鈍い事になる。

我々は、太陽の輻射エネルギーを豊かに享けて居るが、恒星空間には、太陽のようなアサヒは数多く分布し、そこから、それぞれ輻射エネルギーが放出され、それらは、要するにアメに還元され、アメの密度の濃淡の波となって、宇宙空間に遍満して居る。又、天体からの電磁波の他に、アマのフトヒからも、アマハヤミや、アメのさまざまな過渡物質が、無限に放出されて居る。又恒星には惑星や衛星が伴って居り、それらも亦、さまざまの輻射波を放出して居る。それらのモロモロのおカゲで、我々の生存も、保たれて居るのだ、といふ事を、彼らは直観して居たのである。彼らはこのようなモロカゲを、〈モロサチ〉とも言って居る。サチとは「授かりの持続」、則ち「幸」の意である。この、モロサチの内容については、第二部以下のカムヒビキによって、次第に明らかになるであらう。

〈ウマシ　イキ〉

とは、「生れる示しのイキ（宇宙生気）」といふ意である。イキとは、前述のように、「イの気」といふ思念であって、我々が、「生命」といふ言葉で抱いて居る観念とは、多少異なるもので

ある。イキとは、単に「宇宙のもって居る生命力」といふような漠然としたものではなく、「宇宙が、モノを生かしてくる気」則ち、いろいろの物質が形成され、生命質が生れるのは、材料としての太陽の輻射物質が存在するだけではなく、そこに、宇宙のイキ（生気）が発現するのだ、といふ直感である。

▼もとより、さまざまの物質、生命質をはじめ、その構成要素（究極的には原子電子等）は、身近にある太陽から放出される電磁波が、最も大きな要素であるに違ひない。第二部に解説するカムヒビキの中には、この物理を述べたものもある。しかし、そのような物質だけで、「生命」が出現するのではなく、アマナやフトヒの根源にある〈カム〉の力と、〈アマ〉始元量の構成するモロカゲ、といふ、フタヤがあるのだ、といふ事を、彼らは、繰り返へし強調して居る。

つまり、彼らは、物質生命質の構成要素は、アマ始元量に基づくが、それがバラバラのマリ一個一個にとゞまれば何の力も表はさないが、それが構造されて、何らかのマトマリをもつときイキ（宇宙生気）が発現し、いろいろの力、例へば電気エネルギーや位置エネルギー等をもつと観じた。そして、構造されて発現するイキの正体を、巨視的にはフトヒ（宇宙の遠心核）、個々的にはアマナ（原子核）として把握し、更に、その、アマナやフトヒのカミを追究して、〈カム〉をサトったのであった。つまり、フトヒとは、アマナの大きな大きなモノ、と思へばよい。そうすれば、そこに巨大な求心力（向力）が発生したり、太陽（アサヒ）を生産したりする力が、潜められて居る事もうなづかれる。なぜなら、そ

れは、我々のよく知って居る「原子」の原型である。又「Y方向とか第三方向といはれるものは、アマカムを指向する方向」であるが、具体的には、この大宇宙の遠心核「フトヒを指向する方向」といふわけである。たゞ、フトヒは、アマナと同じく、潜象の存在であって、巨大な力をもつが、目にみえる固定的な存在では無い事を、よく知らねばならぬ。従って、Y方向も一定と考へてはならぬ。

〈フトヒ　ソトヨノ　ホホデミ　タマ〉

とは、「宇宙の遠心核とも言ふべきフトヒの外側（ソトヨ）に、いろいろな天体が、正反のツリアヒを以て発現する（ホホデミ）」といふ意味である。ホホデミとは、いろいろのモノが、機が熟して、八方に発散するスガタを意味する。

〈クシヌ　イソニギ〉

とは、「フトヒの外側に、自由に（クシヌ）寄り集った（イソニギ）天体群が賦存して居る様を、クシヌタマ　イソニギタマによって表はした」といふ意味である。クシヌは星団が自由なつり合ひを示し、固定ではない（ヌ）といふ思念であり、イソニギタマの有様を形容して居る。

〈アマヒ　カゲ〉

とは、「自由に集って現れる天体群は、アマヒのおカゲである」の意、フトヒもアマヒも結局同じことであるが、フトヒには核的存在の思念、アマヒには、カムを指向する思念がある。

〈アキツ　サカタル　マサチ　エミ〉

とは、「天体群を放出するフトヒは、宇宙の核（アマナ）であり、フトヒから分れて生れてくる諸天体は、アマヒのおカゲで、栄えの満ち足りた（サカタル）相互繁栄の恵み（マサチエミ）を、得て居るのであるといふことを、クシヌタマ　イソニギタマが表現して居る」といふ意味である。それは、前述の如く、原子に於て、核（アマナ）から、陽子中性子その他が生産され、放出されて居る相似象の、原型である。

〈マクラ　ハルタマ　トタテタマ　ヒコネ　クシヒコ　アマ　アサヒ〉

とは、「マのクラ、則ち宇宙球の空間に立体的な八軸状に張りめぐらされたクラ（マクラハル）に、それぞれ、統合し（ト）独立し（タ）正反配偶（テ）したクラが、親子や孫の根の如く、自由に集って（ヒコネ　クシヒコ）数多くの太陽系（アマアサヒ）となって分布して居る」といふ意味である。

〈アキツ　フタカミ　シヅハ　タテ〉

とは、「宇宙に展開されて居る諸天体のクラは、フトヒの作用とアサヒの作用とのフタカミが、正反対応して親和し、個々に、独立して、しづまって居る（シヅハタテ）といふ事を、それらのマクラハルタマ　トタテタマ　ヒコネタマ　クシヒコタマ等の双球が表はして居る」といふ意である。フタカミとは、フタヤタマの表象する、二つのカミ（起源）、則ち、アサヒとフト

ヒ言ひかへれば、アマとカムをさして居る。

〈ハルヒ　サチハヤ　アマツナギ　アマツシキタマ〉

とは、「ハルヒのサチ、則ち、フトヒとアサヒのフタカミの作用が、極限まで正反親和して（ハヤ）分布して居る諸天体のサチは、アマのナギ（粒子性）と、アマのシキ（基盤）にもとづくものである」との意である。アマツナギとは、個々の粒子に結球しようとする、アマの本来性を意味し、又、アマの微粒子、マリを意味する。アマツシキとは、アマに基盤的に敷かれて居る大きな力、後述の番力向力等をさして居る。（ヤシキハル七一頁、向力番力一五三頁、時空量一二一頁）

〈ヤマトヒコ　アキツ　フトチノ〉

とは、ヤマトヒコは、多くのアマの恵みが、統合されて存続して居る意であり、それは、フトチ、則ち、アマの恵みの稔り豊かな「地球」のことを指して居る。アキツは、こゝでも前後にかかって居る。

〈ハナヒラキ　イツセ　トヨサチ　ニギホスム〉

とは、「地球上に於て、植物が繁り、花が咲いて、豊かな稔り（トヨサチ）があり、いろいろの生物が分化して（イツセ）、ニギヤカに正反親和して繁殖して居る有様（ニキホスム）を、それらのハルヒタマ　サチハヤタマ　アマツナギタマ　アマツシキタマが表象して居る」といふ意味である。ヤマトは後に大和をあてたが、本来はヤ（飽和安定）マ（アマ）ト（統合）の思念である。

▼今、我々は、これらのタマの実物を見る事は出来ない。カムヒビキの文献中に画き示されて居る（別図）によっても、それぞれのカタチが、どういふ意味をどのように表象して居るのか？　名称と形象とに関はる、カタカムナ人の感じ方を、推察する事は不可能である。又、マガタマに七種の単玉がある事について、ナナヨツギといふ「七」の数で規制される物理の意味が考へられ、始端末端のサトリがあるように、ミスマルの十一種の双珠についても、「十一」といふ数で規制される物理といへば、「八」の飽和安定のオクタントの状態から、九十（コト、声音符参照）則ち還元の過程を経て、「十」でアマ始元量に統合され、又新しく「十一」から出発する、といふ、宇宙のもろもろの循環系の原型を示すサトリと、「十進法」の意味が考へられ、彼らの計算が、当時から十進法であったことがわかるのであるが、正直のところ、それ以上のことはまだ不明である。しかし、マガタマやミスマルのタマに表象されて居るものは、彼らのサトリの大綱である。彼らのサトリの内容については、更に第二部以下のカムヒビキによって、一層明瞭になるであらう。

さて、ミスマルのタマに関する、カムヒビキの意味を要約すれば、次のようになるであらう。

『イホツのミスマルのタマは、アマ始元量が、宇宙に降下（アモリ）する様を、十一種の双珠（フタヤタマ）のカタチによって表象したものである。則ち、その十一種のフタヤタマは、宇宙

のすべてのモノが、宇宙の広域関連のモロモロのおカゲで、宇宙の生気（イキ）が発現するといふ、アマとカムのフタヤから発生して、いづれも、正反対称のカタチをもって居る、といふ事を表はして居る。

先づ大宇宙の核といふべきフトヒを中心として、その外側に、モロモロの恒星が、正反のつりあひを以て発現して居る様を表はしたものが、ホホデミタマであり、多くの星が自由に寄り集って居る様を、クシヌタマ　イソニギタマによって表明して居る。

アマヒのおカゲと、モロモロのサチの恵みによって、アマタの、太陽系のような星座（アマアサヒ）が、フトヒから発生し、自由に独立して、相互繁栄して居る様を、マクラハルタマトタテタマ　ヒコネタマ　クシヒコタマが表はして居る。

我々の生命は、このアマのフトヒから発する宇宙生気（イキ）と、我々の属する太陽をはじめ、モロモロのアサヒ（恒星）の放出する勢力（モロカゲ）とのフタカミが、正反対応して、親和し、張りめぐらして居るサチ（恩恵の持続）の中に保たれて居る。そのことを、ハルヒタマサチハヤタマが表象して居る。

アマの本来性といふべきナギ（粒子性、微分性）を表はすものが、アマツナギタマであり、アマに基本的にそなはって居る無限のチカラ（具体的には、後出の番力向力）を表はすのが、アマツシキタマである。言ひかへれば、アマのナギ（粒子）のマリと、アマに基盤的に敷かれて居

る目にみえぬチカラとの、二つの要素によって、諸天体が発生し、その相似象として、天体上のもろもろの万象（イホツミスマル）が生れるのである。

我々の住む地球は、アマによって敷かれた、豊かな恵みが、存続して居るおカゲで、植物も動物も、アマの本来性をうけて、次々に分化（ナギ）し、繁殖して居るのである。』

▼要するに、マガタマが、マのスガタ、則ち、万物万象の相似象の原型としての、タカマクラ（大宇宙球）の、アマ界全体の相を表はして居るのに対し、ミスマルのタマでは、アマから降下（アモリ）して構成される、個々のモノの生命現象に就いて示し、アサヒのモロカゲのサチによって、宇宙の生気が発現する、といふ、サトリの大綱を表はして居る。

（昭和四十七年三月十日）

## （三）　マガタマの示唆するナナヨツギ（七の周期）の例

### ㈠　太陽の光彩の七年周期

▼太陽の黒点は、太陽の爆発によって多量の電子群が放出される現象であり、黒点が集って居る間は、カゲになって光彩が表はれない時期があり、黒点が分散してゆくと光彩が表はれる。則ち、太陽の光彩

自体はつねに存在して居るが、黒点が出るとかくされ、それが分散するまでに時間がかゝる。黒点の周期は十一年ごとに多発するが、光彩の周期は七年ごと、といふズレとなって、統計的に観測されて居る。そして、この太陽の光彩の周期は、地球上の気象が、七年周期で、多雨多湿を繰り返へす現象が観測されるのと一致する。則ち、太陽の光彩の周期の第二次的現象として、地球の気象が影響をうけて居るわけである。

(二) ハレー彗星（海王星族に属する周期彗星）の地球接近は、ほぼ七十年周期である。

表(一) ハレー彗星、公転周期観測記録

紀元前 466年（周代文献にみられる最古の記録）
…
…
239
…
86
11
紀元後 66
141
218
295
374
451
530
607
684
760
837
912
989
1066
1148
1222
1301
1378
1456
1531……アピアヌス観測
1607……ケプラー観測
1682……ハレー観測
1758……パリッチ観測
1835
1910……（明治43年5月18日地球が尾の中を通過する程接近した 2,300km）
1985…6（予想）

▼地球上では、第二次現象として、小規模の、火山の爆発や海潮の変化が、七十年の周期を以て観測されて居る。

▼古事記、日本書紀に誌された首都の移動は、次表の如く、周期的に気候の変動があり、海浸海退の波に沿うて居る事が判る。

▼都や陵が、高地にあったといふ事は、海水が迫って、高みに移った時期を意味し、低地にあったといふ事は、海が後退して、平野に耕地がひらけた事を意味する。海浸海退とは、このように、海岸線が陸地に入りこんで来たり、退いたりする事である。例へば、孝霊天皇の黒田の宮の標高五〇米は、この頃に、水準五〇米から水がひいて、水田化された事を示して居る。又陵は、貯水池の役を果し、乾燥期に大陵が造成されて居る。海退が大阪平野にまで及んだ仁徳天皇の代に、高津の宮が大阪の地に営まれ、巨大な仁徳陵が、生前に作られ、米つくりの拡大のあとがしのばれる。（表二）

奈良盆地大和の平原の五〇米等高線が、当時の基準線であり、豊かな雨量を有効に、自然保護と、水源の保持をはかって、神聖な大陵の水が旱魃にそなへられ、豊水期には、陵は小規模に簡素化されるといふ、知恵を示して居る。（井上赴夫氏著「宮と陵の移動の謎」による）

### (三)　大規模な火山の爆発、大規模な寒暖や海浸海退の七百年周期

▼七百年の周期ともなると、人間の一生では間に合はぬので、言ひ伝へや歴史の記録、又は年輪や、貝

## 表(二)　都と陵の移動と標高

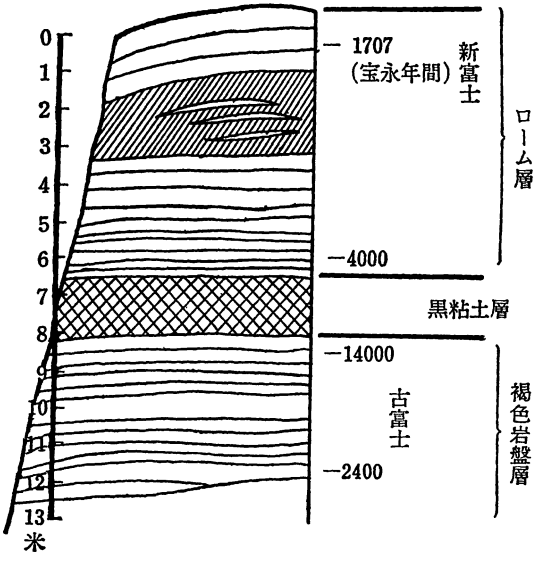
| 天皇 | 宮 | 標高(米) | 陵 | 標高(米) |
|---|---|---|---|---|
| 一　神武 | 橿原 | 七〇 | 畝傍東北 | 七五 |
| 二　綏靖 | 葛城高岡 | 一八〇 | 衝田岡 | 七〇 |
| 三　安寧 | 片塩浮孔 | 七〇 | 畝傍南 | 八〇 |
| 四　懿徳 | 軽(曲峡)(境岡) | 一〇〇 | 畝傍南 | 八五 |
| 五　孝昭 | 葛城掖上池心 | 一一〇 | 掖上博多山 | 一〇〇 |
| 六　孝安 | 葛城室秋津島 | 一〇〇 | 玉手岡 | 一五六 |
| 七　孝霊 | 黒田廬戸 | 五〇 | 片岡馬坂 | 一〇〇 |
| 八　孝元 | 軽境原 | 八〇 | 剣池嶋上中岡 | 九〇 |
| 九　開花 | 春日伊邪河　率川 | 八〇 | 率川坂本<br>伊邪河坂上 | 八〇 |
| 十　崇神 | 磯城瑞垣 | 一〇〇 | 山辺道上勾之岡 | 一〇〇 |
| 十一　垂仁 | 纒向珠城<br>磯城玉垣 | 八〇 | 菅原伏見立野 | 七〇 |
| 十二　景行 | 纒向日代 | 八五 | 山辺道上 | 一〇〇 |
| 十三　成務 | 淡海志賀高穴穂 | 一〇〇 | 沙紀多他那美 | 八〇 |
| 十四　仲哀 | 穴戸豊浦<br>筑紫河志比 | 二〇〇 | 河内長野<br>河内恵賀長江 | 二三五 |
| 十五　応神 | (軽入宗我桜)<br>難波大隅 | 八〇 | 河内恵賀裳伏岡 | 三八 |
| 十六　仁徳 | 難波高津 | 二〇 | 百舌野<br>毛受耳原 | 二一 |
| 十七　履中 | 磐余<br>伊波礼若桜 | 一一〇 | 百舌鳥耳原<br>毛受 | 二三二 |
| 十八　反正 | 河内丹比<br>多治比柴垣 | 四〇 | 百舌鳥耳原<br>毛受野 | 一〇 |
| 十九　允恭 | 遠飛鳥 | 一五〇 | 河内長野原<br>恵賀長枝 | 二〇 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 二十 | 安康 | 石上穴穂 | 五七 | 菅原伏見 | 九〇 | | |
| 二十一 | 雄略 | 初瀬朝倉 | 一二〇 | 丹比高鷲原 | 二五 | | |
| 二十二 | 清寧 | 磐余甕栗 | 一一〇〇 | 河内坂戸原 | 八五〇 | | |
| 二十二 | 顕宗 | 近飛鳥八釣 | 一三〇 | 傍丘磐杯丘 | 六〇 | | |
| 二十四 | 仁賢 | 石上広高 | 一二〇〇（八〇〇） | 傍丘磐杯丘 | 四〇 | | |
| 二十五 | 武烈 | 初瀬列城 | 一九〇〇 | 藍野 | 七〇 | | |
| 二十六 | 継体 | 磐余玉穂 | 六〇 | 河内旧市高屋丘 | 四五 | | |
| 二十七 | 安閑 | 大倭国勾金橋 | 一三〇 | 大倭国身狭桃花鳥坂上 | 八〇 | | |
| 二十八 | 宣化 | 桧隈廬入野 | 一二〇 | 桧隈坂合 | 一〇〇 | | |
| 二十九 | 欽明 | 師木島金刺 | 七〇 | 河内科長 | 一〇〇 | | |
| 三十 | 敏達 | 百済大井 他田 | 一〇〇 | 磐余掖上 | 一〇〇 | | |
| 三十一 | 用明 | 磐余 池辺雙槻 | 一七〇 | 倉橋丘 | 二〇〇 | | |
| 三十二 | 崇峻 | 倉橋柴垣 | 一一〇〇（八〇〇） | （大野丘～科長） | 九〇 | | |
| 三十三 | 推古 | 豊浦 小治田 | 二〇〇 | 滑谷岡 | 一八〇 | | |
| 三十四 | 舒明 | 飛鳥岡本 百済宮 | 一八〇 | | | | |
| 三十五 | 皇極 | 小墾田 | 三〇 | 大阪磯長 | 一二〇 | | |
| 三十六 | 孝徳 | 難波長柄豊崎 | 二〇〇 | 小市岡上 | 一三〇 | | |
| 三十七 | 斉明 | 後飛鳥板蓋・飛鳥川原・飛鳥岡本・朝倉吉 | 九〇 | 山科 | 八〇 | | |
| 三十八 | 天智 | 大津 | 九〇 | | | | |
| 三十九 | 弘文 | 大津 | 一〇〇 | 桧隈大内 | 一二〇 | | |
| 四十 | 天武 | 飛鳥浄御原 | 一〇〇 | | | | |

や珊瑚礁や、地層等の状態から判断される。

▼富士山は、七百年毎の海浸時（豊水期）に噴火し、火山灰層を形成したと考へられる。紀元一七〇七年の最近の噴火から逆算して、古富士の下面は、少くとも紀元前二万年以上の昔の地盤といふ事になる。それから約一万年の間に、十四層を造り、紀元前、一万四千年から四千年までの約一万年間は、黒粘土層で、その中には層がみられない。そして上下の火山灰層には植物が見出せないが、黒粘土層のみが、植物をまきこんで居る理由は不明とされて居る。し

図(一)　山中湖東岸の露頭を拡大して掘り下げた，富士山の火山灰層の考察
（科学朝日，1955年8月号町田洋氏による）



かし別の研究により、ローム層から粘土層への変化には、水がなければならぬ事がわかって居る。従って、この時期に大海浸があったと考へてよいであらう。とにかく、この黒粘土層の下部に古富士があり、現在の新富士は、その上に覆って居ることが、この調査によって判明した。

▼なほこの下層を堀れば、二万年以前の消息がわかる筈である。なほ、七百年の大規模な海浸海退の異変は、ノアの洪水、エジプトのピラミッド、黄河の大洪水等の、古代の大事件が、いづれも豊水期に相当し、伝説が、当時の気候を、意外な程に伝へて居ることになる。ノアの箱船の大洪水は、BC二九四八年といはれ、古代エジプトの建国は三千年頃で、ピラミッド時代とほぼ一致し、禹の即位はBC二二二八年であるから次の周期といふことになる。エジプトはその後、テーベ遷都がBC二四〇〇年で約七百年、更にエジプト再興が一六七〇年で約七百年、二十二王朝がBC九四三年で約七百年、と繰返されて居る。(志田順氏、昭和十年、科学智識二月号による)

▼ナイルの洪水は、その後の豊作を約束したと思はれるから、ピラミッド上に種子を貯へて、時をまてばよかったのであらう。巨大なピラミットの造られた古王朝の時代が、ナイルの豊水期と一致し、豊作に恵まれた事が、多数の労働力を養ひ得て、大ピラミットの建設を可能にしたと考へられると井上氏は指摘して居られる。

▼又、地球の寒期の七百年周期は、寒地の民族の南下を促し、ゲルマン、フン族、モウコ族の南下の時代がある。暖期には、逆に暖地の民族の北上があり、カルタゴ、サラセンの時代をつくった。民族の闘争や移動には、このような地球自然の寒暖の波に押し流される、やむにやまれぬ背後の圧力があった事が考へられ、ローマの繁栄、カルタゴの滅亡、東西ローマ帝国の分裂、サラセンの北上、十字軍なども、波動の谷を契機として居り、暖期の頂点には、フエニキヤの海上交通、アフリカ一周、ギリシヤ、ローマの海軍建設、ローマインドの海上交通、グリーンランド、北米の発見渡航、コロンブス新大陸到着等と、活潑な海洋時代を示して居る……。このように、世界の興亡の歴史と寒暖周期との深いつながりを、井上氏は「日本古代文明の謎」の中で論じて居られる。

㈣ 七千年周期の例は、地球上では、地層、化石等にみられる。

▼マガタマの七種の単玉によって示されて居る「七」の周期性は、このような七年、七十年、七百年等の上昇高調波と共に、日、時、分、秒等の、下降の収縮高調波にもみられる筈である。カタカムナ人は、秒以下の、電磁波よりも下に、下降の収縮波の最小の極限の〈イマ〉といふ瞬時点をとらへ、それは、上昇高調波の最大の極限の〈アマ〉の微粒子（マリ）と共通し、それが、トキトコロ（時間空間）の本質でもあると直観した。カタカムナ人は、すべての物質は、このマリの変遷とサトリ、又、光速以上の瞬時的に波及して居る〈アマハヤミ〉を観じ、又、アマから発生するすべての現象に、七の周期性がみられることを示唆して居る。現代科学は、まだこのカタカムナ人の物理を認めては居ないが、直観の鋭い科学者の中には、「七」の周期性の現象をとらへた人々があらはれて居る。

# 四、カムヒビキ　第二部

## （一）始元世界と、正反宇宙を表現するカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
ア　アヤ　アカ
ア　ア　アナ　カシコ
アオニヤシ
アマヒ　アキツネ
ミナカヌシ
タカ　カム　ムスビ　アマハヤミ

〈ア　アヤ　アカ〉

を直訳すれば、〈ア〉は「全く見えない」。〈アヤ〉は「はっきりは見えない」。〈アカ〉は「明らかに見える」と言ふことであり、始元の世界（ア）と、宇宙の現象界に表はれた、正と反（アカとアヤ）の存在を表現したヒビキである。

▼〈ア〉とは、すべての始元、アヤにもアカにも変遷してゆく背後のアマをさすヒビキである。〈アカ〉とは、カタチに表はれたもの、則ち我々の目に、明らかに見えて居る現象をさして居る。〈アヤ〉とは、「アヤメもわかぬ」とか「アヤシイ」とか「アヤマチ」等といふ言葉でも感じられるように、現象界に存在するモノであるが、よく判らず、とらへ難いモノをさして居る。現代科学では、「反物質」などとアイマイに称して居るが、カタカムナ人は、全く別の角度から「反」の要素を扱ひ、すべて物には正（アカ）と反（アヤ）のある事を直観して居た。イカツ（電気粒子）にも正（サヌキ＝男性）と反（アワ＝女性）があり、宇宙にも地球にも、又精神や社会の現象にも、すべてに相似象として、正と反（男女、陰陽　吉凶等）があり、そして、それらの正（アカ）と反（アヤ）の背後に、目に見えぬ『潜象』（カム）の〈アマ〉があるといふのが、カタカムナのサトリの第一である。彼らは、ア　アヤ　アカ　としか言はない。しかし、宇宙の万象の正反性と、その根源とを、ズバリ！　とつかんで居る。

さて、〈ア〉といふ音は、今日でも、世界のどの民族も共通に発する感嘆の音であり、安堵の音でもあって、凡そ、オドロキ　オソレ　ナゲキ　カナシミ　アハレミ　アマエ　アコガレ　ヨロコビ　オチ

ツキ　ウナヅキ　イノリ等、アらゆる感情を表はす、人間の心の、最も根元的なヒビキをうつした音である。最も切ない時に発する音であり、赤んぼの産声も「ア！　アヤ　アカ」である。殊に日本語にとっては、〈ア〉は、アらゆるモノの始元の母体（アマ）のアであり、〈アマ〉といふ語感には、最も根源的な民族感情がこもって居る。〈アマ〉には、容れ物と、中身の、二つの意味があり、容れ物としては「全宇宙」をさし、中身としては「アマ始元量」である。従って、〈アマ〉といふ言葉でよばれるものには、「天」があり「海」があり、「雨」があり、「女」がある。〈アマ〉は、限りなく「甘い」ものであり、心から「甘え」たくなるのは、〈アマ〉が、自分達の、真実の生みの親だからである。その代り、図にのってむさぼったり、背いたりすれば、「バチ」が当ることにもなる……。日本人の民族的連体感は、このような〈アマ〉といふものを、みんなの共通の大きな「オヤ」として、「アリガタイ」と感じるところにある。難しいリクツは知らぬが、誰にでもわかる気がして居る。この、日本人の無意識の哲学は、しかし、さて、それを、外国人に、理論や感情で理解させようとすると、非常に困難な問題となり、どう説明してよいか？……日本人自身、ハッキリとした認識がないのであるから、何となく、彼らに圧倒され、オトナシク敗けて、引き下ることになり勝ちであるが——実は、日本語の起源は、「アマ」や「カミ」などの言葉をつくり出した、カタカムナの上古代人の、物理的な世界観がもとになって居るので、日本語ほど、短い言葉の中に、多くの意味の集積をもつ言語は無い、と言へるであらう。

**▼日本語の特質**　因みに、「パッ」とか、「ワー」とか、又「ピカリ」「ボッン」「ユックリ」「ドッサリ」「スッカリ」「ヒッソリ」「アッサリ」「コッソリ」とか、又「グズグズ」「コロコロ」「クルクル」「フワ

フワ」とか、又「スガスガしい」「セイセイする」「ゾオッとする」等々の表現は、日本人なら、それこそ誰にでも「パッ」とわかるが、外国人には意味が通じない。日本人は、このような表現をまじへなければ、ほとんど会話が出来ない程である。例へば、「グズグズ」「シブシブ」「イライラ」「ハラハラ」とか「ゲッソリ」「ケロリ」「サッパリ」「ホロリ」とか「ギュウ」「フワッ」「スカッ」等といふ状態を、外国人にわかる言葉にしようとすると、大へん苦労して、いくつもの形容詞や動詞副詞等を並べても、そのニュアンスを伝へるには不充分である。しかし日本人同士なら、「ノロノロ」「フラフラ」「ヨロヨロ」「ボソボソ」「コチコチ」「ヒヤヒヤ」「バラバラ」とか「スッキリ」「シックリ」「ガッカリ」「ギッチリ」「ホンノリ」「ピッタリ」「ピシリ」「ズバリ」等だけで、その様相が、たちどころに、「マザマザ」と、共感できる。古来の歌にも文にも、「ホノボノ」「サヤカ」等適切なものが選び使はれて来た。「ウマウマしましょ」「バッチイ」「ポンポン痛い」等と、赤んぼの言葉の始まりも、このような音から入ってゆく。日本人はこの日本語の自在性に任せ、外人のような大きな身ぶりや話術の必要もなかった。

「サンサン」とふりそそぐ冬の太陽は「ポカポカ」と喜ばれるが、「ヂリヂリ」とやきつける夏の太陽は「ムンムン」して嫌はれる。春のつくしは「ツンツン」と芽を出し、五月雨は「シトシト」と降り、入道雲は「モクモク」と涌き上り、秋の落葉は「ハラハラ」と散る。同じ笑ひでも、「ニッコリ」と「ニヤニヤ」、「ニンマリ」と「ニタリ」、「ゲラゲラ」と「ケラケラ」、「ワハハ」と「オホホ」「カンラカラカラ」「ホクホク」等を言ひわけ、怒る姿にも「ブンプン」「ブイッ」「ムラムラ」「カッ」「ムッ」等といふニュアンスの違ひを、日本人なら誰でもマ違へることは無い。同じくのびるものにしても、「グッ

とのびる」「スラリとのびる」「ビーとのびる」「デレデレのびる」「ウンとのびる」「ボヤッとのびる」「ヘナヘナとのびる」等々の形容は、日本人なら誰にでも「アリアリ」と通じるものがある。例をあげ出せばキリがない。汗は「タラタラ」愚痴は「タラダラ」、足ぶみは「タタラ」である。又、「ソロソロ」「ソヨソヨ」「キリキリ」「ビシビシ」「パクパク」「モリモリ」「イヨイヨ」「ナカナカ」「イロイロ」「ドンドン」「シミジミ」「ヨボヨボ」「ヒョロヒョロ」「ヨチヨチ」「ツルツル」「スベスベ」「フンワリ」「コンモリ」「ソワソワ」「イソイソ」……日本人は、外人との会話中にも、又、擬音語は幼稚だから避けるべきだと、如何に努める人であっても、日本語を使ふ限り、このようなヒビキの言葉をぬきにして話すことは、まづ不可能である。

日本語に夥しくあるこれらの例は、他国語にもみられる、単なる擬声語や形容語の類ではなく、もっと重要な、日本語の特殊性に基く現象である。勿論「ワンワン」「ニャンニャン」「モウモウ」「ゴロゴロ様」等の、単純な擬声的な音をうつした代名詞の類は、幼児語にたくさんあり、それは他国語にもあって、西欧人には、「ワンワン」とは聞えなくても「バウバウ」に当り、「ネンネ」や「アンヨ」は、「ダディ」や「ドド」といふようなものである。ところが日本語の場合は、それだけに止まらず、例へば、おなかが「ペコペコ」で「ガツガツ」食べたとか、雨が「ザアザア」風が「ピュウピュウ」眠りが「トロトロ」独楽が「クルクル」等の、視覚や聴覚から入った形容語も多く、これは既に、単なる擬音語ではない。又、シナ語からの影響も加はって居るので、一般に混同されて居るけれども、日本人が、このような言葉を、ムヤミにつくり出した原因はどこにあるかと言へば、それは、カタカムナ人の造語

法に、その原型があったと思はれるのである。

「シイーンと静まりかえる」といふ言ひ方は、何の物音もしない静寂の裡に、鳴りわたって居る、たとへようもない巨大なヒビキを、「シィーン」といふ声音にうつして表現して居るのであって、真夜中に、唯一人、宇宙の虚空を見上げる時など、この「シーン」といふ声音に托された、言ひようのない畏しさが、日本人なら、「シンシン」と実感されるのである。

つまり、「ワンワン」「ニャンニャン」は犬や猫の声音をうつしたものであり、「ペコペコ」や「ガツガツ」は目に見える姿をうつしたものであるが、「シイーン」や「イライラ」「スガスガしい」「スラリ」等々になると、もはや、それは、我々の耳や目に感覚できる音ではない。しかし、もとはと言へば、やはり、それらも擬音語といへない事は無いのである。

擬音語は幼稚だとか、原始的だといふなら、もとよりそういふ面もあるが、日本語の場合に多くみられるこのような特殊性は、原始的といへば、確かにそれに違ひはないが、そのおくには、非常に高度な意味があったことを、見落してはならぬのである。

則ち、〈ア〉の音に、民族共通の基底思念があるように、天然自然の発するヒビキを感受して、それを人間の声音にうつせば、およそ、カタカムナの四十八の音でとらへることが出来、それらは、おのづから、天然自然が、それらのヒビキを発して居る様相を、意味する事になるわけである。いはゞ、そのような基底思念をもつ音を、二個・三個と組合せて、言葉の意味を構成したものが、日本語の原型であったから、日本語は、天然自然の発するヒビキを直感して、声音にうつした、カタカムナ人の心情を、

今なほ温存して居り、それが、我々日本人の無意識の共通感情になって居るのであらう。日本語の意味の多重性や、多変性、カケ言葉やシャレ言葉をはじめ、自由自在に変転する性格は、そのまま、天然自然の本来性なのである。私達の遠い祖先のカタカムナ人は、天然自然のリズムの中にとけこんで生活し、天然自然の発するヒビキをありのまゝに感受して、その本源をサトリ、人間語におきかへていった。それが、日本語の起源であり、そもそも日本語は、**天然自然の相（スガタ）の「相似象」**として発生したといへるであらう。従って「奇妙さ量」が多く、現代人からは、「アイマイである」とか、「非科学的だ」などと、非難される面も伴ふのである。

近頃の日本語は、もっぱら「自然」といふ語を用ひ、「天然」はまだしも、「アマ」などといふ言葉は縁遠くなり、天をアマとはいっても、女をアマといふ事は、下賤な言葉にのこるだけである。しかしながら、〈アマ〉といふ古い和語は、遠い昔のカタカムナ人の直感から生れた、天然、自然、宇宙を含む、大きな、〈ヒビキ〉の言葉であったのである。

こころみに、「アー」「マー」と、ひとり、静かに、スナホな心で発音し、そのヒビキを聴いてみればよい。日本人なら、何か伝ってくるものがある……。

思へば、日本人同士なら、どんな階層の人々の間でも、教育程度の差があっても、少々智能が低くとも、誰とでも、「グズグズ」とか「コロコロ」とか、「キッパリ」、「ボンヤリ」等と言へば、すぐにその様相が相手に通じるといふ事は、……日本人自身は別に何とも感じて居ないらしいが……実は、おどろくべき事なのである。現代人は直感力が劣へた等と言ひながら、しかし、これは、実にすばらしい直感

ではないか?! 則ち我々は、「グ」とか「ズ」とか「コ」とか「ロ」とかいふ天然自然のヒビキの表明する意味を、瞬間的にサトル訓練を、日本語といふ、天然自然の相似象として発生した言葉によって、生れた時から、毎日毎日、無意識のうちに積んで居たからこそである。欧米の人々が、自分達の民族の古代のココロ（伝統）を知らうとして、ラテン語 ギリシャ語等の習得に払って居る苦労を考へれば、我々は、何とめぐまれて居る事であらうか。我々が今使って居る現代日本語は、カタカムナの上古代の人々のココロ（直感）で創作された古代日本語の伝統を、そのまま受けついで居ると言へるのである。**日本人は奇妙さ量が多い** といふ印象を、外国人にあたへるのも無理は無い。

このような日本語は、外国人の目にも、正反の評価を以て見られて居る。「日本人の書いた論文は訳がわからない」「日本語は科学にむかない。従って日本人は非科学的だ」として劣等視する意見に対し、「最近の日本人の数学や物理学の研究に、独自なものがあるのは、自分達の科学の方式とは異る発想によるもので、それは、日本語に原因があるに違ひない。科学的なゆきづまりを打解する意味で、日本語を勉強したい」といふ学者もある。又、「未来学に於て、将来の、殊に学術用のコンピューターには、日本語が最適である」といふ意見もある。我々は、「日本語は西洋語のような体系が無い」「論理的で無い」「擬音語や形容語が多くて、原始的だ」要するに「日本語は非科学的だ」等と言はれて、卑下する必要はない。それどころか、日本語のもつ真の特性を知れば、いかに、それが素晴らしい、興味深いものであるかに「アー」「オー」と感嘆せずに居られぬ筈である。そして、もし我々が、西欧人の発想のしかたを知り、日本語の不得手な面を認識しさへすれば、その弱点を補って、西洋の科学者達に、満足

を与へうる論文を書く事ぐらいは、さほど難しいワザでは無い。確かに、日本語を、外国語にうつす事は至難であるが、外国語を日本語に訳すことは、比較的容易であると言はれるのも、「日本語」のもつ「集積」の大きさによって、解されるであらう。その意味からも、我々は、現代の科学に追随するのではなく、カタカムナ人の直観に習ふべきであることを痛感する。

古来、日本の庶民は、日常、手指を惜しみなく使って、こまごまと、生活用具や、美しい細工もの等をつくって暮して来た。日本人の器用さは、「器用貧乏」や、「他人のものまね」等のマイナスの一面も伴ったけれども、しかし何と言っても、柔軟な、多様な、融通自在な「器用さ」といふものは、日本民族のすぐれた特性である。そもそも、手わざと、アタマやココロのハタラキとの、深い関連を考へる時、これも亦、「日本語」といふ言葉のもつ本来性に、しらずしらず、つちかはれた、**相互訓練**のたまものと思はれる。則ち前述の如く、日本語のなりたちは、天然自然の相似象として、変転極まりない、自由な、しかし、実は、どこまでもスジの通った正確さを蔵しながら、融通無碍に展開する、天然自然のヒヒキを、うつして創られた言葉であったから、そのような本来性を受けついだ日本語を、赤んぼの頃から、日常使って暮して居れば、ひとりでに訓練されて、日本人のアタマが柔軟に働き、その能力が、手仕事にも及び、その手指の絶えざる鍛練が、又逆にアタマを訓練して、精神構造や、生活態度にまで、影響して来たと言へる、といふわけである。

聖書では、「始めに言葉ありき」であるが、カタカムナでは、「ヒビキあり」といふ事になる。もしも「始めにあった言葉とは、神の言葉である」といふなら、あるひはそれはヒビキにも通じようが……。

しかしはじめから、人間の「思考」によって言葉を構成すれば、いかにそれが「神の言葉」のつもりであっても、真実のヒビキから逸脱する危険がある。そのような見解は、たまたま〈カムヒビキ〉の内容と一致する事もあるが、根本の発想は、全く異るのである。

私達が上古代人の言葉を翻訳するに当って、たとへば、「カミ」とか「ヌシ」とか「アカ」とか「アマ」とかいふ、ありふれた言葉に対しても、つねにみづから厳しく心して居る事は、それらを、既にできあがった言葉、則ち、神、主、赤、天等として、現代人の心理で忖度して、上すべりな解釈で律することが、あってはならぬといふ事である。どうしても、現代人の「思考」は一時停止し、彼らが、天然自然の発するヒビキを感受して〈ア〉といふヒビキには〈ア〉といふ天然の様相を直感し、〈マ〉といふヒビキを感受して〈マ〉といふ声音にうつし、〈カ〉とか〈ミ〉とか〈ム〉とかの、一音一音の本来のヒビキをサトリ、そして、それらの声音を組合せて、言葉をつくり出した、そのカミの上古代人のココロを、「追体験」する心地になって、忖度するのでなければならぬといふ事である。彼らの用語を、古事記以下の、漢字にうつしたものは、参考にはなるが、もはやそれを根拠にすべきではない。又、発声学的な、人類一般の原始音声の研究によっても、解釈しきれるものではない。少くとも、古事記等の漢字にうつされた言葉の音声のヒビキを、漢字渡来以前の彼らの文字則ち**カタカムナの図象文字**にもどしてみる必要がある。

生物的なスナホな直感によってヒビキを聴き、そこから生れた言葉に基づいて、自然に思想がマトマル、といふ態度でつくられた日本語の伝統を、私達は、あくまでも大切にすべきであり、「人間的な思

考」で理論をカタメては良くない。何よりも先づ、天然自然のヒビキを、スナホに聴くといふ態度から出発すべきである。そしてその為には、カン といふ事を、アイマイな、前近代的な、低い認識のまゝにとゞめておかずに、人間の最も基本的な性能として、現代人の知性を以て、改めてとりあげるべきであり、（カンの項参照）我々は、どうしても自分の「直感」をスナホにし、「直観」をただして「勘考」するしかないといふ、反省の上に立って居る。

要約すれば、日本語の一音一音は、天然自然のヒビキを感受した、カタカムナ人の直観物理から、出発して居るので、そのような基底思念を潜めた一音一音を、二つ三つと、つないで成り立つ、日本語といふものの特質は、おのづから、天然自然のそなへもって居る特性の、相似象があらはれる、といふところにあるわけである。例へば、〈ア〉といふ音は、アヤ、アカといふ「正反」の、相反する、明と暗の逆の意味をもつ現象になってゆき、アイマイ、アヤフヤ、アヤマリ、アク等の歪みの意味にも、又、アマ、アマネク、アオ、アキラカ、アラハレ、アマナ、アメ、アナ、アワ、アミ、アマリ、アマイ、アフグ、アウ、アエ、アタフ、アム等々と展開し、変遷してゆく。又、〈ムカヒ〉といふ言葉にしても、敵対して抵抗する向ヒと、親しみ迎へる向ヒとの、「正反の逆の意味が出るし、〈ナリ〉といふ言葉にしても、天然自然のしわざ（ナリ）が、本来性（ナリ）と成り（ナリ）、則ち、ナリタチ（性質）ナリフリ、ナリユキ、ナリハヒ（業）、ヒトトナリ（為）等の意味にも通じる。このように、一音一音の基底の思念に沿ひつゝ、自由に展開し、変遷してゆく、その様相は、さながら、天然自然の特性であるところの、正と反の対称性及びその歪みや、互換重合性、微分統合性、極限循環性等の、相似象を示して居

るのである。（前号基本パターン及び次号参照）

こゝでは、こうした、日本語の特質を指摘するにとどめるが、これは、単に日本語に限定される問題ではなく、およそ、現象にあらはれたものの根源（カミ）を考へる場合に、必ずゆきつく方向であり、日本語も、その現象の、一つのデータであるといふわけである。

すべて起源を論ずる場合に、最も注意すべき要点は、二次三次の原因を、根本的な本質の如くに、思ひ違へる為の混乱である。根源的な本質論と、そこから変遷して生じた、二次三次の現象論とを、見抜く直観が、何よりも必要である。

カタカムナ人は、彼らの知り得た真理（サトリ）を、クドクドと多言を弄さず、極めて端的に表現して、人々に示して居た。直観性能の劣へた後代人が、苦労して漢字におきかへた古事記等の晦渋な伝承から、カタカムナ人の本来のヒビキを聴きとる事はムリである。私達は、どうしても、自分達の「カン」を正して、カタカムナ人の発声の音に、ヂカに感応するしかない。さて、次のヒビキに移らう。

〈ア　ア　アナ　カシコ〉

とは、直訳すれば、「見えない見えない。暗い暗い。アナは畏い（孔は奇妙だ）」といふ事であり「アナは目に見えぬ、奇妙さ量（ストレンジネス）の多い世界だ」といふ意味を表現したヒビキである。カシコとは、カシコミ、カシコネ等と展開し、威儀を正して尊重する気持である。〈アオニヤシ〉とは、万葉集などに「アオニヨシ」となまって歌はれ、意味の不明な枕詞と説

明されて居る。このようにして、カタカムナの言葉は、後世の日本語の中に、意味も知られずに、生き残り続けて来たのであった。さて、〈アオ〉とは、現象に表はれるすべての物質、生命質の「発生源」を指すヒビキである。例へば、アオヒトクサと言へば、人や草等を発生する源の意であり、要するに、アマの始元量を指すと同時に、そのアマのカミ（起源）のカムを指向するわけである。従って、〈アオニヤシ〉とは、「アオにヤのシメシがある」といふことで、「目に見えぬアマの方向は、宇宙に現象する、すべての正、反のモノ（アカアヤ）の、背後に示されて居る」といふ意味になる。オとは、六方の立方に発現するといふヒビキであり、ヤとはものの極限、根源の意、シとは示しの意である。

**▼Y方向**　すべての物質や生命質の背後に存在し、すべての現象を発生させて居るモノは何か？　それがアマの元である、といふのがカタカムナ人の直感である。現代科学で「反物質」と言はれるものは、「地球重力に反するマイナスの質量をもち、地球上に存在する時間が極めて短い（億分の一秒）」（反物質の項参照）と説明されて居るが、その指向する方向が何であるか？　つまり、どこから発生して、どこへ消失するのか？　といふ事は判って居ない。そして、そのような物質は特別なもので、「地球上には存在し得ない」とされて居る。しかしカタカムナ人は、反の物質とは、そのように、ものが崩壊還元するときにも出るが、結合の状態（正の物質）の中にも存在して居るモノである事を直観して居た。要

するに「反」の要素、云ひかへれば奇妙さ量の大小は、アマナの量の多寡による、といふ直観である。カタカムナ人のいふ〈アナ〉とは、目に見えぬ始元世界から、アマの分身（アマナ）や、正反の電気（イカツ）を生み出して、正反の物質（アカアヤ）を発生し、又、それらのすべてのものが、やがて崩壊して、そこへ還ってゆく、目に見えぬ、暗い深い、底なしのアナ（カム）を意味して居るが、アナは、相似象的に、現象界にも存在する丸いアナであり、女性器も、生命（イノチ）を生むアナに通じる。うづ潮が渦巻いて、吸ひこまれてゆくのもアナである。アナは又、「アナニヤシ（古事記）」「アナトウト（祝詞）」等として感嘆詞的にも使はれる。

要するに、「アマーカム」を指す方向が、最近「Y方向」「第三方向」等と云はれて居るものと思はれるが、それを体覚的にわかり易く示せば、母親が、赤んぼに乳を吸はれる時に感じる方向である、と言へばよからう。それは、母体の内奥から、「アマのアナ」に通じるフシギな感覚であることを、母親なら誰しも実感できるし、又、乳を吸った事のない人間は無いのであるから、誰しも、本能的に知って居る筈である。それは、男女とも、死ぬまで、つねに、無意識のあこがれを抱いて居る感覚である。

▼なほ、後代人が、古事記等の神話中に、ワイセツなものがあると解釈したのは、甚しい無理解のほどを示すものであるが、しかしながら、全くのデタラメな誤解ではなかった、といふ事は、用語例などから察しられるのである。それを、卑猥な感情でとってしまったところに、後代人の精神の堕落さが、如実に露はれて居る。

▼ノリト　なほ、後世の神道が、カタカムナの伝統を失脚しながらも、神前に捧げる祝詞などが、一種独特の言ひまわしで、「カシコミカシコミテマウス」と唱へられて来たのは、後世漢語や外来語の影響下に在っても、神のカミ（起源）に対するときだけは、やはり、そのカミ（上古代）の調子で、一音一音、ユックリ唱へねばならぬ、といふ気持が、何となく、古いカタカムナのオモカゲを、残し伝へて居たのかも知れない、と思はれる。

「マウス」とは、「申す」ではない。古いノリトには、「間宇須」とあてて居る。間はアマのマであり、宇は宇宙、須はスベカラク、必ず、の意である。則ち、人間が申すのではなく、「アマのカミ（起源）に必ず帰すべきものである」との意である。

〈アマヒ　アキツネ〉

とは、「アマヒが、個々に現れる現象（アキツ）の、根源（ネ）である」といふ意味である。アマヒとは、マガタマの表象物に示されて居る通り、すべてのモノを発生するモトの、アマ始元量をさすと共に、そのアマのカミ（カム）を指向する思念である。

則ち、現代の科学が無視して居るアマ始元量こそ、タキオンとか、反物質とか、原子核等の、科学では未知の領域を説明する上に、重要な物理の「元」であることを、示唆するヒビキである。

▼後代人は、アマの力を、体覚的に感受する、カタカムナ人の常識を失ひ、その代りに、神や仏を出現せしめた。もとより神や仏は、アマの相似象として見る事も出来るけれど、カタカムナ人には、神秘思想は全く無く、非常に高度の物理的な「元」として、一貫した世界観を展開して居たのである。（前号参照）

〈ミナカ　ヌシ〉

とは、「アマヒは、すべてのモノを発生し、その正反の現象世界（天体から原子電子等に至るあらゆるモノ）の中（ミナカ）に、ヌシとして潜在して居る」といふ意である。〈ヌシ〉とは「目に見えぬ潜象（ヌ）として示されたもの（シ）」といふ意であり、マガタマに示されたフトヒもアマヒであり、後に出るアマナは、その相似象である。

▼アマナ　とは、アマの分身であり、具体的に言へば、アメが集合凝縮して密度を増した、核的な潜象であり、古来、生命とか、心とか、又霊魂などとよばれる心霊現象の神秘の主体であり、現代科学の「奇妙さ量」の主役も、このアマナに他ならぬのである。原子核とよばれるものもこれの相似象であり物質の時間空間量、質量、などとよばれるものを支配する主体でもある。又、後述のエネルギーと物質の相互転換も行って居る。従って、アマナの行動は、自身は目に見えぬ透明な粒子や波動となって、ア

マ界のマのユガミやナミやシマとなり、又現象界に於ては、サヌキ・アワを始め、いろいろな物に変遷して、アマの力を代行するヌシである。則ち、ミナカヌシといふ言葉は、後代神話の神の名として伝へられて居るが、その起源は、このような意味をもつ、ヒビキであったのである。（次号詳述）

▼ミナカヌシ　ヌシが「主人」の意になったのも、そのもとはこゝから出て居る。つまり、ヌシとは、一つのマトマリを構成する中心核的な存在であるが、それ自体は、表面に現はれぬのが、本来の相（スガタ）なのである。ヌシはつねに、カゲにあって奉仕するモノである。主人が大きな顔をして威張り出せば、それは、アマの相似象から逸脱したスガタとなる。カタカムナ人の心情には、いつも、あらゆる現象の中に、目に見えぬ「ヌシ」を観ぜずに居られぬ直感があった。そしてそれをカシコミ、仰ぎ見る思念があって、言葉がつくられて行ったのであった。

「オヤがコを生み、育ててやった」と思ふ後代人の錯覚からこそ、「孝」を要求する心理が出る。たしかにコはオヤの身体から生れ、オヤはひたすらコをイトシんでくれるが、「イノチ」を生み育ててくれるモノは、人間のオヤの力だけでは決して無い事をサトリ、そこにも、つねに、目に見えぬ、アマーアマナのかゝはりを感じて居た、そのようなカタカムナ人の心情からこそ、こゝろからの「アリガトウ」「モッタイナイ」「ゴクロウサマ」「オカゲサマ」等といふ、他国語に翻訳不可能な、直訳すれば意味のわからなくなる、独特の日本語の原型が発生したのであった。

直感性能の劣化した後代人は、アマを擬人化したり神格化したり、創造主にみたてなどして、どの民

族にもみられるような、神秘思想を交へて解釈するようになったが、それでもなほ、「契約」や「イケニエ」を必要とするような、他民族の宗教とは、おのづから趣を異にするものがあるのも、その奥に、さすがに、アマのヒビキを伝へるカタカムナ人の心情が、無意識の裡に、遺って居たからであらう（前号参照）

〈タカ　カム　ムスビ〉

とは、「ミナカヌシ、則ちアマナは、独立したカタチあるもの（タカ）と、カタチなきもの（カム）を、生産する（ムス）もと（ヒ）である」といふ意味を表はして居る。つまり、ミナカヌシ（アマナ）の役割を説明して居る。この場合のカムといふことを、我々の概念にもち易いもので説明すれば、形のみえぬエネルギーや力のようなもの、と思へばよいであらう。

▼後代人は、このようなカムヒビキのカミカタリ（上語）を解し得ず、前述の「アメのミナカヌシ」とか、「タカミムスビの神」、「カムミムスビの神」等の神名や、神話に置き換へてしまったのである。

〈アマハヤミ〉

とは、「無限の速さをもつアマの粒子」の意である。アマハヤミは、前述の如く、電磁波

（光波や電波等）のような振動で伝はるモノでは無いから、光速のように時間がかからない。アマの力は、いかなる所へも、瞬時的に及ぶ超光速である。丁度、引力が、どこにでも及んで居るように、アマハヤミは、指向する方向に、即座に波及する。最近まで、光以上の速さが存在するといふ事を、科学は認めなかった。しかし、正直なことに、科学が、今なほ捉へかねて居る「反」の世界の「奇妙さ」の主体は、いづれも、この、アマの「元」の方向（Y方向）にあり、科学が、もう少し進展すれば、イヤ応なしに、〈アマ〉を、「奇妙さ」の「元」として認めることになるであらう。

▼アマハヤミ　「パッ」と何かを感じるといふ言ひ方を、日本人はよくする。詩人や、作曲家、芸術家、作家たちは、屢々そのようにして、パッとヒラメく「インスピレーション」により、創作の構想を得るが、我々一般人とても、日常生活の中で、その人なりの、こうした経験はいくらでももって居る。それは、当面の意識と関連のある事もあるが、大ていは、全く無関係、無意識裡に、突如としてヒラメくものである。俗に「ムシが報らす」といふのもそれであり、「マがさす」といふ時のマも、単に「魔」のみではなく、広い意味で、アマの「マ」がさすとみてよからう。「パッ」とヒラメくその速さは、普通、電気的なものと考へられて居る。確かに、それを解釈しようとしたり、文章なり作品なりにうつそうとして、脳細胞が働き出せば、電磁波速度に変るに違ひないから、アマハヤミは、「電気」を発生させる事はあるが、それ自体は「電気」では無い。もしそれも「電気」なら、コンピューターも、記憶や計算

の他に、「インスピレーション」や「マ」や「ムシ」のしらせをキャッチする筈である——。それはホンの一瞬、鮮やかに「パッ」とヒラメき、どんなに早くうつしとらうとしても到底、脳の電気の追ひつける速さではない。ホンの一瞬時の内容を、イザ現実に表現しようとすると、なかなか適確には捉へ難く、何百の文字、何時間の労力を以てしても、足りない。しかし、それは、確かに「パッ」とヒラメき、その瞬時には、ハッキリと「わかった」のである。

一体、この奇妙なハタラキの正体は何なのか？　それは、どこから発生するのだらう……このナゾを解くカギも、実は、アマハヤミにある事を、カタカムナの物理は示唆して居る。〈アマハヤミ〉とは、現代科学の捉へた、タキオンとは異るが、決して一般の、原始人的な呪術的、神秘思想の類ではないのである。電気でも光でもないから、従来の科学のテクニックでは解明できないが、アマの性質をうけてアマのイノチから生れた我々の生命力は、アマハヤミ的にヒラメくものに、感応する能力を、他の生物と同様にもって居るのである。

現代人が、生物の「本能」や「性能」等として捉へて居る智識には、非常に「人間的な偏見」がある事を、私達はカタカムナのサトリから教へられた（次号詳述）。直感性能の甚しく劣化した人類と雖も、生命のある限りは、誰でも、アマハヤミに感応する力を、基本的に、生れながらに、備へもって居るのである。初対面の人と人の第一印象にも、アマハヤミ的に通じるものがあり、人と人の心の交流にも、人が、他人の言葉を聞いたり読んだりして、深い共感を覚える瞬間も、先師の禅語を、セッナ的にサトル事があるのも、要するに、アマハヤミの、「無意識」の利用であり、古今東西、ものを深く考へた人

々は、大なり小なり、このアマハヤミを感じ、それを、めいめいの体験なりの表現を以て、示して居たのであったと思はれる。問題は、このアマハヤミ的な感応を、めいめいの「意識」にうつす時に、さまざまの「変形」や、「錯覚」や、「マチガヒ」が混入するところにある——。

現代の我々は、もはや、カタカムナ人が、アマハヤミを超音波的なカムヒビキとして、直接体覚したような、鋭い直観性能は無いけれども、我々も、現代人の雑念を離れ、彼らと同じようなスナホさになって、心から彼らの言葉に聴き入るとき、「彼らが、こういふ言葉で表はして居たといふ事は、彼らに、こういふ把握があったに違ひない」といふ共振的な共感が生じ、彼らが、その言葉を述べた時の意味が、アマハヤミ的に我々の心にヒラメクのである。

このようにして、私達は、カタカムナ人の言葉を解明して行ったのであった。それ以外に、この、長い間、ナゾのまゝに、あるひは埋れ、あるひは「波打ち際に寄せられた難波船の破片」のように、チリチリバラバラに拾はれて、誤解にまみれて居た古代の伝への中から、正しく、カタカムナ人のカムヒビキを、聴きとる方法は無かったのである。古来、理論による体験の授受、伝達は不可能とされ、唯、「体験は、体験を以て聴くしかない」と言はれて来たのも、このような、アマウツシや、アマハヤミを説明する、サトリをもたなかった消息を、物語るものであったと思はれる。

さて、(一)のカムヒビキの意味を要約して言へば次のようになるであらう。

『宇宙の現象には、正(アカ)と反(アヤ)の相反する面があり、その背後に、アマがある。ア

マを生むアマのヒのアナは、畏いものである(奇妙さ量が多い)。アマヒは、万物万象を発現する根源で、宇宙に、カタチの見えるモノ(タカ)や、カタチの見えぬモノ(カム)を生産し、自身は、ミナカヌシ(アマナ)としてその中に潜在し、又、アマハヤミとも成って、アマのY方向(カミ)と、正反の現象世界に、自由に出没して居るのである。』

## (二) 時間空間量の性質を表現するカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
アマ　ウマシ
トキ　トコロ　ウ　シ
モコロ　コロ
トコロ　チマタ　シ
トキ　オ　カ　シ
ソコ　ソギ　トコタチ

メグル　アマ

〈アマ　ウマシ〉

とは、「アマウマシ、トキトコロ……」とかかってよむ。すべてカムヒビキは、次々の音のヒビキ合ひで、意味が浮き出し、マトマってくるのである。アマウマシとは、「トキ　トコロの発現する始まりは、〈アマ〉であり、時間空間量は、アマの「元」から生成したものである」といふ意を表はして居る。ウマシとは「生まれた示し」の意である。

〈トキ　トコロ　ウシ〉ウシとは、「ウまれてくるウシロ（客観背後）の示シ」といふ思念である。「トキ　トコロの生れるウシはアマである」といふ、時間空間の基本的性質を述べた歌詞であるが、この内容は、後代人には感受できなくなり、現代人の概念にも無いものである。則ち、「トキと、トコロは、互に「交換」を続けながら、恒にアマに「重合」し、互換重合の状態にある」といふ意味になる。（註）

〈モコロコロ〉

とは、「アマから発生したトキ　トコロのマリは、モコロの粒子に変換する」といふ意味である。モコロとは、電気、磁気、力の三素量で形成される、モロモロのコロ、則ち、物質系と生命質系の、最下限の粒子をさすと共に、そのような集積位相（註）の状態を意味するヒビキ

である。コロとは、「コロコロ」などといふ言葉に残るように、変転する意であり、「石コロ」などのように、コロコロとコロんで、コロ（粒子）にかたまる意にもなるヒビキである。

つまり、カタカムナ人の「トキ　トコロ」とは、科学の「時空量」のような観念的な概念ではない。「時間空間といふものの本質は何か？」と追究してゆけば、最後は、時間の最も短い瞬時的な「時点」と、空間の最も小さい「地点」にゆきつき、その時点と地点は、もうそれ以上細かく分けることの出来ない、分ければ時間でも空間でもなくなってしまふ、最小下限の粒子、則ち、もはや目に見えぬ、一個の〈マリ〉の中に重ってしまふ。言ひかへれば、トキ　トコロの本質は、アマの微粒子（マリ）の変遷したものである、といふ把握のしかたである。このことは同時に、空間の最も大きなものは、時間の最も大きなものと、〈アマ―カム〉といふ無限の始元量の中に、重合する思念である。（註）

〈トコロ　チマタ　シ〉

とは、「トコロ（空間量）は、微分性（チマタに分れ拡がる個々性のタチ）をもち、現象の微分性を支配して居る」といふ意味を表して居る。言ひ換へれば、現象が微分性をもって居るのは、現象が、トコロ（空間量）によって形成されるモノであり、そのトコロ（空間量）の性質に、微分性があるからであるといふことである。なほ、屢々出てくる〈シ〉とは、ニシ、ヒガシ、イタシ、カユシ、あれは良シ、これは悪シ、等のように、ものを「示す」思念である。

〈トキ　オカ　シ〉

とは、「トキ（時間量）は、結球性が本来性である」といふ意味を表はして居る。オカシの音の基底思念は、「六方の立方体（オ）の形（カ）を示す（シ）」の意で、「カタチにマトマル性質」即ち結球性といふことである。つまり、トキトコロは、アマの本来性であるところの「微分性」と「結球性」といふ、相反する正と反の性質を受けついで、アマから変遷して、現象の「時間空間量」を形成するものである、といふ事を示して居る。（註）

〈ソコ　ソギ　トコタチ〉

とは、「現象には、膨脹（ソコ）と、収縮（ソギ）の共役共有性（トコタチ）がある」といふ意味を表はしている。則ち、アマの「元」から発生したトキ　トコロのマリ（粒子）は、恒にアマに重合し、互換して居るから、アマからうけた微分性　結球性は、現象に於てもうけつがれ、時間、空間の膨脹性　収縮性となり、その相反する性質が、同時に共存共役して成り立って居る、といふ意味である。〈トコタチ〉とは、微分と結球、膨脹と収縮等の相反する正反性が互換重合し、共存して働く性質、といふ意味である。トコとはトモにコロがるの意で、床の意にもなる。永遠の意は二次的である。（註）

〈メグル　アマ〉

とは、「アマの始元量は、正反の逆ムキに、循環運動をつづけて居る」といふ事を表はして

居る。この事も亦、後代人には感受できぬ直観である。一般に、現代人には、時空量は、もっぱら直進的な拡がり性をもつものとして受けられ、「時空量が正と反に進み、循環する性質である」などとは考へられなくなって居る。しかし最近の科学では、時空量の同質性や、正進反転性を肯定して居る。但しこの事を、運動系として扱はず、固定的に「時計時間」の概念で受けとると、タイムトンネルのような誤解が出る事になる。(註)

▼トキ　トコロ　カタカムナ人の「トキトコロ」のとらへ方は、現代人の「時間空間」の観念とは非常に違って居る。現代の概念にないものを、強ひて概念の違ふ現代語におきかへると、混乱が起る。「トキトコロ」は今の言葉にうつせば「時間空間」に当てるしかないが、実は、カタカムナ人の「トキトコロ」のとらへ方には、現代人の「時間空間」の考へ方に無い要素がある。

といふよりも、現代科学では、「時間空間」を、科学的手段の観測にかゝった、末端の現象で捉へて居るのであるが、カタカムナ人は、我々が時間空間とよんで居るものの本質を、「トキトコロのマリ(粒子)」と直感し、現実の時間空間は、そのマリの変遷したスガタと観じたのである。従って、我々の科学の智識には無い発想である。ところが現代人は、何でも科学的な言葉で考へなければ、理解できなくなって居るので、やむなく解説にも、科学用語を用ひる事になるが、「トキトコロ」を、直ちに「時間空間量」と翻訳することは、適当ではない。カタカムナ人の「トキトコロ」は、現代科学の概念には無

いものがある、といふ事を念頭において、できるだけ自分自身の直観をたよりに、カタカムナ人の言葉をうけとっていたゞきたい。それでないと、どうしても科学の先入観に邪魔され、カタカムナ人の真意にふれる事が出来ないのである。

一般に、「空間」と云へば、「物体と物体の間の何もない所」と思ひ、その「空間」の中で、「時間」が、時計時間的に進行するものとのみ思ひこみ、物体それ自身も「空間」だとは考へない。カタカムナ人の直観によれば、空間とはマのことで、そのマが凝縮したものが物体である。言ひかへれば、マとはアマであり、アマの微粒子のマリが、密充塡的に遍満して渦巻いて居る空間である。そのマに、アマのカタヨリやヒズミが起り、アマの粒子が集って（マリ）、次第に濃密に凝集してアマナ（原子核）を構成したものが、原子とよばれるものであり、それが「物体」をカタチ造る、といふ直観である。従って物体と物体の間「アイダ」も「空間」であるが、「物体」も亦「空間」で、物体は、発生すると同時に、それぞれの「空間」と、それぞれの「時間」をもつわけである。

このように、カタカムナ人は、我々が時間空間とよぶ現象の、本質を、アマ始元量の微分されたマリの集合した、「トキ　トコロのマリ」として直感し、現象界の万物万象は、このトキ　トコロのマリが、「アマナ」となり「モコロ」となって、「アマの本来性であるところの「微分性」と「結球性」の正反性を受けつぎながら、変遷し、次第に分化していったものと観じたのである。微分性（チマタシ）とは、「分れ拡がる性質」であり、現象界では、拡大　分散　分解　膨脹　運動等の性質（ソコタチ）を表はし、「波動性」となる。カタカムナ人はこれを〈イザナミ〉とよんで居る。又、結球性（オカシ）とは、

「球状に、マトマらうとする性質」であり、現象界では、収縮　凝固　結球　結晶　統合　静止等の性質（ソギタチ）を表はし、「粒子性」となる。これをカタカムナ人は、〈イザナギ〉と言って居る。イザナミイザナギは、神話では神の名であるが、実は、カタカムナ人が、すべての現象のもとに、アマの本来性の、この正と反の性質が、受けつがれて居ることを観じたヒビキであった。イザとは、「イザ出発」といふように、ものの始まりを表はし、ナミ（膨脹性波動性）と、ナギ（収縮性粒子性）は、いつも離れず、一つのモノには、必ず相伴ふ性質である、といふわけである。例へば、電波　光波　音波　水波　地震波等々に、波動性と粒子性が同時にみられるのも、すべてこの イザナミ、イザナギ の相似象である。なほこの相似象は、所謂物質といはれるもののみでなく、人間の精神や、社会の現象にも観察される相（スガタ）である。

（このカタカムナの思念が、後代、夫婦の神の名となって伝へられる事になったのであらう。）

すべて、「モノが発生する」「存在する」といふ事は、トコロチマタシ（空間を微分する事）であり、同時に、トキオカシ（粒子として位置を占めること）である。

カタカムナ人の気持では、「トキトコロ」は、現代人の時間空間の概念とは関係なく、物質の中に存在するマリ（粒子）であり、物質の「質量」といはれて居るものは、実は、この、トキトコロのマリの量によるので、質量が大きくなるといふ事は、トキトコロのマリの密度が増すことである、と観じたのである。このように、「トキ　トコロ」とは、カタカムナ人が物質の存在に関はる、最も根本的な『本来性』を解明したヒビキであった。（質量の項参照）そして、物質が現象系に表はれ、アマのもつ正反の

本来性の微分性と結球性（トコロチマタシ、トキオカシ）をうけついで、変遷してゆく相（スガタ）を、ソコソギトコタチ（膨脹、収縮の、イザナミ、イザナギの共存性）と観じたのである。

現代の科学が観測して居るのは、この変遷の相である。則ち、現象の状態であって、本質はわかって居ない。カタカムナ人の直観によれば、物質は、たえず「トキ　トコロ」を多くもったり、少くもったりして変遷して居るものである。それを科学では、「時間経過」で捉へ、「空間の中で、時間が経過する」といふ風に、固定的に考へ、別々の二つの「元」として、とってしまったのであった。

現象を、いかに正しくとらへようとしても、本来、変遷して居る相（スガタ）を、一面だけの固定したものとして観測すれば、アヤマリが出る。それを修正する為には、理論が必要で、その理論は、大きく本質を把握した、直観的な「哲科学」でなければならぬ。例へば、天文学で星の距離を測ることも、今までは、途中の空間を、すべて一定の光速度で直進するものとして、しかも、ある一瞬時を捉へて、計算して居た。現在では、天体自身の回転と軌道運動を、相対性理論を考慮して修正するようになった。しかし、カタカムナの直観物理からみれば、実は、まだそれでも正しいとは言へないのである。なぜなら、相対性理論そのものの根拠に、アヤマリがある為である。

さすがに アインシュタイン は、時間空間に「伸縮」や「変形」のある事に気付き、時空の「同時性」「同質性」を考へて居た。高い所からモノが落下してゆけば質量が増す。それは、時空の占有率が高まること、則ち時空粒子（位置エネルギー）が多く入ってくることであるとし、又、光のような高速度に於ては、時空の同時性が表はれると言って居る。同時性とは、同じものだといふ事で、要するに、拡っ

てゆく「空間観念」や「時計時間」の概念ではなく、いはゞ、「マ」として、理論上でとらへた事になる。これは、カタカムナ人の直観内容に迫る、正当な観察であるが、たゞし、「光のような高速度に於ては」、といふ条件つきの特殊な現象として説明され、一般化されては居ない。又時空の伸縮や変形も、やはり、特別な現象とみて居るのは、彼に、カタカムナ人のような、互換重合の認識がないからである。

言ひかへれば、カタカムナ人は、鋭い体覚的な直感に基き、発生の根元から、モノの本質をとらへて、現象を解明して居るのに対し、科学は、観測にかゝった末端の現象をとらへ実用的な理論を立てて居るだけの事である。その為に、少々誤差を修正する程度では、すまぬ事態が、宇宙の条件の中には存在する事が、次第に明らかになって来て、時間空間の「元」の考へ方が、根本的に反省されて居るといふわけである。

表現の用語を少々新しく変へてみても、本質の把握が変ったわけではない。この意味で、「時間空間」の本質は「トキトコロ」のマリであり、本来性として「微分性」「結球性」といふ正反性をアマからうけつぎ、物質の存在や質量を支配して、現象系にあらはれて居る、と観じた、カタカムナ人の本質把握の鋭さに、私達は注目せざるを得ない。彼らの用語が古風で、近代科学的でないからといって、見そこなってはならぬ。……もっとも、単に、「時間の粒子性」といふような着想は、ニュートン達にもあった。しかし、漠然とした思ひつきの程度ではなく、大きな物理体系の中で把へて居る点で、カタカムナの直観物理の内容の高度さに、私達は率直に、アタマを下げるのである。

古来、東洋には、時間空間は同質であり、回転運動（メグリ）の状態にあることを観じた、有名無名の哲人は稀ではなかった。しかし、現代科学はそれぞれ別質、異質のものとして来た。その為に、物理量の「元」としても、二元に扱つて居る。又、時空量なるものが、互に交換し、膨脹したり収縮したりする性質をもち、物質の「質量」と関係がある、といふ概念もなく、殊に、反転する時空量などは考へなかった。

要するに、カタカムナ人の感受したような、トキトコロの性質は、現代人の思考概念には無い事である。現代人の常識では、「時間」と言へば、時計ではかる時間、則ち、過去から未来へ、一方行通で、直進的に拡がるものとのみ思ひ、「空間」と云へば、「物体と物体の間」といふ固定した観念で、トキトコロの一面の性質しか考へられなくなり、「時間空間量」と言へば、何か難しい哲学用語じみた感じで受取られ、カタカムナ人のように、我々の生命体にも、すべての物質の中にも存在する、「トキトコロのマリ」といふ直感を、全く失ってしまったのである。

現代のような観測手段の無かった上古代に、カタカムナ人が、どうして、これ程の高度の物理を知り得たのか？……それは、彼らに、「本質」の把握があったからである。彼らが、「時間、空間」の現象の中に生活しながら、「トキトコロ」の本性を直観する事ができたのも、彼らが、天然宇宙の現象の、根元に存在するモノ（アマ始元量）の、本質、本性を、把握して居たからこそである。それ故に、彼らは「トキトコロ」のマリが現象系に現はれてさまざまの物質の中にアマナ（原子核に当る）として入りこ

み、「質量」を支配して、変遷してゆく場合にも、当然、アマから受けついだ「微分性と粒子性」が、「膨脹と収縮」といふ形であらはれると観じ、それが、現象に於て、「時間経過」として計測されたり、「空間的な位置エネルギーの変化」として、さまざまのハタラキをもたらす、といふ風に、首尾一貫した観察が出来たのである。互換重合といふような科学に無い物理を知ったのも、トキ、トコロの本質が、共にアマから発生した、同質の、マリの集合系である、といふ直観に因るものである。

元来、「真理」とは、専門的にいくらでも高度な理論で説明する事が出来ると同時に、子供にもわかる、やさしい表現で、教へられるものである筈である。それが出来る為には、「スジの通った」ものでなければならぬ。スジが通る為には、「本質本性の把握」が正当でなければ、一貫した説明は不可能である。私達にとって、現代科学を理解する事は難しいが、カタカムナの直観物理なら、ムリなく納得できるのは、この、「スジが通って」居るからであらう。

さて、カタカムナ人の把握した、トキ　トコロの概念に関する（二）のカムヒビキを要約すれば、次のようになる。

『トキ　トコロとは、アマから発生したマリ（粒子）であり、アマの本来性の、微分性と粒子性をうけついで、現象にあらはれるものであること。「トキ　トコロ」は互換し、しかも恒にアマに重合の状態におかれて居ること。正進すると共に、反転するといふ循環を、恒に続け、

膨脹したり、収縮したり、しかも、その逆性が、同時に共存して居ること。「トキ　トコロ」のマリは、物質系　生命質系の最下限の粒子（モロコ）に変換すること。モコロは、原子や細胞等とよばれる粒子に変遷してゆく前の微粒子で、電気（イカッミ）磁気（マクミ）力（カラミ）の集積位相（註）をもち、電気　磁気　力等の現象に遷移する性質があること、又、トキトコロのマリは、モコロの中にも、物質の中にも、つねにアマナとして内在すること、要するに、トキトコロのマリは、アマから発生し、アマと交流しつつ、さまざまの変遷を経て、やがて又アマに還元するといふ、循環をくりかへして居ること。アマは、位置によりアメの密度差があって、力の濃い所から淡い所へ、恒に運動を続ける状態であるから、現象粒子としては、「時空量」は、「在位置量」として、「粒子性」をもち、又、「力の位置エネルギー」として、「波動性」をもつことになり、物質の「質量」は、「トキ　トコロ」のマリの量の多寡によって定められること』

▼集積位相　互換重合　科学に於て「電磁波」とか、現象粒子の「在位置量」とか、賦存の「位置エネルギー」、更に位置の「電気エネルギー」等として、別個に捉へて居るものは、カタカムナ人の直観によれば、アマから発現する、トキトコロのマリ（粒子）の荷って居る、「集積位相」の変遷を、人間の意識で、別々のものとして見て居たといふ事になる。又、波動性と粒子性とか、正進性と反転性とか、

引力と斥力とか（更に陰陽、吉凶、愛憎、悲喜等々……）の、普通の次元では考へられぬ、矛盾し、相反する性質が、同時に共存する事実の説明も、要するに、トキ　トコロのマリが、アマ始元量から受けついだ本来性としての、共存共役の互換重合性（トコタチ）によるものだといふ直観によって解明されて居る。共役とは単なる共存ではなくて、車のナガエの如く、両者の間に存在し、それがあって、始めて両者が成り立つ関係を言ふ。

つまり、トキトコロの正進、反転の概念も、〈アマ〉という「元」を認めれば、アマから現象界に現はれて、過去から未来へ進行する「正進性」と同時に、現象界からアマへ還元し消失してゆく「反転性」の共存といふ、カタカムナ人の概念を理解する事ができるし、そのような関連が、大宇宙に、たえず続いて居る循環系の動き（メグルアマ）といふ直観も、スナホに頷ける筈である。人は、アマから生れ、過去から未来へ生きつゞける。これを正進性のトキとするなら、別のみかたによれば、人は生れた瞬間から、死にむかって進行しつゝある、則ち反転性の時間をも同時にもち、両方のハタラキを受けて居ると言へるわけである。下世話にも、「正月は冥土の旅の一里塚」等と言ひ、アマを「元」とし、生から死へ、死から生への、大きな循環性の運動（メグルアマ）の中にあるといふ、このような考へ方は、我々日本人には、むしろ常識的なサトリである。

〈アマ〉の存在を、科学的に理解することは難しい。しかし、アマとは、「理論上なければならぬ存在であるから」とか、「在ると認めなければ理論が成り立ゝぬ」等といふような、思考によって考へ出された観念的な存在ではなく、カタカムナ人が、直感によって、体覚的に感受した存在であった。どうや

ら、彼らの直感が正しいらしい、といふ事は、以下に述べる、彼らの残したカムヒビキを、虚心に読み進むにつれ、現代人にも次第に納得されてくるに違ひない。

「集積位相をもつ」と翻訳したのは、「一つのモノが、いろいろの面をもって居て、状況に応じてその一面が表はれる為に、見る側からすれば、さまざまの相（スガタ）として観測される」といふ意味である。例へば百面相の如く、見る側の角度が変るばかりでなく、当人の顔自体も変化するから、百の面相が存在するように錯覚しかねない。

カタカムナ人の直観によれば、現象界のすべてのモノは、アマの「元」から生じたアマのマリ（微粒子）の変遷であり、アマの本来性を受けついで、分化生成されたものである。先づ、モノが「発生する」といふ事は、目に見えぬ「カム」の潜態から、目に見える現象界（宇宙）に現はれる事であり、最小限「トキ」と「トコロ」の位相、つまり位置（イチ）と、そのイチを持続させる力、つまり「イキ」とか「イノチ」とよばれる「チカラ」の位相をもつことである。

モノが発生して「空間」を占めれば、時間空間の経過が始まり、言ふまでもなく、「空間」なしに、「時間」が経過できるものではなく、「時間」なしに、「空間」が存在しうる筈もない。

時空の同質性さへも、現代人の常識には欠けて居るが、前述の如く、「時間」を微分してゆけば、次第に短くなり、遂には、イマ（今）といふ瞬時の一点になり、それは、「空間」を微分した、目に見えぬ一点と、重ってしまふ。この事からだけみても、時間　空間は、二つの別な「元」などにすべきものではなく、同一の物質の「位相」として、どうしても分けることの出来ぬものである事は明らかである。

トキ　トコロのマリが、時間の経過につれ、さまざまの外界の刺戟に応じて、いろいろの位相をもつことになるのは当然で、あるひはイカツミを負うて電気の位相を表はし、あるひは磁気（マクミ）の位相を示し、あるひは電磁振動を起して輻射エネルギーを放ち、あるひは、時間空間の質量として捉へられるなど、さまざまの面が現はれる。それをカタカムナ人は、それぞれの場合によって、アメと言ひ、コロと言ひ、マリと言ひ、あるひは、イカツミ、マクミ、カラミと言ひ、又、トキ、トコロ、イチ、イノチ等と言ひ、又、その変遷や過渡の状態に応じて、イカツ、ウキフヌ、カブシヌ、サヌキ、アワ、モコロ、ミツゴ等と、言ひ、アマ、アマナ、マ、ウシ、カミ、カム、等々と言ひ、その物性を述べて居る。（前号参照）

それらの用語は、我々の科学用語よりもはるかに適確で、これを訳すべき適切な用語の無さに苦しめられる。しかも、我々の科学が、電気や磁気エレメント　プラズマ等と、位置エネルギー　時間　空間量等を、別々に考へ、生命や心の問題には、手も触れられずに居るのに、彼らは、すべての物質生命質の、最下限の単位をモコロとし、その素量をイカツミマクミカラミと観じ、それは、アマの微分のアメの結球した、トキ　トコロからマリの変遷した「集積位相」として、一貫して観じて居たのである。

この事を、わかり易い例で言へば、凡そ、どんな単純な人でも、「彼の性格を一言で言へ」といはれてはムリで、何十年も生存して来た人間に、ジキルとハイドどころか、三重四重の人格があるのが当然で、時と場合と対手によって、使ひわけて居るのである。中には、殆んど固定的に、いつも同じ面ばかり示して居る人もあるが……、一人の人間が多面的な位相をもち、それが、おのづから、一個の人格を

形成して居るのも、この相似象である。それぞれの面に表はれて居る現象を、末端から別々に捉へて解釈して居たのでは、その全容を把握することは出来ない。

集積位相とか在位置量とか互換重合などといふ科学用語を使ふと難しく聞えるが、日本人なら、モコロとかイチとかトコタチなどの「和語」の方がわかり易い。イとかマとかキとかチとかの単純な声音を組合せて、イマとかイキとかイチとかイノチ等といふ単語が出来、それらが、いづれもスジの通った意味を表はすのは、そのもとにある彼らの哲学が、マとかイとかいふ、一音一音の声音でとらへた、天然自然のヒビキの本質を、マトモに把握して居たからに他ならぬと思はれる。それが日本語の特長として、例へば「コロコロ」とか「クルクル」等の、他国語にない造語法を、現代まで伝へる原型として、無意識のうちに、日本人共通の基底思念となって居るに違いない。

カタカムナ人が、大局から、全貌を把へて、鋭く見抜いて居たモノを、我々の科学は、個々別々の性質をもつ、異つたモノとして、末端からバラ〳〵に捉へて、みづから混乱して居るのではなかったか？と、改めて反省してみる必要があるのではないか？……

そもそも、モノは、決して単一の面だけで存在する事はあり得ない。モノが表はれるといふ事は、立体をカタチづくる事であり、多面をもつ事であり、同時に、正反の時間をもつことである、といふカタカムナ人の直観は、まことにモットもだと思はれる。モノが発生して、先づ立方体のカタチ（粒子）をとると言ふ事は、アマの本来性の、トコロチマタシの微分性と、トキオカシの結球性との、互換重合によって、球状のマリとなる事である。球状とは、最小の面をもつ立体であり、最も安全を保とうと自衛

する相（スガタ）である。そのようにして現象に現はれた粒子は、アマの本来性をうけつぐ拡大性と収縮性（ソコとソギ、則ち、イザナミとイザナギ）の互換重合によって、次々と変遷し、つひには巨大な天体（タマ）となり、長大な時間経過をもつことにもなる。

▼**時間・空間**　このような、カタカムナのサトリによって、「トキ　トコロ」の「本質」をこゝろえた上で、現実の「時間空間」の「現象」を観察すれば、新しいみかたが展けてくる。「空間」に、凝縮と拡散といふ正反の性質があるように、「時間」にも、アマから生成発育する「正」の時間と共に、刻々崩壊して、アマに還元してゆく「反」の面があり、時空の一瞬一瞬（イマ）には、この正・反性が重合し、互換して、表はれて居るわけである。又、「空間」の拡がりや縮まりに、さまざまのバラエティがみられるように、「時間」の経過にも密度差がある。例へばゴミなども、そのまま土中に埋めるよりも、一度に焼却すれば、アマに還元する「速度」を加速する事になる。もしこの、トキの還元力を、大いに加速し、安全に、元素に回収する技術が開発できれば、ゴミ公害の問題も、解決されるであらう……。

誰かと待合せるときなど、我々は「時」をイヤといふ程意識するが、何かに熱中して居るときは、時を忘れて居る。又悲しみや憤りで一ぱいであった心も、いつか薄らいでゆく、それらを称して、人は「時」がすべてを解決するなどといふ。しかし、人が「時」を意識しようがしまいが「時空」はつねに「共存」（トコタチ）して居る。堪え難い悲しみがやはらぐのも、たゞ「時」が過ぎたのではなく、

さまざまの空間が、時間と共に経過し、その間に、精神状態も変遷していったからである。時間空間は、決して別々のものではなく、常に互換し重合しつつ変遷して居る。又、それぞれが、個有の時間空間をもって居る。従って、一律の固定した尺度で測れるものではない。

このようなトキ、トコロのトコタチの思念の伝統は、我々が無意識に使ふ日本語の中には、今も残って居る。「英語で話すとき」「もし私が死んだとき」などといふときの「とき」は、時計時間を問題にするのではなく、「場合」といふ、空間的な気持であり、「とき、ところ」という日本語には、「時間空間」の意味が、重合して使はれて居る。しかしこのような日本語も、今では本来の意味はかげをひそめ、「時を忘れる」「時がすべてを解決する」などといふ表現も、時間経過の意味だけが強調され、現代人の意識が、時間空間の重合感を失ひ、いかに、時間意識のみに片寄り、空間の面を無視して居るかをあらはして居る。タイムトンネルの着想も、この、決して分ける事のできぬ、トキ、トコロを切り離して、「時計時間」だけを操作できるとし、「空間」の面を忘れて居る、愚かな錯覚に気づけば、お笑ひぐさである。

**▼アインシュタインとタイムマシン**　従来の、固定的な光速度や時間の概念を修正し、「時間の進み方は、速度によって変る」と指摘した、アインシュタインの、相対時差の考へは、カタカムナ人の直観に近いものである。そして最近、原子時計を、地球より早く動くジェット機内に持ちこみ、地球を一回転して計測したところ、東廻りの機内の原子時計は、何千万分の一秒おくれ、西廻りの時計は進んだ、と

いふ報告があり、これは相対性理論を証明するものであると言はれて居る。

こゝで考へられる事は、原子時計の電子の動きは変らぬが、それをうけてリレーするものは、速度によって変るであらう。それは丁度汽車にのって、前、後に走れば、能力は同じでも、速度は変ってくるようなものである。又、地球を一回転するといっても、地球は一ヶ所に静止して居ない。自転しながら公転して居るから、全く同じ条件で、計測し、比較する事はあり得ないわけで、今まで、速度といふものを固定的に考へて、時計時間で計算し、観測者の位置を考へなかったのがマ違ひで、おかれた位置により、観測の結果が皆違ってくるのは当然である。要するに、本質は少しも変って居ないが、計算上、観測の結果が違ふだけである。従って、アインシュタインの指摘は妥当であるが、それを受けとる人々は、依然として従来の時間空間の観念がぬけないので、ムリに解釈してファンタステックになり、タイムマシン等の空想に陥り、しかもそれを裏付ける為に、アインシュタインを持ち出して、科学に弱い一般人を煙に巻くことになる。アインシュタインはタイムマシンのような考へをもつ筈がない。

相似象学が、このような問題を解説するのは本旨を外れるから深入りしないが、アインシュタインのいふのは、時間にも伸縮や変形があるといふ、本質に関する哲科学である。カタカムナ人の把握の重点も、現在の我々が時間空間とよんで居るものの「本質」は何か？　といふ事である。

現代人が、空間といへば、「物体と物体のアイダの何もないトコロ」、時間といへば「時計時間」、だけしか考へず、「空間」の中を、「時間」が経過するとしか考へられなくなってしまった為に、こうしたバカゲた思ひつきや、マ違った理論が、大きな顔をして通用するのである。

現代人は、モノの変遷の実相を、時間的な面、空間的な面で、別々にとらへて居るだけであるが、実は、「トキ　トコロのマリ」の変遷のしかたによって、それこそ、さまざまな時間空間があらはれ、伸縮したり、変形したりして居るのであり、それは、本質的には、何も特別な超光速や特殊な条件下のみの事件ではない、とカタカムナ人は直観し、つねに現象の背後に、アマの潜態を観じて居たのである。「あなたの時」と「私の時」とは同じではない。それを、一律の時計時間で測るのは、一応の約束ごとにすぎない。げんに時間をはかるだけなら、太陽や、砂や、腹時計など、いろいろある。しかしトキの本質は、時計ではかれない。我々は、一度、自分たちの「時間空間」の観念を整理して、「トキトコロのマリ」といふ、上古代人の直観を、味ってみるべきではないか?

**▼空想と直観**　「科学で理解できぬものが存在する」といふ事実をスナホに認めようとする気持から出発した人々が、この種のタイムマシンのような空想や神秘思想に陥ってしまふのは、カンが悪いからといふより、カンの鍛練を欠いた為に他ならない。カンが良ければ、いかに、もっともらしい理論でも、「平衡感覚的な違和感」が生じて、この種の科学智識や、空想や妄想の類と、マトモな直観の物理とは、峻別される筈である。「日本人がどうも科学に弱い」のも、あながち欠点ではなくて、カタカムナ以来の無意識のカンが、「違和感」を感じて居るのかもしれない。唯、それを、「何となく」といふ感じで受けとめるだけで、ハッキリ批判できず、「科学に弱い」まま「科学万能」に陥る人が多いのも、カタカムナ人のサトリを伝へる「日本語」のもつ真の意味を忘れ、カタカムナの直観の物理の、真意を失

脚したからである。

現象に表はれたものの原因結果のメカニズムを、いかに細かく示されても、それだけでは足りない。我々の「生命」や、物質の「発生」の幾徴が説明されるのでなければ、カタカムナ人の後裔たちは、「科学」を、信頼するわけにはゆかぬのであらう。

「時間空間の互換重合」などといふと、いかにも難しく聞えるが、それは我々の「時計時間」の先入観念が邪魔をして居るからで、「互換重合（トコタチ）」といふ直観こそ、カタカムナの物理の、独断場ともいふべき、鋭い把握である。言はれてみればその通り、常識から考へてもスジが通り、事実をアリノママにスナホにとらへ、最も肝要な本質を、ズバリと指摘し、どこからみても破綻のないサトリである。たゞし、それは、「アマ始元量」をみとめての話である。

アマの物理は、現在では単なる仮説にすぎない。又、カタカムナ人が、すべてをわかって居たわけでもない。しかし、少くとも、目にみえぬ「潜象」の「アマ始元量」の存在に気づき、そのアマの微分のアメを、「トキトコロ」の粒子として、時間空間の本質を把握し、物質生命質への変遷を観じて居た、彼らのカムヒビキは、我々現代人に、非常に大きな示唆を与へてくれるものと思はれる。

私達は、「トキ、トコロ」の解説に、テマをとりすぎたかも知れないが、「互換重合」、といふ観じ方は、現代人の常識になく、科学用語にも無いけれど、それが、カタカムナの直観物理を理解する、大きなポイントである事を、わかっていたゞきたい故に、その橋渡しにつとめたつもりである。前号に述べ

た引力斥力もそうであるが、すべて、矛盾し、相反する、正と反の性質が、物質にも、生命質にも、又精神現象、社会事象にも、つねに共存し共役して居る事実を、「互換重合の集積位相」（トコタチ）と見抜いた直観は、我々の盲点を衝くものである。現代科学も重畳理論といふもので、「重合」の方は接近しつゝあるが、まだ「互換」といふ概念は無い。しかし、このカタカムナ人のような、「互換重合性」に啓発しない限り、万物万象の相（スガタ）を、マトモに、アリのママに把握することは、不可能であらう。

目下のところ、現代科学は、各方面からホコロビが出て、ゆきつまりを生じて居るが、まだ、みづから破綻を認めるには至らない。前述の如く、古典理学のホコロビは、光の粒子性波動性の重畳理論で補塡した。しかし、時間空間の二元のホコロビは、まだ修正すべき理論がみつからぬ有様である。最新の理学の動向は、各所から生じつゝあるホコロビを究明して、徹底的な破綻に追つめようとし、必然的に、カタカムナの直観物理の内容に近づきつゝあるが、しかし、「トキトコロ」の「同質性」、「互換重合性」の見解にはまだ達して居ない。

現代人は、カタカムナ人のような、直観的な自由な考へ方が出来なくなり、対人関係に於ても、又、もの事を判断する場合にも、しらずしらずのうちに、当面の自分の都合のよいように歪めて解釈したり、一面だけを固定的に強調して、自分のアヤマチをカザリ、後悔の念をまぎらし、しかも、そのような事をやって居る、自分自身の心理の奥の、無意識の妄動の原因を知らず、あまつさへ、そのような「人間的な判断」を、神や仏の意志であるとか、高度の悟りであるかのように錯覚して、自他ともに疑

はぬ、といふような事件が、相当の智識人や専門家の間にも横行して居る。皆、「カン」が鈍い為である。私達は、それらをとりあげて、他を非難するのではなく、気のついた者だけが、カタカムナ人の、真にスケールの大きなサトリを、習ふしかない。「直観」といふ能力は、人間が本来もって居る性能であるから、劣へたりと雖も、我々も、『その気』になれば、上古代人のヒビキに、共感しうるまでに高められぬ筈はない。唯、潜在的にはもって居ても、「動機」がなければ、発揮する事はできない。気がつきさへすれば、あとは訓練次第である。

## (三) 恒星空間の有様を表現するカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
タカマトコ
ヤホチホ　ウケクモ
トヨチ　カム
イカツ　ウキフヌ　マクカラミ
マカカ　ハコクニ

ヒフミタマ

〈タカマトコ〉

とは、宇宙の虚空の意、トコは宇宙に敷かれて居る、重合互換のトコ（床）の意。

〈ヤホチホ　ウケクモ〉

とは、「無限に拡がる虚空には、ウケ（宇宙の気）のクモ、言ひ換へれば、「恒星空間物質」が、雲の如く充満して居る」といふ意味を表明して居る。

〈トヨチカム〉

とは、目には見えない虚空のウケが、無限遠に続く様を表はして居る。

〈イカツ　ウキフヌ〉

とは、「一般に電離層とよばれる、電気とプラズマの層が、密度の多い所（フ）と、密度の稀薄な所（ヌ）の状態で、分布して居る」といふ意味を表はして居る。（註）

〈マクカラミ〉

とは、「虚空には、磁気（マクミ）や力（カラミ）の位相を示す帯層（註）が賦存して居る」といふ意味の表明である。

▼帯層が賦存して居るといふのは、「帯」とはある幅をもち、「層」とはある厚みをもつて、地球の上空に存在して居る意である。

〈マカカ　ハコクニ〉

とは、「マのカタチ、則ち、正、反の力がカカリあって、ハコクニを成す」意である。「マのカタチ」とは、図象文字（二一二頁参照）でみればわかるように正と反が向ひあふことを意味し、正反の力のムカヒ（対向）によって、メグリ（旋転）のイゴキ（運動）が始まる。これがすべてのハジマリであり、マのカタチであり、運動のカタチである。そして、そのようなカタチから、モノが発生する、といふサトリである。ハコクニとは「箱のように囲はれてクニになる」の意で、クといふ音の基底思念には自由の意があり、ニには固定の意がある。「マから自由に固定されて、有限の物体が生成される」という気持である。原子も一つのクニであり、人間も、天体もハコクニである。そこから国土の意も出てくるわけである。要するにマカカハコクニとは、すべての物（ハコクニ）は、マカカ、則ち、マが正反にカカハリ合ふ、運動の形から発生する、といふヒビキである。

〈ヒフミタマ〉とは、「光を放出するタマ、則ち恒星が、虚空には、多数賦存して居る」といふ意味のヒビキである。

▼電離層　電離層とは、科学では、「電離物のある層の意で、電離物とは、中性物質（分子原子）が、電子を離したもの、則ち、プラズマと電子の層」という解釈である。電離層によって、地上の電波が反射される事はわかって居るが、その機構はまだ不明で、又、電離層と、そうでない所が、出来て居るのは何故か？　といふ事もわかって居ない。つまり、電離層といふ名をつけたわけは、物質から電気が離れて、それが地球の上空に集った、といふ考へからであるが、カタカムナの直観物理には、そのような電離物といふ解釈は無い。

カタカムナ人は、宇宙空間（タカマトコ）に充満して居る電気の海は、物質から離れたものではなく、宇宙の気（ウケ）の生産したものであり、宇宙には、電気の密度の濃淡（イカツウキフヌ）や、磁気や力の位相を示す層（マクカラミ）がある、と観じて居た。現代科学が電離層とよんで居るのは、このイカツ（電子）ウキフヌ（中性子陽子）が別々の層になって居る所であり、イカツ、ウキフヌが、マのカタチになれば、ハコクニ則ち種々の原子等が発生する、といふ直観である。電気磁気の考へ方も、現代科学と直観物理とは違って居り、科学では、別々の要素として居る為に、磁気と電気が、自由に変換する、発電等の衆知の現象も、さて、どうして変換するのか？　といふ説明ができないし、「電子」の存在は認められるのに、「磁子」といふものが、いまだにみつからぬ理由も、わかって居ない。そして、磁気がある以上、磁気のエレメントがある筈だと考へられて居るのは、依然として、磁気と電気を、直観物理のような、集積位相としてみる考へがないからである。

カタカムナ人は、磁気はイカツの位相と観じ、イカツ（電子）を捲いて出る意で、「マクミ」と称し

て居る。又、イカツミ、マクミにからんで発現するアマの力を、「カラミ」と言って居る。則ち、磁気（マクミ）も力（カラミ）も、イカツの位相であるから、自由に変換しうるものであるが、殆んど固定的に、電気の面だけを表はすものや、磁気の相のみを示すものもあり、又、力だけの場もある、と観じて居た。天然に磁石が存在するといふ事は、その相似象として、巨大現象もありうるという事である。（集積位相の項参照）又、磁気のNとSは、電気の正と反の相似象とみられる。

このようなカタカムナ人の言葉を、電子、電離層等の科学用語に当てはめる事は、ふさはしくない。イカツを電子と訳すことも、似ては居るが不充分である。なぜなら「電子」には集積位相のイカツミマクミ　カラミの直観が無い。イカツはもともとアマのマリであり、要するに位相の「カタヨリ」（後註）によって、電気として表はれたり、磁気となったり、力の場を示したりする。あるいは又、そのカタヨリが固定してしまひ、集積にゆかず、他のものに出にくいものもある……。このようなカタカムナの直観物理は、（我々の科学の先入智識を払拭しさへすれば）決して古代人の荒唐無稽な妄想でも、神秘観でもない事が頷かれ、「なるほど、こういふ事を言って居るのは、彼らも、こういふ物理を知って居たのだ。上古代にも、実に大した人物が居たものだ……」と、心から驚く気持になるに違ひない。

さて、（三）のカムヒビキを翻訳すれば、次のようになるであらう。

『宇宙の虚空は無限に拡がり、全く目に見えないが、ウケクモ、則ち恒星空間物質が充ち満ちて居る。そのウケクモが帯層に凝集して、電気とプラズマの濃密に集って居る層（電離層）と、

稀薄なところとに分れて、虚空に分布して居る。又、ウケクモが、磁気や力の位相を示し、やはり帯層となって分布して居る所がある。又、マの形、則ち、正反の偶力の対向と、それによる運動によって、大小の物質、則ちハコクニが発生して居る。このように宇宙の虚空には、ウケクモが多量に凝集した球状天体が数多く分布し、その外側には、球状に展開する力の、強く働く場、則ち、引力斥力の場がある。光を放出するたくさんの恒星は、ヒフミヨイと、循環しつつ、新陳代謝して居る。』

## (四) 天体の有様を表現するカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
ハ　ハ　ホ　バリ
アサヒ　クシサチ
アソ　オホキ
ウヅメ　ヒコユヅ

イツ　アキツ
ホシマ　ニギスム
イワネ　エミ
アマ　フトアマヒ
ナリマ　ハル

〈ハ　ハ　ホ　バリ〉

は、破裂音、衝突音を表はし、虚空に於る巨大な力や、エネルギーの動きを表明して居る。

▼このようなヒビキは、その状況をよく察して、実感をこめて発声するつもりで、例へば、能のハヤシの、鋭い気迫をこめる気持で、読んでいたゞきたい。

〈アサヒ　クシサチ〉

とは、「白光輝く巨大な星」といふ意味を表はす。アサヒとは太陽のような恒星、クシサチとは、現在の天文学で、巨星とよばれて居る天体をさして居る。

▼カタカムナ人は、恒星をアサヒと言ひ、アサヒを生む巨大なアマのヒを、フトヒと言ひ分けて居る。アサヒは、フトヒの相似象であり、宇宙には、無限的に多く存在し、時に、クシサチ（巨大な光輝く天体）になると観じ、我々の太陽も、このアサヒの一つとしてみて居た。

〈アソ　オホキ〉

とは、クシサチ（巨星）が大爆発を起す意味を表はして居る。アソとは、古代には、世界共通に、活火山を意味する語であった。（マガタマの項参照）

〈ウヅメ　ヒコユヅ〉

とは、渦巻になったアマの流れから、いろいろのモノが、次々に発生する意味を表はして居る。ヒコとは、ヒコ、ヒメ、ヒマゴのように、順次に相ついで生れ出るものを意味し、ユとは、水が湯になるように湧き出るヒビキ、ツは個々の意である。ヒコユヅは、ウヅメクソとも言はれるもので、アマの渦巻流から発生する、イカツ、ウキフヌ、則ち、電子や、中性子陽子（プラズマ）等に当る微粒子の集団である。

〈イツ　アキツ〉

とは、「細かい粒子が現はれる」といふ意味である。〈イ〉いふ音の基底思念は「小さい、アマのミ」の意味で、イカツ　イマ　イチ　イツ　イモ　イワ　イハ　イキ　イノチ……等の言

葉を形成する。ここでは、原子や電子、イカツ、モコロ等になる前の過渡物質、則ち、アマの微粒子の集合体をさして居る。

〈ホシマ　ニギスム〉

とは、ホシは星であり、前述の、小さな個々の粒子（イツ）が、次第に凝集して天体（ホシマ）となり、ニギヤカに集団する意味で、太陽系などの星座のマトマリを表はして居る。ニギとは、和である。

〈イワネ　エミ〉

とは、「集団の核的存在」の意味である。イワとは「イの和」の思念から、太陽系のような星座の意にも、岩の意にもなる。エミとは、恵みであり、笑みであり、愛であり、美でもあって、多くのものが寄り集ってくるには、いはばその中心に、エミ、つまり魅力ある笑顔、則ち、ひきつける力があって、それが、イの和する根（中心の核）となり、その囲りのニギスムものと、互ひにエミあふわけで、我々の太陽系をはじめ、宇宙の天体の様相や、万有引力といはれるもののスガタを、まことに端的なヒビキで表はして居る。

〈アマ　フト　アマヒ〉

とは、「その核的な根の大もとは、巨大なアマのヒである」といふ意である。ヒとは前述のように（六五頁）、太陽のヒから、すべての根源を意味するヒビキであり、太陽のヒも火山のヒ

も雷のヒも、すべて、アマのヒから出たものといふ思念である。

〈ナリマ　ハル〉

とは、「アマヒによって、宇宙の天体の、調和平衡の場が構成されて居る」といふ意を表はして居る。ハルとは正反に張る意である。（マガタマのナリマタマの項参照）

この（四）のカムヒビキは、所謂〈ヤサカノマガタマ〉と言はれる表象物によって後世に伝へられ、宇宙、天体の、自然発生の様相を述べたものである。このヒビキの概要は、次のような意味になるであらう。

『宇宙の虚空には、白光輝く巨大な星があり、爆発を起し、巨量のエネルギーが、多数の渦巻き流を発生して居る。そして、その渦流からは、小さい微粒子が次々に湧き出て、集団的に寄り集り、太陽系などのマトマリを形成する。その根（中心の核）となって笑んで居るのが、アマのフトヒから生れたアサヒ（太陽のような恒星）である。アマのフトヒによって、宇宙の調和平衡の状態が保たれて居るのである。』

## （五）宇宙の力が、生命の原動である事を表はすカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
ユラ　クララ
フタセクラタチ
アマ　フトヒ
ムカヒ　オシテル
ホホツガヒ
カムロ　カカユヌ
イノチ　サチ

〈ユラ　クララ〉
とは、正反に揺れ動く様を表はし、正反宇宙の運動のスガタを表現する壮大なヒビキである。

〈フタセクラ　タチ〉

とは、二つの軸の座がある、といふ意味を示して居る。フタセクラとは、ここでは、小宇宙の中心と、大宇宙の遠心（遠い中心）をさして居る。

〈アマ　フトヒ〉

とは、前述の如く、正反宇宙を統合して居る始元世界を意味し、個々の太陽（アサヒ）を生む、アマの太い陽を、フトヒと言って居る。

〈ムカヒ　オシテル〉

とは、小宇宙の中心に向ふ力と、大宇宙の遠い中心に向ふ力との、二つの向力（註）が、球状に、強力に、押し張られて居る様を表はして居る。

▼向力　この二つの「向力」とは、個々の天体間の相互の万有引力や、地球の重力（求心力）等とは、ケタ違ひに巨大な力であるが、今まで我々は、そのような力には無関心であった。我々は、もはやそのような力は実感できず、地球の重力のみを感じて居るが、カタカムナ人の直感によれば、我々の地球は、太陽系を含む小規模の集団（小宇宙）に属し、その小宇宙の中心核にひかれる、大きな力の影響をうけて居る。と同時に、天の河宇宙等の小宇宙を含む、大宇宙の中心に向ってひかれる、もの凄い力の影響をも受けて居るのである。この二つの向力（ムカヒ）の巨大さは、地球上の尺度では、測りようの

無いもので、地球の引力（重力）などは、それに比すれば、微視的なものである。例へば、急行列車に乗って居る人にとっては、列車のスピードだけを、もっぱら感じて居るが、地球は、その列車ごと、大変なスピードで、自転しながら、更に太陽のまわりを公転して居る。その太陽系は、地球も太陽もひきつれて、小宇宙の中心に向って、猛烈な力でひかれて居る。そして更に、小宇宙は、遠い大宇宙の中心に向って、たとへようもない力でひかれて居るのである——。

急行列車に乗って居る人々は、列車のスピードのみを感じて、地球の動くスピードは無視して居る。しかし、一寸考へてみても、列車のスピードと、地球のスピードは、ケタ違ひだといふ事はわかる。たとひ列車が、地球の進行と逆の方向へ、如何に驀進したとしても、その為に、列車のスピードがおちるといふような事は、……計算上言へるだけである。

我々の実生活には、一見、地球と太陽だけあればよいように見える。太陽は、確かにアマのヒの相似象であり、我々は、太陽の大きな恩恵をうけて居る。しかし、我々の生命を生み、宇宙の万物を生成し、消滅させるような力は、地球と太陽とだけで発生するものでは決して無い、といふ事を、カタカムナ人は直観的に知って居たのである。

〈ホホ　ツガヒ〉

とは、「相反する正反の方向に動く力を、親和させて居る力」、則ち「番力」を意味するヒビキである。ホとは、図象文字をみれば明らかなように、正反親和のカタチの思念で、頬の意も

出る。ツガヒとは「番ひ」のことである。

▼番力　前述の二つの巨大な向力（ムカヒオシテル）は、地球の重力と遠心力に一致する正反のサカムキであり、もしこれが、モロにぶつかれば大変なことになるのを（稀にそういふことも起るかも…）無事に宇宙の天体が、それぞれ、調和平衡の状態を保って居るのは、正反の力をツガへて居るアマの親和力、則ち、「番力」（ツガヒ）が発生して居るからである、と、カタカムナ人は観じたのである。

「向力」「番力」などといふ力は、科学の概念には無いものであるが、引力とか斥力、求心力とか遠心力、といふような概念がありうるなら、番力、向力といふ説明も成り立つ筈である。しかも、科学の言ふ引力とは何か？　求心力とは何か？　又、斥力とか遠心力とかいふ力は、何を指向して居るのか？…と問ひつめれば、結局、「奇妙さ量」につき当る事になる。

絶えず変化しながら作用して居る正反の「向力」に、絶えず親和的にはたらいて居る「番力」――といふ物理は、これまた、カタカムナ人の、アマの「元」に基く直観のサトリであって、現代科学の考へ方には無いものである。カタカムナ人は、巨大な現象を原型として、宇宙の天体の様相から、極微の細胞や、原子の世界にまで、一貫する相似象を、観じて居たのである。

「平衡（バランス）」とか「調和（ハーモニー）」とか、「復元力」とか「慣性」とか、又、「中庸」とか「和」とかとして、科学者のみならず、古来、東西の哲人が、その「根拠」を求めながら、確実に指摘し得なかった、その力の正体は、まさに、この、アマの向力番力といふ、カタカムナ人のサトリの中に

あった、と言へるであらう。ムカヒ・ツガヒとは、何とスナホな、真に驚嘆すべき直観ではないか！

地球上の我々のもって居る単位、例へば「時計時間」とか、その延長の「光年」といふような概念は、何となく、全宇宙に共通する尺度のように思ひ、殊に、光速度は、我々にとっては、最高に大きな単位であると思って居た。しかし、それは、カタカムナ人の抱いて居た宇宙観の尺度からすれば、急行列車のスピードと、地球の自転公転のスピードほどのものであった。もしも、こゝに、アメーバの世界の智慧者が、せい一ぱい大きな尺度を考へて、それで、我々の人間の世界を測りに来たとしたら、おそらく笑止の沙汰であらう。それは、「天空をはるかに翔りまわったつもりの孫呉空は、お釈迦様の掌の、指から指へ飛んだにすぎなかった」といふ話を思はせる。我々が、精一ぱい大きな単位と思って居た「光年」といふ尺度も、アマハヤミや、向力番力のようなスケールのものには、ハもたゝぬ、人間の浅智慧にすぎず、しかも、〈イノチ〉や〈ココロ〉を生むモトは、アマハヤミやムカヒ・ツガヒのような巨大な力にこそ、関はりがあるのだといふ事を、カタカムナ人は直観したのであった。

〈カムロ　カカユヌ〉

とは、「目にみえぬ（カム）の、たてよこ（ロ）のカカハリによる発生（カカユヌ）」則ち、地球と太陽のみでなく、宇宙の諸々から享ける恩恵の、関連による発生、を意味し、カタカムナ人はこれを〈モロカゲサチ〉とも言って居る。「オカゲサマ」といふ日本語の思念のもとには、

親や神や仏や太陽のみならず、この「モロサチ」があったのである。（八二頁）

〈イノチ　サチ〉

とは、「生命の授かりの持続」といふ意味である。

従って、（五）のカムヒビキを要約すれば、次のような意味に成るであらう。

『太陽系に属する地球には、大宇宙の遠い中心にむかふ『向力』と、太陽系を含む小宇宙の球心にむかふ『向力』との、二つの向力〈ムカヒ〉が作用して居る。そして、個々の太陽（恒星）を生むアマのフトヒは、この二つの巨大な正反の向力を番へる力をもって居る〈番力〉。

このアマのフトヒの力によって、地球、並びに地球上の生物も、宇宙の動きに親和し得るのである。このような、目に見えない、モロモロの関連の、協同の働きのおかげで、生命（イノチ）が発現し、保全されて居る。言ひ換へれば、このような宇宙の力が、生命の原動であり、生命発現の「元」である。』

## （六）　宇宙の生命が、電気を生むことを示すカムヒビキ

アマカムナ

アマカムヒビキ
イヤ　フワ　オオ
ウヒヂニ　スヒヂニ
ムカヒフシ
ツガヒトコタチ
タマイキチ
ウマシイカツチ
カムロハケ

〈イヤ　フワ　オオ〉は、宇宙虚空に於る、力と力の衝撃する音の、入交ふ様を表はしたヒビキである。

〈ウヒヂニ　スヒヂニ　ムカヒフシ〉とは、虚空に於る、大宇宙の遠い中心に向ふ求心力と、小宇宙の近い中心に向ふ求心力との、二つの向力（ムカヒフシ）があることを表はして居る。ウヒヂ　スヒヂは、回廊の外側と内側を、ウヒロウ、スヒロウといふ言葉にのこるように、外側、内側の意であり、遠まわりの場合と、直接に達する場合とをさすヒビキである。

〈ツガヒ　トコタチ　タマ　イキチ〉

とは、「そのムカヒフシ（二つの向力）に、アマの力が親和して、衝撃分解を防ぐ、番力（ツガヒ）と成り、宇宙の向力と番力のトコタチ（重合、共存、互換の性質）によって、宇宙の生命（タマイキチ）が発現し、保持される」といふ事を表現したヒビキである。

〈ウマシ　イカツチ　カムロ　バケ〉

とは、「その宇宙の生命が、実体の見えない、多変化現象性（カムロバケ）の巨量の電気（イカツ）を生産する」といふ意味である。カムロバケを「多変化現象性の電気」と訳したが、このカタカムナ人の概念は、現代科学の智識とはかなり相違して居る。イカツとは、科学用語の電気に似て居るが、カタカムナ人の電気の概念は、現代科学のような固定したものではなく、前述の如く、集積位相の電気現象である事をサトリ、「奇妙さ量の多い電気」といふ意味で、「カムロバケ」と表現したと想はれる。カムロハケとは、カムは形の見えぬ意、ロとは紐の如く、縦横に囲はれて形づくられるものの意、ハケとは「お化け」の事で、変化の意である。則ち、「イカツチは、いろいろに変化する、奇妙さ量の多いバケモノである」といふ意味である。集積位相とは前述の如く、一つの現象に、例へば電気性を現はす位相（イカツミ）、磁気性を現はす位相（マクミ）、力の位相（カラミ）等が多重して居て、自由に位相を変換しうるものをいふ。現代科学の「電子」の概念は「電気の性質だけが固定した粒子」であるがカタカムナ人は

互換重合性（トコタチ）といふアマの本来性をサトった直観により、電気現象もアマの変遷と観じた。則ちトキトコロの粒子（マリ）が、イカツミを負うてイカツとなって、サヌキ、アワの電気現象を呈し、同時に、磁気（マクミ）力（カラミ）の位相をもち、時と場合によって、磁気や力の現象を示す、と観じたのである。

▼現代科学は、電気を、電気現象の面だけで捉へ、もっぱら「正」の電子のみを対象として来たが、最近では、半導体などで、「反」の電子（正孔）も使はれるようになった。しかし、それも、実用面での理論を出でず、電気の本質はまだ解明されて居ない。

カタカムナ人の直観では、「正」の電子とはサヌキ（男性電子）に当り、反の正孔とは、アワ（女性電子）に当るものである。カタカムナ人は、人間に男性と女性があることの相似象として、電気現象をも観て居た。則ち、オトコは、サヌキを保有し、男性として定着した位相を現はして居るが、しかしアワも必要で（それは、丁度、オトコは男性ホルモンに支配されて居るが、女性ホルモンも必要であるのと同様である）オンナについても同じことが言へる。結局、オトコもオンナも、構成要素は変らないが、男性女性の違ひはどこにあるかといへば、素量的な構成のしかたの相違といふ事になる。

カタカムナ人の直観は、あるものを、あるがままに観ずるまでで、原因にさかのぼって、すべてを解決して居たわけではなく、細かい事は言って居ない。しかし、我々の科学が、非常に精密に、数式や記号を駆使して研究されながら現象論を出ず、本質把握の点で欠けて居る点を、鋭くついて居ると思はれ

る。前述の如く、「電気」の本質を、表面の現象にとらはれず、原子以下の極微の世界に追究して、「集積位相をもつイカツの素量」と観じ、又、「生命」の根元を、細胞内に閉ぢこめず、宇宙の巨大な向力と番力の発生源につきとめ、その電気と、宇宙生命との、相互励発の循環を観じた、彼らの達観は、我々に、強烈な示唆をあたへるものである。将来の科学は、この、カタカムナ人の直観に追随する事になるであらう。則ち、力と力の衝突があり、又それに親和する力があって、チカラがイノチに変る物理である。

さて、(六)のカムヒビキの内容を要約すれば、次のように成るであらう。

『宇宙の虚空には、巨大な力と力とが、衝突する音のヒビキが、入り交うて居る。則ち、地球の属する小宇宙が、その中心に向ふ求心力と、小宇宙の属する大宇宙の、遠い中心に向う求心力との、二つの向力が交錯して居る。この大きな『向力』の入り交ふ中で、諸天体が、分離散乱することなく保たれて居るのは、アマの力によって、「番力」が発生して居るからである。(マガタマではこれを「ナリマタマ」によって表象して居る。)この巨大な向力(ムカヒ)と番力(ツガヒ)の作用によって、宇宙生命(タマイキチ)が発現する。そして、その宇宙の生命力が、集積位相の電子(イカツ)を巨量に生産して放出して居る。則ち、集積位相のカムロバケの電子(イカツ)は、宇宙の生命(カム)から発生し、アマの支配(アマナ)をうけてモコロを構成し、さまざまに変遷して(バケ)、生命質や物質を出現する。このようにして発現して、持続される宇

宙生命（タマイキチ）は、個体の死や、刻々の新陳代謝によって、又、やがて、アマ始元量に収斂される。要するに、集積位相の電気が、宇宙の生命の位相を現はして還元し、則ち、集積位相の電気と、宇宙の生命とは、相互励発の循環を行って居る。』

## （七）電磁波の物理を知ったカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
　ピェ　イヨォ　パッ
イサネ　ハハワケ
アマハヤミ
ヒカリ　ハタヒコ
マクカラミ
ヤクサ　イカツチ
アメ　フキホ

〈ピェ　イヨォ　パッ〉

とは、虚空に於る高速粒子の運動と、光粒子の発生し衝突する有様を、あらはしたヒビキである。たとへようもない大きな力と力のぶつかり合ふ、虚空の様相を感受したヒビキである。

〈イサネ　ハハワケ　アマハヤミ〉

とは、「前述の二つの求心力、則ち、小宇宙の中心にむかふ向力と、大宇宙の中心にむかふ向力との、二つの力（ムカヒ）に、番力（ッカヒ）が親和して居る、その間を、無限高速のアマハヤミが通過することによって、部分的、局所的に離間させる」といふ意味である。イサネとは、生命発現の根、ハハワケとは、親和し番って居るものを分ける意である。

▼カタカムナ人は、物質の発生、則ち、生命の誕生といふ事は、蛋白質やカルシウム等の構成要素がすべて備って居ても、それだけで起るのではない、発生にはキッカケが必要であり、生命現象の発現の根（イサネ）には、人智のはかり知れぬ、大きな、向力番力の間を、アマハヤミが通過する、といふようなチャンスがあるのだ、といふ事を直感したのである。

〈ヒカリ　ハタヒコ〉

とは、上述の、イサネハハワケに基く、向力番力の離間によって、光粒子が巨量に発生する

ことを意味して居る。そして、その巨量の光粒子は相互に衝突して、環況空間に、衝突エネルギーの吸収や放出の共鳴輻射を起励することになる。ヒカリとは、光の振動をもつ光粒子の意であり、ハタヒコのハタとは、光粒子の分離独立、ヒコとは、ヒコ孫のように、次々につづいて現れる意である。

▼向力、番力、アマハヤミの、イサネハハワケによって、巨量に発生した光粒子は、衝突エネルギーをうけて、光の振動を示して居る。これをカタカムナ人はヒカリとよび、その光粒子が、環境の空間に、共鳴、吸収、放出を、起させて伝播してゆく現象を、〈ハタヒコ〉とよんで居る。科学用語で言へば、ヒカリは、電磁波に、ハタヒコは輻射波に当る。又、太陽のような恒星の放出する電磁波を、〈カカホ〉とよぶ事もある。カカホとよぶ場合の輻射波はカカヒコといふ。ヒカリもカカホも、要するに、アマの微粒子の集合であり、エネルギーをもらって放出され、可視光線領域の電磁振動をして居る光量子である。そして、そのエネルギーは、次々と減衰して、恒常状態に復するまで、環境に、吸収、放出の、共鳴輻射を繰返へして伝ってゆく。そして、エネルギーを失へば、光の粒子のマリは、もとのアマに還り、始元量の状態にもどる、といふ直観である。現代科学では一般に、電磁波と輻射波を区別せず、又光量子の消失とか、発生とかと称するのみで、それが、どこへゆき、何になるのか？　又、どこから、何から発生するのか？　といふ過渡はわかって居ない。しかし上古代人は、輻射波は、電磁波が物質系に入って吸収放出される場合で、まだ物質にならぬ始元状態〈マ〉の所は超光速で伝はると直観して居た。

〈マク　カラミ〉

は、「その光粒子の共鳴輻射によって発生する、磁気や力の素量」といふ意味を表はして居る。マクミはイカツに巻いて発生し、カラミは、イカツ　マクミにからんで発生すると解される。又、カラミといふヒビキには、チカラの発生する源は、カラ（空）のカラ（殻）から、則ち、「カムから持続してくる力」である、といふ思念がある。

〈ヤクサ　イカツチ〉

とは、幅の広い範囲にわたる、電気エネルギーの伝播を意味する。ヤクサは、八方に（ヤ）自由に（ク）、分れてゆく（サ）意、イカツチは電気エネルギーの意である。

〈アメ　フキホ〉

とは、アメ（微分されたアマ始元量）によって構成される、二種類の結合した気（フキホ）」といふ意味で、二つの気とは、粒子とエネルギーである。ホは、正反親和の意、フキホとは、粒子と波動エネルギーの親和した状態を表はし、現代で謂ふ電磁波に当る。（八）のフキヲ、（十）のオホトヂカワル参照）

従って、（七）のカムヒビキの意味を要約すれば、次のようになるであらう。

『宇宙の空間に於る二種の向力（ムカヒ）に、親和する番力（ツガヒ）の間を、無限高速粒子のアマハヤミが通過することによって、部分的局所的に、向力番力が離間される。そこで巨量の

光粒子が発生し、光粒子の相互衝突が行はれる。その光粒子の衝突によって、環境空間には、衝突エネルギーの吸収や放出の、共鳴輻射が励発される。則ち、磁気や力や、幅の広い範囲にわたる、電気のエネルギーの伝播波動が誘発され、粒子性と波動性エネルギーの親和した電磁波や輻射波として現はれるのである。』

**▼電磁波と輻射波**　現代人は、実用面で「電気」をさかんに利用しながら、「電気とは何か?」といふ本質はわからない。現代科学に於る、電磁波に対する見解も、その本質の解明が充分でないままに、現象論にとどまって居る。則ち科学の智識では、空間に於る電界磁界は、互ひに直角の向きに振動して進む、横波の、電気磁気の振動であるとし、電磁波の発生は、原子構造に於る電子の賦有するエネルギー準位の遷移に基き、過剰エネルギーの放出の現象であると説明されて居る。そして、電磁気振動の周波数、又は、波長の区分に従って、電磁波の種類を決めて居る。波長の短い方からあげれば、宇宙線、ガンマー線、X線、紫外線、可視光線、赤外線、熱線、未知領域線、短、中、長波の電波、そして交・直流電気の順に成って居る。

しかしこれでは単に現象の説明にすぎない。現在では、現代科学も、「光が電気を生む」ことは認めて居る。例へば、光電管の現象に於て、光が、ある種の金属に当ると電子になり、そのエネルギーは光から来て居り、そして、磁気を伴ふ事が知られて居る。しかしながら、それも、観測にかかった現象を捉へたまでであって、そもそも光や宇宙線等の電磁波が、どこからくるのか? そのもとの発生機構に

ついては、全く不明のまゝで、電磁波と、輻射波も、区別なしに扱って居る。光や電気の本質がわからぬのみでなく、地球上に存在する水や空気や、もろもろの元素の発生源についても、納得できるだけの哲学がなく、ただ、地球中心の循環を憶測するに過ぎない。

カタカムナの直観物理に於ては、電磁波の発生を、ヒビキを以てサトリ、光量子、電磁波、輻射波、電気現象に当るものを、ヒカリ、ハタヒコ、カカホ、カカヒコ、イカツチ等と言い分けて表現して居る。彼らの物理によって解明すれば、電磁波とは、イカツがエネルギーをもらって振動して居る状態であり、そのエネルギーが、輻射を起す物質にうけつがれて、吸収放出されて伝はれば、輻射波となる。従って、宇宙空間には、いろいろの物質が存在するから、輻射を起す物質によって、例へば、地球の圏内、真空中、電磁気や力の分布の濃淡、等によって、伝はる速度は必ずしも現在の計算のような一律の光速度（一秒間三十万キロ米）とは限らぬといふ見解になる。

電磁波の、波動性粒子性の重畳理論の難しい問題も、カタカムナ人は、アメフキホとやさしく言つて居る。二つの気とは、イザナミ（波動エネルギー）とイザナギ（粒子）、又はソコ（膨脹）とソギ（収縮）の本来性であり、フキホといふ表現によって、そのトコタチ（重合互換性）を端的に示して居る。

前述の如く、これらの直観物理は、一般の科学の智識とは、かなり異って居るが、しかし、このカタカムナ人の直観の正否を、今の科学が審査する事は出来ないし、少くとも、否定するだけの根拠はもって居ない。翻訳者である私達も、紹介者であり批判者であって、審判者では無い。唯、あまりにも科学一辺倒の現状に対して、カタカムナの直観内容を、ありのままに披露するまでである。

## （八）　電磁波が、物質や生命質をつくる、といふ物理を示すカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
ヒァ　ツォ　ツォ
カカホ　イカツチ
ハヤアキツ
サヌキ　アワナギ
オキミツゴ
アハジ　オホコト　ホノサワケ
イワクス　ツラナミ　アメフキヲ
アメクニ　ミクマリ　クヒザモチ
サヅチ　サギリ　トヨクミヌ

〈ヒア　ツォ　ツォ〉

とは、電磁波の発生する時の、すさまじい衝撃音をうつしたヒビキである。我々の体験で言へば、百雷が一時に落ちたような……又例へば、熔岩の熔けて居る噴火口の底や、又は熱湯を涌出する温泉の底から、又、灼熱の鉄の熔けて居る熔鉱炉の底から、高熱の蒸気が噴き出すような、強烈な音響を思ひ浮べて、そのヒビキを想像して頂きたい。こゝの場合は、このようにして噴出した蒸気から、いろいろの物質が、大地や大気や水中に析出するように、後述する電磁波動が、いろいろの物質や生命質の要素を、生成するといふことを暗示したヒビキである。

〈カカホ　イカッチ〉

とは、「光振動を示す電気」の意味であり、太陽光線のように、光カガヤク、可視光線領域の輻射波を放出する電磁波を、とくに、カカホといふ。カカとは輝く意、ホとは稲の穂の如く、正反親和して集る形、イカッチは、イカツの持続、則ち、電磁波に当る。

〈ハヤ　アキツ〉

とは、「正反（ハ）の、極限的（ヤ）な重畳の現象（アキツ）」といふ意味である。則ち光量子の如き、粒子性と波動性の正反を、重畳して居る、輻射波動を意味して居る。

〈サヌキ　アワナギ〉

とは、正反性の集積位相の電気の素量を荷った、陰電子（サヌキ）と、正孔（アワ）を示す言

葉である。ナギは粒子の意。

〈オキ　ミツゴ〉

とは、「集積位相の電気素量（イカツミ）が、磁気（マクミ）と力（カラミ）の位相を示す素量と組合って、「生命質」と「物質」の最下限粒子（モコロ）の基礎量（ミツゴ）をつくる」といふ意味を表はして居る。オキとは、「立方体の物質として発生する」意、ミツゴとは、モコロを構成する「複合的基礎量」で、イカツミ　マクミ　カラミの三素量が組合って居る。（前号参照）

〈アハヂ　オホコト　ホノサワケ〉

とは、「以上のような要素量（イカツミ　マクミ　カラミ）や、基礎量（モコロ）を、合成したり（アハヂ）、分離分解する現象（ホノサワケ）を、電磁波動が反復して居る（オホコト）」といふ意味の歌詞である。

〈イワクス　ツラナミ　アメフキヲ〉

とは、「始元量アメのフキヲが、自由に振動しながら（クス）、連結して居る波動（ツラナミ）」といふ意味であり、イワとは、イ（イカツの粒子）が和（ワ）して居る意、則ち、イワクスもツラナミも、フキ（二つの気）を形容して居る。フキとは、粒子とエネルギーの「二つの気」をさして居る。ヲとは、その粒子とエネルギーのフキが、それぞれ正反性をもち、「四相」になる

事を示して居る。（ヲは声音符に明らかな如く「四」を意味する。）

▼さて、粒子の正反とは、サヌキ・アワであり、エネルギーの正反とは、エネルギーのまゝの状態と、エネルギーが粒子に転ずる状態とである。（さきの(七)のカムヒビキでは、「アメフキホ」とあり、フキの親和した状態を述べて居た。―ホの声音符参照―。ここではそのフキホが、四相をもって居ることを表明して居る。更に(十)のカムヒビキには、オホトヂカワルといふ表現があり、その四相の、互換転換の相を示して居る。）イカツの正反のサヌキ・アワの発現も、もとはと言へば、このフキの「やりとり」によるものであり（オホトヂカワル）、その素量のカタヨリ方で、サヌキとアワの違ひが表はれ出すといふ直観である。

要するに、フキとは、現代科学でいふ、「電気磁気」に現はれる以前の、過渡的な状態を表はし、電磁振動に於て、粒子性の面と、波動性の面をもつ現象のもとのコトワリ（物理）を、示して居るヒビキである。

〈アメ　クニ　ミクマリ　クヒザモチ〉

アメクニ　ミクマリとは、「始元量のアメ（潜象）と、現象（クニ）の要素量（現象にあらはれるカタチを構成する物質）とが、混和融合して居る微粒子（ミクマリ）」といふ意味である。そして、その微粒子は、自身は中性で、正反性を自由に転換する性質がある、といふ意味が、クヒ

ザモチである。このような中性のものがなければ、電気の正反、磁気の正反、力の正反だけになってしまひ、自由なヤリとりが出来ないと観じたのである。

〈サヅチ　サギリ　トヨ　クミヌ〉

とは、目にみえぬいろいろな素量の組合せ（トョクミヌ）によって、現象の固相（サヅチ）や、気相（サギリ）等の物質が生成される、といふ意味を表はして居る。

以上を綜合すれば、（八）のカムヒビキは、次のような物理を表明して居ることになる。『宇宙の虚空に存在する電磁波動のエネルギーが、物質や生命質を構成する、いろいろな要素を、合成したり、分解したりする現象を、くりかへし反復して居る。輻射波動と言はれるものは、この電磁波が、輻射を起す物質に吸収放出される現象である。則ち、物質や生命質を構成する要素量を造るのは輻射波動であり、輻射波動のもとは、光を発する電気の振動であり、それは、正反性の極限重畳波動、即ち、粒子性と波動性とを同時に現はすような、波長の短い電気振動である。そのような高い振動数の電気振動は、正反性の集積位相をもつ電気素量（イカツミ）を荷った、陰電子（サヌキ）と正孔（アワ）の、共役によって成り立って居る。その、サヌキアワの共役によって成り立つ電気振動が、生命質と物質の、共通の最下限粒子（モコロ）を形成する複合的基礎量、則ち電気、磁気、力の位相を集積した、オキミツゴを生産する。又、その電気振動は、アメの始元量と、現象（クニ）としての要素量とが、混和融合した、中性の

微粒子を生産する。そして、サヌキ（陰電子）と正孔（アワ）の共役によって成り立つこの電気振動は、更に、これらの要素量（ミツゴ）をいろいろに組合せて、さまざまの生命質や物質に共通する「原子」を生産してゆく。』

▼我々の見て居るすべての物質は、それぞれの形象（カタチ）にまとまって存在して居るが、いづれも、究極的には、細胞とか、原子とかと称ばれる、微細構造の単位粒子によって構成されて居る、といふ事は、今では小学生でも識って居る。しかし、カタカムナ人は、それらの細胞や原子が、究極の、最下限の単位物質ではなく、更にそれらの細胞や原子が、どのようにして、どこから生産されるかというような、原子以下の問題について、示して居るのである。則ち、モコロとは、科学で捉へた原子以前の状態であり、更に、モコロを構成するミツゴや、中性の微粒子の存在を観じて居る。

それらの粒子の始まりは、すべてアマの微分したマリであり、アマのチカラ（位置エネルギーに当る）をもつ粒子であるが、それが、正反の電気性（サヌキ・アワ）を現はすのは、粒子内外のアマのチカラの「カタヨリ」によって、密度差が出来、その度に、右マワリ左マワリの旋転が変る為である。これが、前述の、アメのフキヲ（粒子とエネルギーの四相）の「やりとり」（オホトヂカワル）の意味である。そのようにして生じた電気性の素量はイカツミとよばれ、磁気やいろいろな力に変りうるものである。〈ミツゴ〉とは、これらの、電気素量（イカツミ）磁気素量（マクミ）力素量（カラミ）の位相を集積した複合的基礎量であって、この三素量の組み合はされかたにより、種々の生命質系や物質系

のモコロが構成されるといふ直観である。

そして又、そのような構成要素の究明と共に、そのような力を起させる、電気振動のエネルギー源を追究して、宇宙生気（ウマシイキ）則ちイノチとココロの関はりを直観し、遂に、現象の背後のアマの始元量と、アマを生むカムの存在をつきとめたのが、カタカムナ人の、直感に基くサトリであった。現在の日本語の原型は、このような体験がもとにあって、創り出されたものであった。

現代人も、太陽の輻射エネルギーが我々地球上の生物に大きな恩恵を与へて居る事は、哲学的には認めて居るが、しかし、カタカムナ人のようなスッキリした物理によって、生命の根源を、向力、番力、アマハヤミ等のスケールでとらへ、電磁波の輻射エネルギーが、生命質や物質の生産に関はるといふような、哲科学はもって居ない。（科学的な観測法にかゝる現象に基づき、物質の放出する輻射について、原子構造内に賦存する電子群が、その賦存する位置エネルギー準位から、準位を変移することに因って過剰になったエネルギーを放出する現象である、と説明して居るまでである。）

要するに、カタカムナ人の直観と、現代科学の認識とでは、電気や電磁波に関する、根底の物理が異なるので、簡単に正邪を決める事は出来ない。しかし、私達は、地球上の生物や、物質を考へる上に、太陽の放出する輻射エネルギーが、その生産に、支配的な寄与をして居るといふ、カタカムナの直観物理を、肯定せざるを得ないと感じて居る。少くとも我々は、それを否定する根拠は何も無いのである。

カタカムナ人の互換重合といふ物理を認めぬ現代科学も、一方では、光が、電気を生む事は認めて居るし、電気と磁気の互換性は明らかな事実である。前述のように、光電管に於て、光波がある種の金属

に当ると電子に変り、磁気を伴ふが、そのエネルギーは光から来て居る。又、電気現象は、光からも、熱からも起り、必ずしも物質の原子と限らず、いろいろのモノから生産されるといふ事がわかって来た。それなら、そのもとに、何かがある筈だ、といふ考へが、科学の先端をゆく人々から出て居るのが現状である。

要するに電気とは、ヒカリから出たものであり、要するにアマを始元として、マリから変遷した、アマの力であり、同種は反撥し、異種はひき合ひ、粒子性、波動性がある……。といふカタカムナ人の直観は、単純だが、本質本性を把へて居たから、結果の現象の本末を、あやまる事はなかった。

私達は翻訳者の立場であって、現代科学を裁いたり、否定したりするのが目的ではない。しかし現代の科学の認識を肯定するなら、カタカムナの直観物理を翻訳する必要はないわけである。カムヒビキを通読されればわかる事であるが、現代科学が扱って居るもので、カタカムナ人のこなして居ないものは無いと言ってもよく、むしろ、私達は、我々現代人のアタマで考へる位の事は、感度のよかった彼らはとうに考へて居た筈であり、昔も今も、およそ人間の本当に直観力の鋭い人でなければ、こういふ見解は出せないであろうと、彼らのヒビキを解読するにつれ、いよいよ舌を巻く思ひをさせられる、といふのが偽らぬ実感である。

たとへば、古代の建築や、焼きものや、さまざまの遺物を、現地で実際に手にふれて、長年深く研究して居る人々は、古代人の知恵の高さに驚き、現代の自分達よりも、彼らの方が、はるかに優れた能力をもって居た、といふ感に打たれるといふ。一般人も、そのような事実には頷くのであるが、しかし、

智能の発達に於ては、奇妙な優越感をもって居る。ところが、民族のもつ文化度は、綜合したレベルで表はれるものであって、彼らののこした、すぐれた遺産は、そのもとにあった、彼らの精神生活の、内容の豊かさ高度さを、物語るものであると考へるべきであらう。私達は、カタカムナの文化に出逢ひ、今までの先入見を、徹底的に反省させられたのである。

日本人の中には、ときどき、日本を祖とするよりも、西欧諸国を祖としたい程に心酔し、片想ひの親愛感を寄せるムキがあり、そして、それも日本民族の心情の特質として、大きな眼でみれば、ほゝえましい位のものであるが、しかし、いやしくも日本語によって育った日本人なら、その民族的な意識が、いかに科学に、汚染された現在と雖も、そのカミの、遠い祖先のココロを伝へるヒビキにふれて、例へばコロコロとか、ホノボノ等の日本語をきいて、外国人のように、全く何の感じも無い、といふ事はあり得ぬ筈である。まして、自分達の民族の祖先の、真に優秀な英知を知って、不愉快になる人はないであらう。

科学智識の先入見を抜きにしては、ものを考へることのできなくなってしまった、現代人のクセを正さぬ限り、マトモな思考は進展しないので、私達は、とかく、科学用語をやり玉にあげる事が多くなるのであるが、現在のような文学、哲学、理学、芸術、生活技術等の専門に分化する、はるか以前の上古代に、この日本の地に住み、現代の我々よりも、はるかに鋭い直感力によって、天然自然の物理を把握して、独自の世界を展開して居た、遠い祖先の、カタカムナの高度の文化を、日本語を使ふ日本人なら、一度虚心に、吟味してみて頂きたい。

## (九) 物質の機構を示すカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
サドツクシ　アメノヒトツネ
アメフタヤ　アメノサデヨリ
ワクムスビ　イワツチイワス
オメタグヒ　イカツカタワケ
サヌキアワ　ホグシオシコロ
オホタマル　ヤクサイカツチ
メグルマリ

「物質」といっても今日の科学の物質といふ概念ではない。日本語の「モノ」とは、物質も生命質も、又、すべての事柄も、「モノ」である。「機構」とは、機能と構造の意味である。さ

て、

〈サド　ツクシ〉

とは、「自由に（ク）微分（サ）統合（ト）された、個々（ツ）の物質」、といふ意味を表はすヒビキである。則ちすべての「モノ」をさして居る。

〈アメノヒトツネ〉

とは、「始元量アメを同根（ヒトツネ）として、個々物質は成り立つ」といふ意味を表はす。

〈アメ　フタヤ〉

とは、「始元量アメから生成する個々物質は、極限的には、正（アカ）と反（アヤ）の二つの性質に分れる」といふ意味である。

〈アメノ　サデヨリ　ワク　ムスビ〉

とは、「個々物質（サドツクシ）は、始元量アメの密度差（サデヨリ）で、性質の異なる枠を形成して居る（ワクムスビ）」といふ意味を表はす歌詞である。

〈イワツチ　イワス　オメ　タグヒ〉

とは、「その形成する枠は、例外なく、雌雄配偶（オメタグヒ）のカタチを以て、多数の個々の微細枠（イワツ）が集積して（チ）居る」といふ意味を表はして居る。つまり、一つ一つのアメは、アマの微分であり、まだ、電気性も磁気性も無いが、それが枠をむすんで密度差をもつ

と、電気性を帯び、雌雄（正・反）の配偶で、行動する。イワとはイの和する意、イとは微細な粒子、スはスル、為スの意、則ち行動する事である。

〈イカツ　カタワケ　サヌキ　アワ〉

とは、「電気性を帯びた粒子は、サヌキ（陰電子）とアワ（正孔）とに、カタワケ（型分け）される」といふ意である。

〈ホグシ　オシコロ　オホタマル〉

とは、「大きく正反性に分れて居る物質（オホタマル）が、更に分解された（ホグシ）立体的粒子（オシコロ）となって」といふ意味を表はして居る。

〈ヤクサ　イカツチ〉

とは、「いろいろの種類（ヤクサ）のイカツチ（イカツの持続、科学で帯電素粒子と言はれるものに当る）」といふ意味である。

〈メグル　マリ〉

とは、循環運動をして居る微粒子といふ「運動」の意味と、始元量アマから分化した物質が、再びアマ始元量へかへる「還元」の意味とが、掛けられて居る。

従って、(九)のカムヒビキを要約すれば、次のようになるであろう。

『自由に個々の性質に分れて居るさまざまな物質は、いづれもアマの微分のアメから生成され

たものであり、極限的には、正の物質と、反の物質の二つの性質に分れて居る。その正反性の物質は、それぞれ、始元量アマの密度差によって、いろいろと性質の異なる枠を形成して居る。しかも、その形成する枠は、例外なく、雌雄配偶のカタチをもつ、微細な枠の集積したものである。則ち、物質は、大別して、正と反の性質に分類されるが、電気的には、陰性電気を帯びたサヌキと、陽性電気を帯びたアワの、微細構造で成り立って居り、いづれも始元量アマから分化した存在である。そして、正反の電気性を荷ふ微細な素量の雌雄の対が消失することによって、始元量アマに還元するといふ循環系である。』

▼現代科学では、正の物質は正の原子によって構成され、反の物質は反の原子によって構成されるといふ、限定した、理論上の扱ひである。又、正の電子は陰電子、反の電子は正孔、として、固定的に考へ、そして、それが最下限の微細物質であるといふ見解である。しかし、カタカムナ人のカムヒビキによれば、陰性電気を帯びた素量子一般がサヌキとよばれ、陽性電気を帯びた素量子一般がアワとよばれて居る。言ひかへれば、サヌキアワの素粒子は、更に、その下に堀り下げられたいくつかの素量子で成り立ち、その素量子も亦、サヌキアワの配偶構造が存続するといふサトリが基底を成して居る。こゝで素粒子といふのは、素量子がいくつか集ったものゝ意であって、素粒子には大小があるわけである。要するに、科学で扱はれて居る陰電子とか正孔といふものは、それが最小の単位ではなく、更にその下

に、サヌキアワの配偶構造をもつ構成要素量が存在する、といふ予見が示されて居る事になる。

従って、カタカムナの直観物理によれば、「正」の物質の中にも、「反」の要素が位相として存在し、「反物質」も、「反」の要素量のみで成り立つのではない。すべて、正反性の電気の「密度差」によって構成され、その正反の雌雄性が、配偶して居る間は生存を保ち、その対の一方の「反」のアワが消失すれば、やがて、そのカタワレの、「正」のサヌキも、消失してアマに還元する。これが、生命を保ちつゝ、新陳代謝する現象の原理である、といふ事になる。（次項参照）

## （十）反物質の存在を示すカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
ハッ　フッ　カッ
アカ　アヤ　カシキ
オホトマベ
オホトヂカワル

アキツヨミ
ツラナギ　ツラナミ　クラウネヒ

〈ハッ　フツ　カッ〉
は、正反粒子の発生音、正反粒子の消滅音、そして、正反粒子の交換音を表はしたヒビキである。このヒビキは、カタカムナ人が、宇宙に於る正反粒子の対発生や、対消滅、並びに、正反粒子の相互転換などの現象を、直観でサトッた事を表はして居る。

〈アカ　アヤ　カシキ〉
とは、「正反の粒子が、別々の現象（カ）を示して（シ）現はれる（キ）」といふ意味である。

〈オホトマベ〉
は、「別々のカタチの正反粒子が、つねに、正反親和し（オホ）対に伴って（トマベ）発生し、消滅する」といふ意味を表はして居る。

▼対消滅には時間的なおくれがあり、反の粒子は早く消える。反の粒子が先に消えると、まもなく、ペアになって居た正の粒子も消えてゆく。つまり、正反粒子が、ペアに伴って居る間は、その部分の生存が持続して居る、といふ直観である。

〈オホトヂ　カワル〉

とは、「正反性の粒子（サヌキとアワ）の交換、並びに、粒子とエネルギーの相互転換が、持続して居る」といふ意味である。

▼この事が、さきの(七)のアメフキホ、(八)のアメフキヲ、といふヒビキで示して居た、四相の説明の延長である。つまり、フキホ・フキヲは、正反の粒子のサヌキ・アワの、電気性が発生する過渡を、示すヒビキであり、電子（イカツ）の正反、則ちサヌキとアワの違ひは、要するに旋転の違ひ（まわり方が逆）といふ事であり、それは構成される素量（イカツミ　マクミ　カラミ）の量の組合せ方によって定る、といふ直観である。そして電磁振動が、周囲の環境に、次々に吸収され放出されて、波及する輻射の現象も、この粒子と、波動エネルギーの交換による、といふこの直観は、光の粒子性と波動性の重畳状態をも、美事に解明して居る。そして輻射といふ現象は、電子の振動エネルギーが減衰して、恒常状態にもどるまで、次々と交換しつゝ、吸収、放出をくりかへし、水が高きから低きに流れるように、伝ってゆくスガタである、といふ事になる。

従って、太陽の放射する電磁振動は、それが伝って居る間は輻射エネルギーがあるわけで、エネルギーを失ってしまへば、個々のマリの状態に、バラバラになり、アマの本来性にもどるわけである。という事は、太陽の勢力圏内を離れた恒星空間は、我々の太陽ばかりでなく、宇宙の恒星から放出された、このようなマリの密度の濃い所と、淡いところとが存在する筈である。そしてそれらのマリは、宇宙の

条件によって例へば、地球圏内に於ては、再び電磁波や、空気や、各種の元素をつくり出してゆく事になる。カタカムナ人は、この状態を「ハコクニ」と言ひ「ワクムスビ」と言ひ、又、「モロカゲサチ」等と称したのである。

このように、あらゆる物質は、我々の身体を構成する生命質の材料も、すべて、結局は、炭素（C）水素（H）酸素（O）窒素（N）等の元素の原子に帰し、それは、「電磁波」の変遷したものであり、要するに、アマハヤミの通過や、アマタのアサヒ（恒星）の輻射や、又、アサヒを生むアマヒのチカラ等の「モロモロのサチ」のおカゲで発現すると観じたのである。

カタカムナの上古代人のヒビキといふものは、例へば、フキホとフキヲのような、たゞ一音の違ひでも、忠実に訳さなければ、粗略に扱へば、落してしまふものが出てくることをおそれて居る。（前号の図象文字にうつして参照）

〈アキツ　ヨミ〉

とは、「アキツが崩壊する」意味で、アキツとは、個々に表はれる現象を言ひ、ヨミとは、ヨミのクニなどといふように、人間なら死であり、現象が亡くなることである。

〈ツラナギ　ツラナミ　クラ　ウネヒ〉

とは、宇宙に於る巨量の正反粒子の対発生や、対消滅、並びに、正反粒子の崩壊転換が、行はれて居る有様を表現して居る。

▼地球上に存在するすべてのものは、いつか崩壊してゆく、諸行無常の事実を、我々は見て居る。(その事を、あるがまゝにうけいれるだけでも「サトリ」と言はれる。)科学でも、半減期等として、元素の崩壊も認めて居る。我々の肉体も、刻々に新陳代謝して、古い細胞は壊れて、新しいものに換り、半年もすれば、神経系の一部を除く、身体中の細胞は入れ換ると言はれて居る。しかしながらどのようにして、それらが崩壊し、崩壊したものはどこへゆくのか? といふ事はわかって居ない。この物理についても、カタカムナ人の直観によるサトリは、我々に、大きな示唆をもたらすものである。

さて、この(十)のカムヒビキを要約すれば、次のような意味内容と成るであろう。

『宇宙に於ては、正反性の粒子が、別々のカタチで現はれるが、つねに正反性粒子は、対発生であること。又、正反性の粒子は、時間的に別々に消えるが、つねに正反の対で消滅するものであること。又、宇宙に於ては、巨量の正粒子と、反粒子とが相互転換し、巨量のエネルギーを放出して居ること、又、エネルギーと粒子とは、相互転換を行ふこと。そして、宇宙の虚空に於ては、巨大なスケールで、正反粒子の生成、消滅、並びに崩壊が行はれて居ること。』

▼現代の科学に於て、今世紀最大の発見は、「反粒子」の存在であると謂はれて居る。それまでは、自然界は、正の電子や陽子中性子によって、安定な原子が構成され、その正の原子で成り立つ正の粒子

は、恒久的に不滅不変のものであるように考へて居た（物質不滅の法則）。ところが理学の進展に伴ひ、従来の「正粒子」に対し、総ての性質が、逆性となる「反粒子」の存在が、どうしても考へられねばならなくなって来た。そして、その存在確認の為、大規模の実験が、世界各地で行はれたのである。その結果、反電子、反陽子、反中性子、その他、反性の素粒子の実在が発見され、正反粒子の対発生や対消滅の現象も確認された。そこで上述の如く、正の物質の基本は「正の原子」であり、正の原子は、正の電子、正の陽子、正の中性子等の正の素粒子によって構成され、それに対し、反の電子反の陽子反の中性子等の反の素粒子の存在が確認された以上、「正の物質」に対応する「反の物質」も当然存在する筈であるといふ事が、「理論上」、言はれるようになったのである。

たゞし、反の素粒子は確認されたが、反の物質は発見されて居ない。その事を科学では、地球上に於る反の物質の寿命が極めて短く、存在し得ないのと変りが無い為であると説明して居る。現在の観測によれば、反電子の寿命は千万分の一秒の単位であり、反陽子は、億分の一秒、そしてそれらの反の素粒子で構成される反原子になると、十億分の四秒といった短かさである、と計算されて居る。そして比較的生命の長い反電子は、現代のエレクトロニクスに使はれ出したが、しかし、反原子で構成される反の物質は、地上では存在し得ないと解釈されて居るのである。

現代科学の見解と、カタカムナ人の直観を比べてみると、科学で、正反の電子と言って居るものは、カタカムナの、イカツの正反、則ちサヌキとアワに似て居り、科学が正反の中性子陽子と言って居るものは、ウキフヌに当る。しかし、正反の物質の構成については、大いに異るものがある。つまり科学で

は、正の物質は正の原子で成り立ち、反の物質は反の原子で成り立つから、地上では存在し得ぬ、特別なモノであるとして居る点である。

科学が反物質に気がついたのは最近の事であり、今までは、電気現象を大いに利用しながら、正の電子だけに注目して居た。ところが、結晶には、電気の正反がなければ結合力が無く、原子の構造も、正反がなければならぬ、単に、電子の正反の、スピンの違ひだけでは、説明ができなくなって来た……。

これに反し、カタカムナ人の直観は、一貫して、正（アカ）の物質の中にも反（アヤ）の要素を附随して居る、といふ物理である。従って、「正」の粒子（サヌキ）や「反」の粒子（アワ）は存在するが、「正」の要素だけで成り立つ正の物質や、「反」の物質だけでなりたつ反物質などは、あり得ぬといふ見解である。そして、地上では極めて寿命の短い「反」の粒子を、物質の中にとりとめておく技術を開発して、「反物質の鉄」ともいふべきものをつくり出して居たのである。（次号詳述）

このような相違が出るのは、カタカムナ人の電気の概念が、科学の定義と根本的に違ふからである。

現代人も、反物質の存在にようやく気づいたものの、反原子はまだ確認されず、反物質の本質も不明のまゝに、従来の正の電子に対する反の電子は、一般に陽電子とか正孔とかの名で扱はれ、極めて価値高い利用の技術が開発されて来た。今日のエレクトロニクス、則ち電子工学技術の、日進月歩の進展によって、電子文化は飛躍に飛躍を重ね、コンピューターの用途も、従来の電算機の概念を一新し、動きに際し、先をよんだり、ブレーキをかけたり、近道を選んだりする行動装置として、コンピューターの計算を加へながら、反電子が利用され、各国とも特殊な研究が（宇宙ロケット大陸間弾道軌道修正等の

軍事秘密として）進められて居る。

しかしながら、科学技術的開発のまだ無かった我が国の上古代に、「反物質の存在」を表はすカムヒビキが明示されて居た事は、大きな驚きである。

## （十一）　質量の物理を知ったカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
ハホ　ハホ　ツォ
アマノカガミ　アメヨロヅ
アマナ　ウケハシ　オホトヒメ
オモダル　カシコネ
アメトムベ

〈ハホ　ハホ　ツォ〉

は、宇宙の虚空に於る、万物の引き合ふ様を表はした音である。

〈アマノカガミ　アメヨロヅ〉

アメヨロヅとは、万物万象の意であり、アマのカカミとは、アマのカミの力、則ちアマの始元量を生むカムのチカラを意味する。ここでは、そのチカラをうけて、宇宙の万物が互に引きあふ現象を言ふ。カカミとは、カタチやチカラに表はれるカミの意から、鏡や鑑の意が出る。

〈アマナ　ウケハシ　オホトヒメ〉

とは、物体には、潜められた、カム　アマの受授の行はれる場がある、といふ意味を表はして居る。ウケハシのウケは「宇宙の気を受ける」意、ハシは、「正反の示し」則ち、AからBに渡す意から、橋の意や箸（食物を口に渡す）の意や、端の意に通じるのである。オホトヒメは、大きく秘められて居る意。

〈オモダル　カシコネ　アメトムベ〉

とは「カム―アマの受授の場の、微分空間（アマナ）に働いて居るチカラが、物の重さ（オモダル）になる。その重さは、アマナを構成するアメ（微分始元量）の密度差に従ふ」といふ意味である。（科学用語では、「質点」に働く力の量を質量といふから、アマナウケハシを質点に、オモダルを質量にあてれば、科学用語の質量の意味が正される事になる。なほ、アマナは原子核に当る。）トムベとは、富みに伴ふ意、「へ」は方向を示す思念であるから、富む方に従ふ、則ち、アマナの密

度の大きいものは、質量（オモダル）が大、といふ事である。

そこで、（十一）のカムヒビキの意味を解説すれば、次のように成るであろう。

『宇宙には、万物の引き合ふ音が響いて居る。それが、アマのカミからの力をうけた、万有引力である。そして万物には、物体内に潜められた、アマナのウケハシ、則ち、カムとアマの支配の受授の場がある。その受授の場は、目に見えぬ微分空間である。物体の質量（オモダル）とは、この微分空間（アマナ）を構成する、アメの密度差に従ふもので、密度の濃いものが、質量も大になるのである。』

▼カタカムナ人の直観では、物体を生成する要素としては、現実の形質を構成する諸元素の起源に、前述のような、太陽や、モロモロの宇宙の諸天体の輻射エネルギーのおカゲ（モロカゲサチ）を観じると共に、更に大きな、カム―アマの力の支配（アマナウケハシ）を感じて居たのである。

現代人の質量の観念は、剛体内の質点と、質量を考へるが、カタカムナ人の質量（オモダル）の考へ方は、その物質の生成の中心核ともいふべき、アマナウケハシの場、則ち原子核内の「微分空間」とも言ふべきものを質点とし、物質の「質量」は、その「アマナ」を構成するアメの密度則ち、トキトコロの粒子（潜態）の量によって定る、つまり、アマナの密度が少ければ質量は小さい、とまことにスッキリした見解である。これは、アマの「元」と、アマのカミの「カム」の力に基づく考へ方であるから、

これならば、宇宙のどこにでも通用する物理である。

ところが科学では、地球の重力だけを考へて居たから、おきかへられる量は地球の重力であり、単位として表せば、グラムである。その為に、地球の重力の及ばぬ所にゆけば、その理論は通用しない。「質量」といふ考へ方は、古典理学に於ては「元」としてとり扱はれたが、今日では、質量は、物体に働く加速度量、則ち、時空量に置き換へられる物理量である事が判り、「元」として扱ふことは無くなった。しかし、自然界で観測される物体の運動や静止の状態が、どのような有様で起るかを研究する力学に於て、質量の問題は、今なほ論議されて居る。そして、経験法則を基にして、次のように質量の定義を決めて居る。カタカムナの物理の視野からすれば、局所的近視眼的であり、且、非常にわかりにくい表現であるが、現代科学の見解を示す定義であるから、カタカムナの物理に対比して、いかにスッキリして居ないかを、味はってみる為に附記しておく。

「二つの質点が、互に作用し合ひ、他の物体からは充分遠く離れて居るとき、二つの質点は、慣性系に対して加速度をもつこと、その質点のもつ加速度の方向は、二つの質点を結ぶ直線上に在って、向きは互に反対であること、その大きさの比は、両方の質点だけによって決り、それ等の速度には、無関係であること、則ち上の加速度の大きさの逆比を、質点の質量の比に等しいとする。この定義に従へば、大きな加速度で運動するものが、質量が小さく、加速度が小さくて、速度が余り変らぬ方が、質量は大きいのである。」

## (十二)　物質の結晶の物理を示すカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
ツァ　ツァ　ツァ
イカツ　オホワタ
アメカムロ
アメノトリフネ
サヌキアワ
ウマシ　アシカビ　トビハツチ
オホゲツヒコヒメ　シナツヒコ
アオヒトクサキ　オホヒルメ
ヤソシマムスビ
アマ　アナト

〈ツァ　ツァ　ツァ〉

とは、大海原に雨水の降り込む音であるから、本当は海の底に居て、雨の降るのを聞かねばわからぬが、これまでのカムヒビキが、大宇宙の、発生的な音であったのに比し、これは身近な、平常的な、自然界の、静かなヒビキを表はして居る。

しかし自然といっても、自然界だけで存在して居るのではなく、大きなオホワタ（大海原）があって、そこから出発し、そこへ還ってゆく……、つまり大海原とは、つねに、アマが、無限のカムと、現象の自然界とに向いて居る相であり、そこに、我々のイノチが、つねに交接して居る関係を観じて居たのである。

〈イカッ　オホワタ〉

とは、「宇宙に充満して居る電気の海」といふ意味であり、それが、物質結晶のでき上るべき「環境」であり、物質結晶の原動力と成って居る、といふ意味を表現している。

▼環境　この場合「環境」といふのは、単にその周囲といふだけの、限られた狭義の環境ではなく、宇宙に充満する、イカッのオホワタに通じる、大きな環境の意味である。

そもそも楢崎が、このような意味の環境の存在に、ハッキリと気付いたのは、終戦前、満洲に於ける、製鉄研究の時代であった。当時、いくつかの異なる場所で、小規模の熔鉱炉で、実験的に製造して

いたところ、材料も技術も全く同じ条件であるにも関らず、生産する場所によって、出来上りに甚しい差のある事を発見した。ある場所の製品は、いつも優秀であるが、ある場所のものは、不揃ひで不良品が多く出る。いくら検討しても、資材も方法も変らぬので、不審に思って居たが、ある日、ふと気がついた事は、いつも優良品を生産する場所には、周囲に、青々と樹木が繁茂して居るが、それに対し、きまって不良品を多く出す場所の辺りは、雑草も生えぬ一面の荒地だといふ事であった。植物の生育を活性にする環境には、製鉄の工程の上にも作用を及ぼす、何かの力があるのではないか?……

そして、この経験を生かして、当時東洋一の大規模の、新しい工場の建設位置を決めたのであったが、この環境のもつ力とは何であるか? 環境と言へば大気か? 大地か? この正体を究明したいといふ念願から、終戦後、全国をまわって、各地の大地電気を測定して歩き、実地の多数のデータにより、自然の地形の「相似象」に気づき、又、古代からの神社や、霊地等といはれる所や、又、農産物のよく出来る田畑などが、例外なく、非常に高電位である事を知ったのである。(そのような優勢地に住む人には長寿者が多く、反対に、電圧の劣勢地は、作物がみのらず、地形は荒れ、建物はいたみ、人体にも不健康地で、道路などは、いくら修理しても忽ち破損する事が確められた。現在までの最高記録は、三輪神社)

そして、この調査の途中、六甲山系金鳥山の附近に、岩にからんで巨樹の生ひ茂る場所のある事をきゝ、調査に赴き、俗称狐塚のあたりに、二ケ月余穴居して居た間に、たまたま、平十字氏より、カタカムナの文献を示される事になったのであった。

現代の人間は、感度が悪くなって居るが、植物や動物は、今なほ、敏感に、その環境に則して生きて居る。人間の心身の健康にとっても、その環境の影響が、何よりも、根本的に大きく支配して居るのであるが、人々は、そういふことは知らぬまゝに、全く無視して居る。最近の光化学スモッグ等の公害に関しても、この環境の条件は大きいものである。従って、医療関係はもとより、自然栽培や、自然食を志す人々にとっては、この「環境」の問題、則ち、「大地大気の電気」の状態に、無関心では、すまぬ筈である。

決定的に大きな恩恵をうけて生存して居ながら、全く意識には上らず、科学でもとりあげない。人々は、大まかには、天地自然や太陽や大地のおかげと思ひ、又、宗教的に神や仏のわざに帰したりして居たが、その「正体」を、ハッキリと知る事はなかったのである。

私達も、カタカムナ人のサトリに接して、はじめて愕然としたのであったから、一般の人々が、私達の拙い言葉をきいても、大ていは一蹴し去り、せいぜい半信半疑の、警戒の色を示されるのも、ムリはないと覚悟して居る。私達がカタカムナの文化に触れて、心の底からのオドロキを以て、自分自身の先入観念を反省するに至るまでの、経緯を知らぬ人々にとっては、私達の言葉が、信じ難いのも当然であらう。

はからずも、カタカムナの伝へを知った私達が、その内容の重大さを縷縷述べるのも、現代の心ある人々に、現代人の常識や先入見にとらはれず、虚心に、この上古代人の言葉に、耳を傾ける気持になって頂き度い故に他ならず、何らの私心は無いのである。

〈アメ　カムロ〉

とは、イカツオホワタ（電気の海）の中に、目に見えぬアメで囲はれた物質が存在して居る、といふ意味である。則ち、物体の輪郭をなすものが、アメで囲はれた、いはゞアメの壁（後出のアナトの事）であり、そのアメに囲はれて、物のカタチが、環境のイカツの海と、区分されて表はれて居るといふ意である。わかり易い相似象で言へば、絵を画くとき、輪郭を、線や色調で囲ふのは、このアメの壁を描いて居ることになるであらう。又アメカムロとは、前出の「マカカハコクニ」を説明するヒビキでもある。もし、アメの壁に囲はれずに、電気力が働けば、環境にすぐとけてしまふから、モノの形を保つ事は出来ぬと観じたのであらう。カムロとは前出の如く、「カタチの見えぬロ」の意で、ロとは、絽の如く、縦横に、こまかくしきって囲はれて居る意。

〈アメノトリフネ　サヌキアワ〉

とは、「始元量アメに於ける、統合性と分離性の二つの根が、物質に受けつがれて、分化と還元といふ現象となるのであり、それは、サヌキ（電子）とアワ（正孔）の働きに基くものである」といふ事を表はす歌詞である。トリフネとは古事記には、鳥舟、異本では、摂理と訳されて居る。統合（ト）と分離（リ）の二つの根（フネ）の意である。「鳥舟」と訳されてしまっては、トリツキようもないが、「摂理」の方は、訳者の理解のほどが察しられる。

〈ウマシ　アシ　カビ　トビハツチ〉

とは、物質の結晶が、縦（アシ）と横（カビ）に延び拡がる意味を表はし、正反の力が、一つのカタチに統合（トビ）親和した（ハ）個々（ツ）連続（チ）の現象、則ち、結晶力が、発現する有様を表現して居る。ウマシは生産する意、アシとは、葦や足が、上下に伸びるところから「縦」を意味し、カビとは、黴が左右に拡がるところから「横」を意味するヒビキである。

〈オホゲツ　ヒコヒメ　シナツヒコ〉

とは、空間に結晶軸が次々に発生して、個々固有のカタチが反復されて居る意である。則ち、結晶点と、結晶格子の発展を、表現したヒビキである。オホゲツとは、「六方の立方体に、正反親和して、次々に、カタチがつくられる、結晶の状態」を意味して居る。ヒコヒメとは、次々に続けてあらはれる意、シナツヒコとは、そのくりかへしの個々を示す意。則ち、「ヒコヒメ」と、つゞけて一語となって居るときは、反復される意になるが、「ヒコ」、「ヒメ」といふときは、前出のようにヒ（もと）から分れた、「彦」と「姫」の意となる。なほ、わかり易く説明する為に、「結晶点や結晶格子の発展」と訳したが、オホゲツヒコヒメとは、今日の、小さな分子や原子の結晶のみを言ふのではなく、大小の物質や、天体の出来るのも、要するに、このような結晶の、発展として観て居たといふ事である。

この環境の電気が、温度や圧力等の条件によって状況が変れば、分子原子も、その電気の運

動に共振して結合力が異り、物質に、固体、液体、気体等の別が生じるわけである。このような電気の海（イカツオホワタ）の原動を考へない限り、単に、分子原子自身のもつ結晶力が異るといふ科学の説明は納得できぬし、結晶が拡がるわけもわからない。

〈アオ　ヒト　クサ　キ　オホヒルメ〉

とは、このような結晶の発展してゆくスガタは、人間にも、動物にも、植物にも、則ち、物質にも生命質にも、共通する現象である事を示し、そのような結晶は、宇宙的原動（アオ）によって行はれる、といふ意味を表明して居る。アオヒトクサキとは、人や草木が、目に見えぬアマの根源から、生れてくる、その発生源をアオといふのである。ヒトとは「ヒトツに統合されたもの」の意から、「ヒト」といふ言葉によって「人」が代表されるが、動物一般も含まれ、広義では、植物も鉱物も含まれる筈である。カタカムナの用語に於る「ヒトとカミ」の関係を後代人が「人と神」と訳してしまったのは誤解であって、「ヒトツのモノとして統合されて現象にあらはれたもの」を総称して「ヒト」と言ひ、「ヒトを生じるモト」が「カミ」、則ち、川の源流を川上といふような、「根源」をさす気持であった。オホヒルメとは、六方の立方体に（オ）正反親和して（ホ）ヒトツに（ヒ）とゞまって（ル）発生して居る（メ）、則ち、「結晶」の状態を意味して居る。

〈ヤソ　シマ　ムスビ　アマアナト〉

とは、「すべて、万物（ヤソシマ）を生成する（ムス）根元（ヒ）は、アナト（アナの門）に内在するアマナである」といふ意味の歌詞である。ヤソシマとは、ヤは多数を意味し、古事記等では八十島と訳されて居るが、「たくさんのマの示シ」、則ち、「物質生命質を含む、すべての万物」の意で、単に島だけをさすのではない。アナトとはアナの門の意であり、アマナウケハシとも言って居る。

一般の科学の概念に在る物質の結晶とは、結晶それ自身のもって居る結晶力、則ち原子、分子の持つ電子が、主として参与する現象であるとされている。これに対し、（十二）のカムヒビキで示して居るカタカムナ人の直観を要約すれば、次のような物理となるであらう。

『物質の結晶といふ現象は、原子や分子自身の、微視的な力の作用に基くものではなく、宇宙の広域に充満する宇宙的原動力、則ち、集積位相の電子（イカツ）が、結晶の原動と成って居るのである。物質の環境は、すべて電気の海であるが、その中に潜在する、始元量のアメが、物体のカタチを形どる役割をして、いはば、アメの壁に囲はれて、いろいろの物が存在して居るのである。そして、物が分化し還元するといふ、物質の分離統合の現象は、アメの性質を享けついだ、イカツの正反、則ち、サヌキとアワの働きに基くものである。

要するに、サヌキ（陰電子）とアワ（正孔）の親和する力が、物質の結晶力であり、縦横に延び拡がる物質結晶の現象は、物体の環境の電気の海から、結晶点や結晶格子の役割をする、陰

電子（サヌキ）と正孔（アワ）が供給されて居るのである。そしてそれは、生命質と物質の結晶に共通する現象であり、すべて、宇宙的拡がりをもつものである。

このようにして、原子分子から、諸天体までを含む、万物が構造されるのであるが、その発生元は、アマの内在するアナトである。則ち、アナトのアマナウケハシによって、すべてのものが構成され、アメの壁に囲はれて、ものの形が保たれて居るのである。』

なほ、このヒビキも、殆んどが、古事記等に漢字で神名等として伝へられ、日本人には馴染みの言葉であるが、そのカミ（起源）をたゞせば、以上のような意味となる。物質を生成する原動力が、環境のイカツオホワタ（電気の海）にあるとは、古今未曽有のサトリであらう！

## （十三）「生気増幅電流」のサトリを示すカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
ク　クァ　クァ
アカシ　チクヌネ

サヌキ　アワ
ツヌクヒ　イククヒ
ハハキ　ワケ
アメクニ　トコタチ
チブリクミ
ウブス　イカツチ　ヤソマサゴ
イヤス　イヤシロ　イキアフミ

〈ク　クァ　クァ〉
は、雄鳥が雌鳥を呼び、又は雌鳥が雛鳥を呼び集める鳴声である。則ち、およそ、生物の生きる「食」と「性」の本能を表現したヒビキである。

〈アカシ　チクヌネ〉
とは、アカシとは、「表はれた示し」、チクヌネとは、「見えない根」の事で、男女の性器を表はす言葉である。

〈サヌキ　アワ〉
とは、男性、女性の電気特性を、この場合は意味するが、本来は、イカツの正反、則ち、陰

電子と陽電子（正孔）にあたるものである。

〈ツヌクヒ　イククヒ〉

とは、本来は、食本能、性本能の、行動を表はすヒビキである。ツヌクヒとは、「個々の見えないクヒ」、イククヒは「生きる為のクヒ」の意。本来「クヒ」とは「クヒを打つ」のクヒの意で、カタカムナ人の心情では、生命をつらぬき得る為に必要なものは、アマが、クヒを打つように、ところどころに配材してくれて居る、といふ気持であった。そこから「食いもの」とか「食ふ」とかの意味が出てくるわけである。ここでは男女の性交を意味するが、彼らは、生物の食や性の本能も、アマの打つ「クヒ」として、あたへられた「恩恵」と考へたのである。そこにあるものは神聖な感情であって、猥雑な妄動は全く感じられない。従ってそれをむさぼったりおろそかにしたりすればバチッ！　と当る「クヒ」もある。（バチが当る）

〈ハハキ　ワケ〉

とは、親和して居る気（ハハキ）を分けて、制動する意味であり、性本能の抑制を意味する。

〈アメ　クニ　トコタチ〉

とは、始元量アマのアメと、現象物質の粒子（クニ）との共役（トコタチ）といふ事で、この場合は、天然の理に従ふ自然な行動を意味する。トコタチとは、「トモにコロガル性」則ち、共存共役性、互換重合性を意味し、トコとは床（ベッド）の意味にも通じるのは妙である。

〈チブリ　クミ〉

とは、電気的接触の意味である。チフリの「チ」とはヌチの「チ」で目に見えぬ電気性を意味し、チフリとは、その「チの振り」つまり「電気振動」である。クミとは組み合って接触すること、則ち、チフリクミとは、男女愛撫の姿を意味する古語であるが、人間も、サヌキ・アワの電気性をもつものであるといふ気持が、おのづからこもって居る。

〈ウブス　イカツチ〉

とは、生れ（ウ）ふえ（フ）活動する（ス）電気（イカッチ）則ち、「誘発電気」の意味を表はして居る。日本書紀には、「産巣雷」と訳されて居る。

〈ヤソ　マサゴ〉

とは、ヤは極限、ヤソは八十で数の多い意、マサゴとは、マの分裂した（サ）細かい粒子の意で、「浜のマサゴ」と言ふように、たくさんの細かい粒子が表はれる意である。

〈イヤス　イヤシロ〉

とは、身体の代謝現象を、活性にする意味の表現である。イヤとは「イヨイヨ」といふ意であり、シロとは「代ること」つまり物質の代謝の意である。従って、「イヤシロチ」と言へば「物質代謝をイヨイヨ盛にする電気の持続する土地」則ち、「電位の高い地」といふ意味になる。イヤスとは、身体の新陳代謝をイヨイヨ盛にすることから、病気を癒す意になる。要する

に、健康を保つには、電気を豊富に身につけねばならぬ、といふ示しである。

〈イキ　アフミ〉

とは、生気増幅、則ち、元気が充実し、活気が溢れるように成る意味を表現して居る。イキとは「生気」であり、アフミとは、溢れるミ、つまり「元気」の意である。「ミ」とは、内容実質充実のミであり、意味のミ、身体のミ、満ちるのミ、実のるのミである。

さて、こゝで（十三）のカムヒビキの意味を要約して述べる前に、陰電子（サヌキ）と正孔（アワ）の電気現象を利用した、半導体物質の、「接面接触式トランジスター」が、最近の電子工学技術、則ちエレクトロニクスの、飛躍的発展の主役を演じて居ること、そして、その半導体物質の接面の電気現象は、生物の男女の間の、愛情を伴ふ愛撫接触時の、電気生理現象に通じるといふ物理を、カタカムナ人が、直感で判って居たと想はれること、そしてその為には、読者に、トランジスターの原理に関する理解が、予備識として必要である事を指摘しておく。

**▼半導体の電気現象**　「半導体」は、最近の発見である為、戦前の理科教育を受けた者は、良導体と絶縁体の区別しか学ばず半導体といふ言葉にはなじみが薄い。半導体も金属の種類である。しかし普通の金属は陰電子（サヌキ）しか保有しないが、半導体の特徴は、正孔（アワ）の濃度がある事である。そして、半導体が接触すると、電流のムキが一方向に整流され、又、増幅される、といふ現象がある。

そもそも、トランジスターの初期は、鉱石検波で、鉱石の中に、金属針で、一点の接点を探して整流させ、ラジオのレシーバーを作って聴いて居た。それが、二点の接触方式になってかなり発展したが、更に、広い面で接する、「接面接触方式」に変って、飛躍的に発達したのである。「NPN型接面接触式」トランジスターの原理は、要するに、PとNの、異なる性質の半導体を、広い面で接触させると、接面から、電子がどんどん発生する、といふ事である。異なる種類の半導体とは、ドナーとアクセプターとよばれ、つまり男性型、女性型と考へればよい。この場合、増幅される電子が、どこからくるかは、科学では説明不充分で、金属自体から出るように考へて居るらしいが、もしそうなら、その金属は、消耗され、目方が減る筈であるが、実は目方は変らず、電気量がふえるのである。といふ事は、まさに、カタカムナ人が、「オメ（男女）タグヒのアマウッシ」と観じた現象に他ならないのである。

さて（十三）のカムヒビキの概要は、次のようになるであらう。

『人間の男女が、性交を慎しみ、神聖な気持で愛撫接触すれば、人体は半導体物質である為に、正孔（アワ）の注入による、生体電気の増幅が現象される。それによって栄養の交換が行はれて、生気が充満し、健康が活性に保たれる、といふ、生体の電気生理の現象を表明した示しである。』（第一号、性の交換栄養、性のプラスエントロピーとマイナスエントロピーの項参照）

▼現代人の常識では、栄養と言へば、蛋白質澱粉ビタミン等をさすが「栄養」の、最も支配的な役割を果すものは、「電気」である、といふのが、カタカムナ人の直観である。たしかに、蛋白質澱粉等の栄養物質を食べても、それを消化し、吸収し、運般するハタラキは、電気現象によるのである。電気が欠亡すれば、栄養物質をとっても身の養ひにはならず、精神的にも元気を失ふ。心身の病ひの最大の因は、電気欠亡である。

**我々にとって最高の栄養は電気の補給であり、その為には、食べものからのみでなく、性の交換によっても、環境から、電気をとりいれる事が、何よりの健康法である事を、カタカムナ人はサトリ、その方法をいろいろと示して居たのである。**（次号カムナガラのミチ、アマウツシ参照）

▼カタカムナ人の、スナホな、スコヤカな直感の世界に親しんで居ると、例へば、この「食」や「性」の問題に関しても、どうして後代人は、こうも歪曲してしまったのか！　カタカムナ人が、他の生物に無いすぐれた直観により、人間として最高レベルの在り方を示して居るのに対し、現在の人類はどの動物よりも植物よりも堕落し、今や、生物の本来性を逸脱する限極に達したように思はれる。人類の滅亡の近いことを警告する声が、高いのもムリはない。

カタカムナ人にとって、男女の性の配偶は、アマの相似象であり、アマによって授けられた、最高のイククヒツヌクヒである。彼らは、それをスナホに活用することにより、充分にアマウツシをうけ、長い、豊かな人生を楽しみ、肉体的にも、精神的にも、人間のもちうる、最高度の能力を、発揮し得たの

であった。殊に彼らの「性」に関する心情は、現代人と全く異って居るので、それを、「神聖」とか「厳粛」とか「大らか」とかと、ウカツに形容すると、もう後代人的な感覚の歪みが加って、カタカムナ人の気持を、ありのままに現はす言葉ではなくなってしまふのである。現代人一般は、「性」と言へば、直ちに、交接交合等の行為を連想し、プラスエントロピーの満足にふける事のみと思って居る為に、なまじ教養ある、マジメな人ほど、猥褻感をもって、忌むべき、秘事のように誤解してしまった。そして、それを「獣的行為」などと称するが、これは、トンデモない思ひ違ひである。人間以外の生物は、決してそのような倒錯した行動をしては居ない。獣達にも、本能にしたがふ秩序があって、交尾期があり、それ以外のときは、夫婦親子は、静かな自由な姿で、マイナスエントロピーの性の交換をして暮して居る。人間だけが、生物としてのマトモなカンを失ひ、生き方に「自然サ」を欠き、それをしも「進化」と思ひ違へて居る。今日の、「食」と「性」の甚しい混乱、公害問題の深刻化をみるにつけ、少くとも、カタカムナ人の、食と性に対する見解だけでも、現代の人々に知ってもらひたいと思はれる。

## （十四）元素の種類とその構成を示すカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ

フ　フッ　フッ
アメノミクマリ　ミナカヌチ
タカミ　カムミ　ムスビヌシ
アワナギ　ツラナギ
ア　マ　ナ　ク　ニ
アナ　マク　クニ
ウキフツミ　アメノヒトツネ
ヒフミヨイ
マワリテ　メグル　カタカムナ

〈フ　フッ　フッ〉
とは、蒸気の吹き出す音であり、エネルギーを抽象したヒビキである。
〈アメノ　ミクマリ〉
は、「始元量アメの粒子が、多数集合して融合し、濃密になって居る状態」を表はすヒビキである。これは現象の粒子ではないから、目に見ることはできない。相似象としては、原子核に当るもので、カタカムナではこれをアマナと言ひ、アマの出先機関（名代）のように、物質

（クニ）の中に入りこんで、現象の物質をつくる原子核になって居ると観じたのである。

〈ミナカヌチ　タカミ　カムミ　ムスビヌシ〉

とは、ミナカヌチ、則ち、粒子の中に潜在するアメノミクマリ（アマナ）は、目にみえるもの、則ち「アカ」に当る「タカミ」や、目にみえぬ潜象、則ち「アヤ」に当る「カムミ」を現象させる主体、則ち「ムスビヌシ」である、といふ意味である。ヌシとは、前出の如く「目にみえぬ示し」の意で、則ち、アマナが中心核となって、物質や生命質が形つくられ、生命が保たれる、といふ直観である。ヌチとは、それが目に見えぬ（ヌ）潜象の持続（チ）であるといふ思念。

〈アワナギ　ツラナギ〉

とは、目にみえないアメの粒々が、つらなって集合し、泡がたくさんついて居るような状態を表はして居る。ナギとは粒子の意である。則ちアマナによって、カブシヌ、ウキフヌ、つまり電子、中性子、陽子等の粒子が、それぞれのクニ（原子）を構成してゆく有様を表はして居る。

〈アマナクニ〉

とは、始元量アマの名代をして居るアマナのクニ、則ち原子核に当る存在であり、目に見えない、前記のアメの集合系（アメノミクマリ）を指すのである。

〈アナマククニ〉

とは、「アナ（原子核に当る）を巻いて居る粒々の意であり、「アマナクニ」から出る諸粒をさすのである。アマのアナの相似象として、アマナを又アナともいふ。

〈ウキフ　ツミ　アメノヒトツネ〉

ウキフツミとは、「ウキフの個々のミ」、則ち、現代用語の陽子、中性子等の粒子に当るもの、個々の単位の集まり（ツミ）を意味し、アメノヒトツネとは、「ヒトツの根」則ち、いづれも始元量アメの同根である意、言ひかへれば「相似象」といふ意味である。

〈ヒフミヨイ　マワリテメグル　カタカムナ〉

とは、カタカムナ図象からつくり出した、声音符号を表はすヒビキである。則ち、「ア」「マ」「ナ」「ク」「ニ」と、「アナ」「マク」「クニ」といふ声音を、図象文字に示せば、そのカタチが、クニ、則ち元素の原子の、構成の単位（ウキフのツミ）を意味する、という示唆である。

そこで（十四）のカムヒビキは、次のような意味を表明して居ることになる。

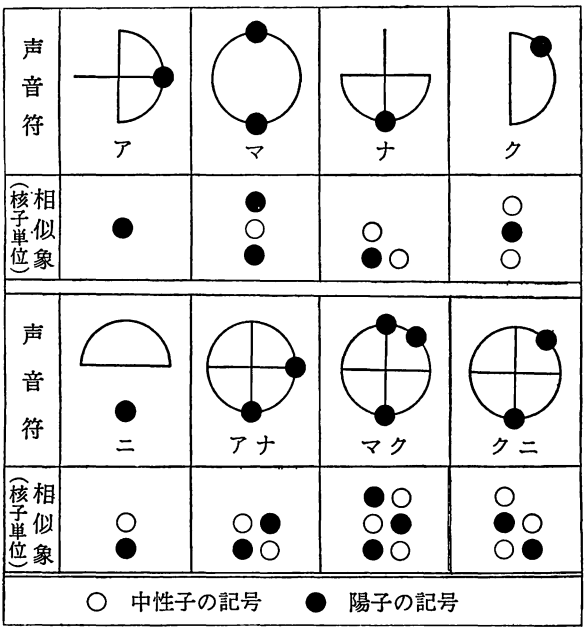
『原子の核となる、アマナクニから生産される核子、則ち、陽子と中性子等の結合系（ウキフツミ）は、カタカムナ声音符の、「ア」「マ」「ナ」「ク」「ニ」並びに、声音符を綴り合せた、「アナ」「マク」「クニ」の図象符の象（カタチ）と相似象である。』

といふ事は、例へば、「ア」といふ声音符のカタチは、陽子一個の水素の原子の構成と、ヒ

トツカタ（相似象）であり、「アナ」の図象符のカタチは、陽子二個中性子二個の、ヘリウム核とヒトツカタである。則ち、「ア」「マ」「ナ」「ク」「ニ」、「アナ」「マク」「クニ」の声音符のカタチに従って、元素原子の種類が構成される、といふ事を啓示したヒビキである。言ひかへると、始元量アメの融合したエネルギー（位置エネルギー）の集団が、アマナクニ、則ち原子核に当る存在であること。そして、核的存在の、位置エネルギー集団が生産する、陽子、中性子の結合系は、カタカムナ声音符の、「ア」「マ」「ナ」「ク」「ニ」並びに、「アナ」「マク」「クニ」と相似象であること、又、その相似象の数量に従って、いろいろな元素の原子が構成されること、以上のような、原子核の物理に関する、驚くべき洞察の直観が示されて居たのである。私達は、この啓示に従ひ、カタカムナ声音符の相似象を想定して、科学で判明して居る原子の種類を参考に、別表を作成した。同位元素の位置とか、正反性の原子性質などが、その表から考察する事が出来る。これらは、現代科学で明らかになって居るものと、ほゞ完全に一致する上に、科学で未発見のものも含まれて居る。

上古代には、水素・ヘリウム等といふ語は無かったが、もろもろのクニ（元素）の構成が、ア、マ、ナ、ク、ニ、アナ、マク、クニ、といふ声音符と相似象であり、原子核は潜象のアメノミクマリである、といふ洞察があったのである。これは、真に驚嘆すべき事である。しかし、どうして彼らが、それをみぬいたか？　は、わからない。

カタカムナ声音符の相似象による元素表




**▶元素表のみかた**　水素は原子番号(1)，核子数は陽子１個，性質は正。カタカムナでは「ア」１個である(次頁参照)。重水素になると，原子番号は変らぬが，核子が２個（中性子が１個入る)，性質は反，カタカムナでは，「ニ」が１個である。原子番号(2)のヘリウムは，陽子２個中性子１個。カタカムナでは「マ」１個である。同位元素の核子数４個のヘリウムは，陽子２個中性子２個で，カタカムナでは「アナ」１個，則ち上古代語のアナはアルファ粒子とよばれるものであることがわかる。又，一般に，原子核はアマナに，中性子陽子はウキフツミに当り，ウキフの単位に，アマナクニ，アナ，マク，クニがある。

| 元素名 | 原子番号 | 核子数 | 性質 | 単位名と単位数 |
|---|---|---|---|---|
| H 水素 | No. 1 | 1 | 正 | (ア)1 |
| D 重水素 | 〃 | 2 | 反 | (ニ)1 |
| He ヘリウム | No. 2 | 3 | 反 | (マ)1 |
| 〃 | 〃 | 4 | 正 | (アナ)1 |
| 〃 | 〃 | 5 | 反 | (クニ)1 |
| Li リチウム | No. 3 | 6 | 反 | (マク)1 |
| 〃 | 〃 | 7 | 正 | (アナ)1 (ク)1 |
| Be ベルリウム | No. 4 | 8 | 正 | (アナ)2 |
| 〃 | 〃 | 9 | 反 | (アナ)1 (クニ)1 |
| B ホウ素 | No. 5 | 10 | 反 | (アナ)2 (ニ)1 |
| 〃 | 〃 | 11 | 正 | (アナ)2 (ク)1 |
| C 炭素 | No. 6 | 12 | 正 | (アナ)3 |
| 〃 | 〃 | 13 | 反 | (アナ)2 (クニ)1 |
| N 窒素 | No. 7 | 14 | 反 | (アナ)3 (ニ)1 |
| 〃 | 〃 | 15 | 正 | (アナ)3 (ク)1 |
| O 酸素 | No. 8 | 16 | 正 | (アナ)4 |
| 〃 | 〃 | 17 | 反 | (アナ)3 (クニ)1 |
| 〃 | 〃 | 18 | 正 | (アナ)3 (ク)2 |
| F フッ素 | No. 9 | 19 | 正 | (アナ)4 (ク)1 |
| Ne ネオン | No. 10 | 20 | 正 | (アナ)5 |
| 〃 | 〃 | 21 | 反 | (アナ)4 (クニ)1 |
| 〃 | 〃 | 22 | 正 | (アナ)4 (ク)2 |
| Na ナトリウム | No. 11 | 23 | 正 | (アナ)5 (ア)3 |
| Mg マグネシウム | No. 12 | 24 | 正 | (アナ)6 |
| 〃 | 〃 | 25 | 反 | (アナ)5 (クニ)1 |
| 〃 | 〃 | 26 | 正 | (アナ)5 (ク)2 |
| Al アルミニウム | No. 13 | 27 | 反 | (アナ)4(マク)1(クニ)1 |
| Si シリコン | No. 14 | 28 | 正 | (アナ)7 |
| 〃 | 〃 | 29 | 反 | (アナ)6 (クニ)1 |
| Si シリコン | 〃 | 30 | 正 | (アナ)6 (ク)2 |
| P リン | No. 15 | 31 | 正 | (アナ)5(マク)1(クニ)1 |
| S 硫黄 | No. 16 | 32 | 正 | (アナ)8 |
| 〃 | 〃 | 33 | 反 | (アナ)7 (クニ)1 |
| 〃 | 〃 | 34 | 反 | (アナ)6 (クニ)2 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 〃 | No. 16 | 36 | 正 | (アナ)6 (ク)4 |
| Cl | 塩素 | No. 17 | 35 | 反 | (マク)5 (クニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 37 | 正 | (マク)4 (ア)1 (ク)4 |
| A | アルゴン | No. 18 | 40 | 反 | (アナ)6 (クニ)2 (ク)2 |
| | 〃 | 〃 | 38 | 正 | (アナ)8 (ク)2 |
| K | カリウム | No. 19 | 39 | 正 | (アナ)9 (ク)1 |
| | 〃 | 〃 | 40 | 反 | (アナ)8 (ク)2 (ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 41 | 正 | (アナ)8 (ク)3 |
| Ca | カルシウム | No. 20 | 40 | 正 | (アナ)10 |
| | 〃 | 〃 | 42 | 正 | (アナ)9 (ク)2 |
| | 〃 | 〃 | 43 | 反 | (アナ)8 (ク)2 (クニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 44 | 反 | (アナ)8(マク)1(クニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 46 | 正 | (アナ)7 (ク)6 |
| | 〃 | 〃 | 48 | 正 | (アナ)6 (ク)8 |
| Sc | スカンジウム | No. 21 | 45 | 正 | (アナ)6 (ク)5 (マク)1 |
| Ti | チタン | No. 22 | 47 | 反 | (アナ)9 (クニ)1 (ク)2 |
| | 〃 | 〃 | 48 | 正 | (アナ)9 (ク)4 |
| | 〃 | 〃 | 49 | 反 | (アナ)8 (ク)5 (ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 50 | 正 | (アナ)8 (ク)6 |
| V | バナジウム | No. 23 | 51 | 正 | (アナ)3 (マク)4 (ク)5 |
| Cr | クロム | No. 24 | 50 | 反 | (アナ)10 (クニ)2 |
| | 〃 | 〃 | 52 | 正 | (アナ)10 (ク)4 |
| | 〃 | 〃 | 53 | 反 | (アナ)9 (ク)4 (クニ)1 |
| Cr | クロム | 〃 | 54 | 正 | (アナ)9 (ク)6 |
| Mn | マンガン | No. 25 | 55 | 正 | (マク)6 (ク)6 (ア)1 |
| Fe | 鉄 | No. 26 | 54 | 反 | (アナ)9 (マク)2 (マ)2 |
| | 〃 | 〃 | 56 | 正 | (アナ)8 (マク)2 (ク)4 |
| | 〃 | 〃 | 57 | 反 | (アナ)9(マク)2(クニ)1 (ク)1 |
| | 〃 | 〃 | 58 | 正 | (アナ)7 (マク)2 (ク)6 |
| Co | コバルト | No. 27 | 57 | 反 | (アナ)7(マク)3(クニ)1 (ク)2 |
| | 〃 | 〃 | 58 | 正 | (アナ)9 (マク)3 (ク)1 (ア)1 |
| Ni | ニッケル | No. 28 | 59 | 反 | (アナ)8 (マク)3 (ク)3 |
| | 〃 | 〃 | 60 | 正 | (アナ)8 (マク)2 (ク)5 (ア)1 |
| | 〃 | 〃 | 61 | 反 | (アナ)8(マク)2(クニ)1 (ク)4 |
| | 〃 | 〃 | 62 | 正 | (アナ)8 (マク)2 (ク)6 |
| Cu | 銅 | No. 29 | 63 | 正 | (アナ)11 (ク)6 (ア)1 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 銅 | No. 29 | 64 | 反 | (アナ)11 (ク)6 (ニ)1 |
| Zn | 亜鉛 | No. 30 | 65 | 反 | (アナ)11 (マク)1(ク)5 |
| | 〃 | 〃 | 66 | 正 | (アナ)12 (ク)6 |
| | 〃 | 〃 | 67 | 反 | (アナ)11 (クニ)1(ク)6 |
| | 〃 | 〃 | 68 | 正 | (アナ)11 (ク)8 |
| Ga | ガリウム | No. 31 | 69 | 反 | (アナ)7(マク)3(クニ)1 (ク)6 |
| | 〃 | 〃 | 71 | 正 | (アナ)7 (マク)2 (ク)10 (ア)1 |
| Ge | ゲルマニウム | No. 32 | 70 | 反 | (アナ)12(クニ)2(ク)4 |
| | 〃 | 〃 | 72 | 正 | (アナ)12 (ク)8 |
| | 〃 | 〃 | 73 | 反 | (アナ)11 (ク)8 (クニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 74 | 正 | (アナ)11 (ク)10 |
| As | ヒ素 | No. 33 | 75 | 正 | (アナ)6 (マク)4 (ク)9 |
| Se | セレン | No. 34 | 76 | 正 | (アナ)13 (ク)8 |
| | 〃 | 〃 | 77 | 反 | (アナ)12(クニ)1(ク)8 |
| | 〃 | 〃 | 78 | 正 | (アナ)12 (ク)10 |
| | 〃 | 〃 | 80 | 反 | (アナ)10(クニ)2(ク)10 |
| | 〃 | 〃 | 82 | 正 | (アナ)10 (ク)14 |
| Br | 臭素 | No. 35 | 79 | 正 | (マク)8 (ク)10 (ア)1 |
| | 〃 | 〃 | 81 | 反 | (マク)8 (ク)11 |
| Kr | クリプトン | No. 36 | 82 | 正 | (アナ)13 (ク)10 |
| | 〃 | 〃 | 83 | 反 | (アナ)12(クニ)1(ク)10 |
| | 〃 | 〃 | 84 | 正 | (アナ)11(ク)10(クニ)2 |
| | 〃 | 〃 | 86 | 反 | (アナ)10(ク)12(クニ)2 |
| Rb | ルビジウム | No. 37 | 85 | 反 | (アナ)11(ク)12(マ)1 (ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 87 | 正 | (アナ)11 (ク)14 (ア)1 |
| Sr | ストロンチウム | No. 38 | 84 | 反 | (アナ)12 (マク)2(ク)8 |
| | 〃 | 〃 | 86 | 正 | (アナ)14 (ク)10 |
| | 〃 | 〃 | 87 | 反 | (アナ)12(マク)1(ク)11 |
| | 〃 | 〃 | 88 | 正 | (アナ)13 (ク)12 |
| Y | イットリム | No. 39 | 89 | 正 | (アナ)11(マク)2(ク)11 |
| Zr | ジリコニウム | No. 40 | 90 | 反 | (アナ)14(ク )2 (ク)8 |
| | 〃 | 〃 | 91 | 正 | (アナ)13 (ク)13 |
| | 〃 | 〃 | 92 | 正 | (アナ)14 (ク)12 |
| | 〃 | 〃 | 94 | 反 | (アナ)12(マク)6(クニ)2 |
| Nb | ニオブ | No. 41 | 93 | 反 | (アナ)10 (マク)3 (クニ)1 (ク)10 |
| Mo | モリブデン | No. 42 | 92 | 正 | (アナ)15 (ク)10 (ア)2 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | モリブテン | No. 42 | 94 | 正 | (アナ)16 (ク)10 |
| | 〃 | 〃 | 95 | 反 | (アナ)15(クニ)1(ク)10 |
| | 〃 | 〃 | 96 | 正 | (アナ)15 (ク)12 |
| | 〃 | 〃 | 97 | 反 | (アナ)14(クニ)1(ク)12 |
| | 〃 | 〃 | 98 | 反 | (アナ)13(クニ)2(ク)12 |
| | 〃 | 〃 | 100 | 正 | (アナ)13 (ク)16 |
| Tc | チクネチウム | No. 43 | 99 | 正 | (マク)10 (ク)13 |
| Ru | ルチニウム | No. 44 | 96 | 反 | (アナ)9 (マク)6 (ク)8 |
| | 〃 | 〃 | 98 | 正 | (アナ)11 (マク)4 (ク)10 |
| | 〃 | 〃 | 99 | 反 | (アナ)9 (マク)5 (ク)11 |
| | 〃 | 〃 | 100 | 正 | (アナ)10(マク)4(ク)12 |
| | 〃 | 〃 | 101 | 反 | (アナ)9(マク)4(クニ)1 (ク)12 |
| | 〃 | 〃 | 102 | 正 | (アナ)9 (マク)4 (ク)14 |
| | 〃 | 〃 | 104 | 正 | (アナ)9 (マク)4 (ク)16 |
| Rh | ロヂウム | No. 45 | 101 | 反 | (アナ)9(マク)4(クニ)1 (ク)12 |
| | 〃 | 〃 | 103 | 正 | (アナ)9 (マク)4 (ク)14 (ア)1 |
| Pd | パラジウム | No. 46 | 104 | 反 | (アナ)8 (マク)5 (ク)11 (クニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 105 | 正 | (アナ)9 (マク)5(ク)13 |
| | 〃 | 〃 | 106 | 反 | (アナ)8(マク)5(クニ)1 (ク)13 |
| | 〃 | 〃 | 108 | 反 | (アナ)7(マク)5(クニ)1 (ク)15 |
| | 〃 | 〃 | 110 | 反 | (アナ)6(マク)5(クニ)1 (ク)17 |
| Ag | 銀 | No. 47 | 107 | 正 | (アナ)16 (ク)14 (ア)1 |
| | 〃 | 〃 | 109 | 正 | (アナ)16 (ク)15 |
| Cd | カドミウム | No. 48 | 106 | 反 | (アナ)16(マク)2(ク)10 |
| | 〃 | 〃 | 108 | 正 | (アナ)18 (ク)12 |
| | 〃 | 〃 | 111 | 反 | (アナ)16(クニ)1(ク)14 |
| | 〃 | 〃 | 112 | 正 | (アナ)16 (ク)16 |
| | 〃 | 〃 | 113 | 反 | (アナ)15(クニ)1(ク)16 |
| | 〃 | 〃 | 114 | 正 | (アナ)15 (ク)18 |
| | 〃 | 〃 | 116 | 反 | (アナ)13(クニ)2(ク)18 |
| | 〃 | 〃 | 118 | 正 | (アナ)13 (ク)22 |
| In | インジウム | No. 49 | 113 | 正 | (アナ)8(マク)5(ク)17 |
| | 〃 | 〃 | 115 | 反 | (アナ)8(マク)5(クニ)1 (ク)16 |
| Sn | スズ | No. 50 | 112 | 反 | (アナ)18(ク )2(ク)10 |
| | 〃 | 〃 | 114 | 正 | (アナ)18 (ク)14 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | スズ | No. 50 | 115 | 反 | (アナ)16(マク)1(ク)15 |
| | 〃 | 〃 | 116 | 正 | (アナ)17 (ク)16 |
| | 〃 | 〃 | 117 | 反 | (アナ)15(マク)1(ク)17 |
| | 〃 | 〃 | 118 | 正 | (アナ)16 (ク)18 |
| | 〃 | 〃 | 119 | 反 | (アナ)15(クニ)1(ク)18 |
| | 〃 | 〃 | 120 | 正 | (アナ)15 (ク)20 |
| | 〃 | 〃 | 122 | 反 | (アナ)13(クニ)2(ク)20 |
| | 〃 | 〃 | 124 | 正 | (アナ)13 (ク)24 |
| Sb | アンチモン | No. 51 | 121 | 正 | (アナ)7(マク)6(ク)19 |
| | 〃 | 〃 | 123 | 反 | (アナ)7(マク)5(クニ)1(ク)20 |
| Te | テルル | No. 52 | 120 | 正 | (アナ)18 (ク)16 |
| | 〃 | 〃 | 122 | 正 | (アナ)17 (ク)18 |
| | 〃 | 〃 | 123 | 反 | (アナ)16(クニ)1(ク)18 |
| | 〃 | 〃 | 124 | 正 | (アナ)16 (ク)20 |
| | 〃 | 〃 | 125 | 反 | (アナ)15(クニ)1(ク)20 |
| | 〃 | 〃 | 126 | 正 | (アナ)15 (ク)22 |
| | 〃 | 〃 | 128 | 正 | (アナ)14 (ク)24 |
| | 〃 | 〃 | 130 | 正 | (アナ)13 (ク)26 |
| I | ヨウ素 | No. 53 | 127 | 正 | (マク)10 (ク)22 (ア)1 |
| Xe | キセノン | No. 54 | 124 | 反 | (アナ)16(マク)2(ク)16 |
| | 〃 | 〃 | 126 | 正 | (アナ)18 (ク)18 |
| | 〃 | 〃 | 128 | 正 | (アナ)17 (ク)20 |
| | 〃 | 〃 | 129 | 反 | (アナ)16(クニ)1(ク)20 |
| | 〃 | 〃 | 130 | 正 | (アナ)16 (ク)22 |
| | 〃 | 〃 | 131 | 反 | (アナ)15(クニ)1(ク)22 |
| | 〃 | 〃 | 132 | 正 | (アナ)15 (ク)24 |
| | 〃 | 〃 | 134 | 反 | (アナ)13(クニ)2(ク)24 |
| | 〃 | 〃 | 136 | 正 | (アナ)13 (ク)28 |
| Cs | セシウム | No. 55 | 133 | 正 | (アナ)16 (ク)23 |
| Ba | バリウム | No. 56 | 130 | 反 | (アナ)16(マク)2(ク)18 |
| | 〃 | 〃 | 132 | 正 | (アナ)18 (ク)20 |
| | 〃 | 〃 | 134 | 正 | (アナ)15(マク)1(ク)22(ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 135 | 反 | (アナ)15(マク)1(ク)23 |
| | 〃 | 〃 | 136 | 反 | (アナ)15(マク)1(ク)22(ニ)2 |
| | 〃 | 〃 | 137 | 反 | (アナ)14(マク)1(ク)25 |
| | 〃 | 〃 | 138 | 正 | (アナ)15 (ク)26 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| La | ランタム | No. 57 | 139 | 正 | (アナ)16 (ク)25 |
| Ce | セリウム | No. 58 | 136 | 反 | (アナ)16(マク)2(ク)20 |
| | 〃 | 〃 | 138 | 正 | (アナ)18 (ク)22 |
| | 〃 | 〃 | 140 | 反 | (アナ)16(クニ)2(ク)22 |
| | 〃 | 〃 | 142 | 正 | (アナ)16 (ク)26 |
| Pr | プラセオシウム | No. 59 | 141 | 正 | (アナ)18 (ク)23 |
| Nd | ネオジム | No. 60 | 142 | 反 | (アナ)16(マク)2(ク)22 |
| | 〃 | 〃 | 143 | 反 | (アナ)17(マク)1(ク)23 |
| | 〃 | 〃 | 144 | 正 | (アナ)18 (ク)24 |
| | 〃 | 〃 | 145 | 反 | (アナ)17(クニ)1(ク)24 |
| | 〃 | 〃 | 146 | 正 | (アナ)17 (ク)26 |
| | 〃 | 〃 | 148 | 反 | (アナ)15(クニ)2(ク)26 |
| | 〃 | 〃 | 150 | 正 | (アナ)15 (ク)30 |
| Pm | プロメチウム | No. 61 | 143 | 正 | (アナ)19 (ク)22 (ア)1 |
| Sm | サマリウム | No. 62 | 144 | 正 | (アナ)21 (ク)20 |
| | 〃 | 〃 | 147 | 反 | (アナ)19(クニ)1(ク)22 |
| | 〃 | 〃 | 148 | 正 | (アナ)19 (ク)24 |
| | 〃 | 〃 | 149 | 反 | (アナ)18(クニ)1(ク)24 |
| | 〃 | 〃 | 150 | 正 | (アナ)18 (ク)26 |
| | 〃 | 〃 | 152 | 反 | (アナ)16(クニ)2(ク)26 |
| | 〃 | 〃 | 154 | 正 | (アナ)16 (ク)30 |
| Eu | ユーロビウム | No. 63 | 151 | 反 | (アナ)17(マク)1(クニ)1(ク)24 |
| | 〃 | 〃 | 153 | 正 | (アナ)18 (ク)27 |
| Gd | ガドリウム | No. 64 | 154 | 正 | (アナ)19 (ク)26 |
| | 〃 | 〃 | 155 | 反 | (アナ)18(クニ)1(ク)26 |
| | 〃 | 〃 | 156 | 正 | (アナ)18 (ク)28 |
| | 〃 | 〃 | 157 | 反 | (アナ)17(クニ)1(ク)28 |
| | 〃 | 〃 | 158 | 正 | (アナ)17 (ク)30 |
| | 〃 | 〃 | 152 | 反 | (アナ)19(クニ)2(ク)22 |
| | 〃 | 〃 | 160 | 正 | (アナ)16 (ク)32 |
| Tb | テリビウム | No. 65 | 159 | 正 | (アナ)18 (ク)29 |
| Dr | ジスプロシウム | No. 66 | 158 | 反 | (アナ)19(クニ)2(ク)24 |
| | 〃 | 〃 | 160 | 正 | (アナ)19 (ク)28 |
| | 〃 | 〃 | 161 | 反 | (アナ)18(クニ)1(ク)28 |
| | 〃 | 〃 | 162 | 正 | (アナ)18 (ク)30 |
| | 〃 | 〃 | 163 | 反 | (アナ)17(クニ)1(ク)30 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | ジスプロジウム | No. 66 | 164 | 正 | (アナ)17 (ク)32 |
| Ho | ホロミウム | No. 67 | 165 | 正 | (アナ)17 (ク)32 (ア)1 |
| Er | エルビウム | No. 68 | 162 | 反 | (アナ)20(クニ)2(ク)24 |
| | 〃 | 〃 | 164 | 正 | (アナ)20 (ク)28 |
| | 〃 | 〃 | 166 | 反 | (アナ)19 (ク)30 |
| | 〃 | 〃 | 167 | 反 | (アナ)18(クニ)1(ク)30 |
| | 〃 | 〃 | 168 | 正 | (アナ)18 (ク)32 |
| | 〃 | 〃 | 170 | 正 | (アナ)17 (ク)34 |
| Tu | ツリウム | No. 69 | 169 | 正 | (アナ)18 (ク)32 (ア)1 |
| Yb | イッテルビウム | No. 70 | 168 | 反 | (アナ)20(クニ)2(ク)26 |
| | 〃 | 〃 | 170 | 正 | (アナ)20 (ク)30 |
| | 〃 | 〃 | 171 | 反 | (アナ)19(クニ)1(ク)30 |
| | 〃 | 〃 | 172 | 正 | (アナ)19 (ク)32 |
| | 〃 | 〃 | 173 | 反 | (アナ)18(クニ)1(ク)32 |
| | 〃 | 〃 | 174 | 正 | (アナ)18 (ク)34 |
| | 〃 | 〃 | 176 | 正 | (アナ)17 (ク)36 |
| Lu | ルチウム | No. 71 | 175 | 正 | (アナ)18 (ク)34 (ア)1 |
| | 〃 | 〃 | 176 | 反 | (アナ)18 (ク)34 (ニ)1 |
| Hf | ハフニウム | No. 72 | 172 | 正 | (アナ)22 (ク)28 |
| | 〃 | 〃 | 174 | 反 | (アナ)20(クニ)2(ク)28 |
| | 〃 | 〃 | 176 | 正 | (アナ)20 (ク)32 |
| | 〃 | 〃 | 177 | 反 | (アナ)19(クニ)1(ク)32 |
| | 〃 | 〃 | 178 | 正 | (アナ)19 (ク)34 |
| | 〃 | 〃 | 179 | 反 | (アナ)18(クニ)1(ク)34 |
| | 〃 | 〃 | 180 | 正 | (アナ)18 (ク)36 |
| Ta | タンタル | No. 73 | 181 | 正 | (アナ)18(マク)1(ク)35 (ア)2 |
| W | タングステン | No. 74 | 180 | 反 | (アナ)18(マク)2(ク)32 |
| | 〃 | 〃 | 182 | 正 | (アナ)20 (ク)34 |
| | 〃 | 〃 | 183 | 反 | (アナ)19(クニ)1(ク)34 |
| | 〃 | 〃 | 184 | 正 | (アナ)19 (ク)36 |
| | 〃 | 〃 | 186 | 正 | (アナ)18 (ク)38 |
| Re | レニウム | No. 75 | 185 | 反 | (マク)13(クニ)1(ク)34 |
| | 〃 | 〃 | 187 | 正 | (クマ)12 (ク)38 (ア)1 |
| OS | オスミウム | No. 76 | 184 | 反 | (アナ)14(マク)5(ク)33 |
| | 〃 | 〃 | 186 | 反 | (アナ)13(マク)5(ク)34 (ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 187 | 正 | (アナ)13(マク)5(ク)35 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 〃 | No. 76 | 188 | 反 | (アナ)12(マク)5(ク)36(ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 189 | 正 | (アナ)12(マク)5(ク)37 |
| | 〃 | 〃 | 190 | 反 | (アナ)11(マク)5(ク)38(ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 192 | 正 | (アナ)9(マク)6(ク)40 |
| Ir | イリジウム | No. 77 | 191 | 反 | (アナ)9(マク)5(ク)40(ア)3(ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 193 | 正 | (アナ)9(マク)6(ク)40(ア)1 |
| Pt | 白金 | No. 78 | 192 | 反 | (アナ)9(マク)6(ク)38(ア)2(ニ)2 |
| | 〃 | 〃 | 194 | 正 | (アナ)11(マク)6(ク)38 |
| | 〃 | 〃 | 195 | 反 | (アナ)10(マク)6(クニ)1(ク)38 |
| | 〃 | 〃 | 196 | 正 | (アナ)10(マク)6(ク)40 |
| | 〃 | 〃 | 198 | 正 | (アナ)9(マク)6(ク)42 |
| Au | 金 | No. 79 | 197 | 正 | (アナ)19(ク)39(ニ)2 |
| Hg | 水銀 | No. 80 | 195 | 反 | (アナ)21(マク)1(ク)35 |
| | 〃 | 〃 | 198 | 正 | (アナ)21(ク)38 |
| | 〃 | 〃 | 199 | 反 | (アナ)20(クニ)1(ク)38 |
| | 〃 | 〃 | 200 | 正 | (アナ)20(ク)40 |
| | 〃 | 〃 | 201 | 反 | (アナ)19(クニ)1(ク)40 |
| | 〃 | 〃 | 202 | 正 | (アナ)19(ク)42 |
| | 〃 | 〃 | 204 | 正 | (アナ)18(ク)44 |
| Tl | タリウム | No. 81 | 203 | 正 | (アナ)20(ク)41 |
| | 〃 | 〃 | 205 | 正 | (アナ)19(ク)43 |
| Pb | 鉛 | No. 82 | 204 | 正 | (アナ)21(ク)40 |
| | 〃 | 〃 | 206 | 反 | (アナ)19(ク)40(クニ)2 |
| | 〃 | 〃 | 207 | 反 | (アナ)19(ク)42(クニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 208 | 正 | (アナ)19(ク)44 |
| Bi | ビスマス | No. 83 | 209 | 正 | (アナ)14(マク)4(ク)43 |
| | 〃 | 〃 | 210 | 反 | (アナ)13(マク)4(クニ)1(ク)43 |
| Po | ポロニウム | No. 84 | 209 | 反 | (アナ)21(クニ)1(ク)40 |
| | 〃 | 〃 | 210 | 正 | (アナ)21(ク)42 |
| At | アスタチン | No. 85 | 211 | 反 | (マク)14(ク)42(ア)1 |
| | 〃 | 〃 | 212 | 反 | (マク)14(クニ)1(ク)41 |
| Rn | ラドン | No. 86 | 221 | 正 | (アナ)18(クニ)1(ク)48 |
| | 〃 | 〃 | 222 | 正 | (アナ)18(ク)50 |
| Fr | フランシウム | No. 87 | 223 | 正 | (アナ)18(ク)50(ア)1 |
| | 〃 | 〃 | 224 | 反 | (アナ)18(ク)50(ニ)1 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Ra | ラジウム | No. 88 | 225 | 正 | (アナ)18 (ク)51 |
| | 〃 | 〃 | 226 | 正 | (アナ)19 (ク)50 |
| | 〃 | 〃 | 227 | 反 | (アナ)18(クニ)1(ク)50 |
| Ac | アクチニウム | No. 89 | 227 | 正 | (アナ)19 (ク)50 (ア)1 |
| | 〃 | 〃 | 228 | 反 | (アナ)19 (ク)50 (ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 229 | 正 | (アナ)19 (ク)51 |
| | 〃 | 〃 | 230 | 反 | (アナ)18 (ク)52 (ニ)1 |
| Th | トリウム | No. 90 | 231 | 反 | (アナ)19(クニ)1(ク)50 |
| | 〃 | 〃 | 232 | 正 | (アナ)19 (ク)52 |
| | 〃 | 〃 | 233 | 反 | (アナ)18(クニ)1(ク)52 |
| Pa | プロトアクチニウム | No. 91 | 234 | 反 | (アナ)19 (ク)52 (ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 235 | 正 | (アナ)19 (ク)53 |
| U | ウラン | No. 92 | 234 | 正 | (アナ)21 (ク)50 |
| | 〃 | 〃 | 235 | 反 | (アナ)20(クニ)1(ク)50 |
| | 〃 | 〃 | 236 | 正 | (アナ)20 (ク)52 |
| | 〃 | 〃 | 237 | 反 | (アナ)19(クニ)1(ク)52 |
| | 〃 | 〃 | 238 | 正 | (アナ)19 (ク)54 |
| NP | ネプツニウム | No. 93 | 235 | 反 | (アナ)20(マク)1(クニ)1(ク)4 |
| | 〃 | 〃 | 237 | 正 | (アナ)20 (ク)52 (ア)1 |
| | 〃 | 〃 | 239 | 正 | (アナ)20 (ク)53 |
| Pu | プルトニウム | No. 94 | 240 | 正 | (アナ)21 (ク)52 |
| | 〃 | 〃 | 241 | 反 | (アナ)20(クニ)1(ク)52 |
| | 〃 | 〃 | 242 | 正 | (アナ)20 (ク)54 |
| | 〃 | 〃 | 243 | 反 | (アナ)19(クニ)1(ク)54 |
| Am | アメリシウム | No. 95 | 241 | 反 | (アナ)20(マク)1 (クニ)1 (ク)50 |
| | 〃 | 〃 | 243 | 正 | (アナ)20 (ク)54 (ア)1 |
| | 〃 | 〃 | 244 | 反 | (アナ)20 (ク)54 (ニ)1 |
| Cm | キュリウム | No. 96 | 245 | 反 | (アナ)21(クニ)1(ク)52 |
| | 〃 | 〃 | 246 | 正 | (アナ)21 (ク)54 |
| | 〃 | 〃 | 247 | 反 | (アナ)20(クニ)1(ク)54 |
| | 〃 | 〃 | 248 | 正 | (アナ)20 (ク)56 |
| BK | バークリウム | No. 97 | 248 | 反 | (アナ)21 (ク)54 (ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 249 | 正 | (アナ)21 (ク)55 |
| Cf | カリホルニウム | No. 98 | 250 | 正 | (アナ)22 (ク)54 |
| | 〃 | 〃 | 251 | 反 | (アナ)21(クニ)1(ク)54 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ES | アインスタイニウム | No. 99 | 251 | 正 | (アナ)22 (ク)54 (ア)1 |
| | 〃 | 〃 | 252 | 反 | (アナ)22 (ク)54 (ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 253 | 正 | (アナ)22 (ク)55 |
| | 〃 | 〃 | 254 | 反 | (アナ)21(クニ)1(ク)55 |
| Fm | フェルミウム | No. 100 | 252 | 正 | (アナ)24 (ク)52 |
| | 〃 | 〃 | 253 | 反 | (アナ)22(マク)1(ク)53 |
| Md | メンデレヒウム | No. 101 | 255 | 正 | (アナ)24 (ク)53 |
| | 〃 | 〃 | 256 | 反 | (アナ)23 (ク)54 (ニ)1 |
| No | ノーベリウム | No. 102 | 251 | 反 | (アナ)23(ク)51(マク)1 |
| | 〃 | 〃 | 252 | 正 | (アナ)27 (ク)48 |
| | 〃 | 〃 | 253 | 反 | (アナ)26(クニ)1(ク)48 |
| | 〃 | 〃 | 254 | 正 | (アナ)26 (ク)50 |
| Lw | ローレンシウム | No. 103 | 255 | 反 | (アナ)27 (ク)49 |
| | 〃 | 〃 | 256 | 反 | (アナ)26 (ク)50 (ニ)1 |
| | 〃 | 〃 | 257 | 正 | (アナ)26 (ク)51 |
| | 〃 | 〃 | 258 | 反 | (アナ)25 (ク)52 (ニ)1 |

## （十五）　個体発光の物理を示すカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
　キララ　キラ
　クラオ　クラミツ　カムチコリ
　マサト　カグツチ　トヤマツミ
　イハサク　ネサク　イハツツヲ
　フツヌ　イカツチ　ホホムスビ
　ヤクサ　カガヒコ　カガホロシ

〈キララ　キラ〉
は、個体から、螢光又は燐光を、発して居る様を表はすヒビキである。
〈クラオ　クラミツ　カム　チコリ〉

とは、「目に見えない暗いものが満ちて（クラミツ）持続して凝集し（チコリ）真暗な闇（クラオ）の状態を呈して居る」といふ意味で、前出の（十二）のカムヒビキは、物質の結晶が、アマナの行動である事を示し、こゝでは、物質の結晶構造の内部が、真暗な闇の状態であることを表はして居る。

〈マサト　カグツチ　トヤマツミ〉

とは「マが分解・統合して（マサト）、自由にカタチづくられた個々の持続（カクッチ）の、結晶質（トヤマツミ）」といふ意味で、要するに、さまざまの個体物質や生命質のことを表はして居る。則ち、物質の結晶構造は、内部が真暗な闇の状態で、分子が凝集を持続して居るが、それが燐光や螢光を発するのは何故かといふ物理を、次に述べて居る。

〈イハサク　ネサク　イハツツヲ〉

とは物質の内部構造の、結晶の破壊によって、分子がバラバラに分れる様を表現して居る。電気的給合（イハ）の根が分れて（ネサク）個々（ツツ）に四方（ヲ）にバラバラになる意。

〈フツヌ　イカツチ　ホホムスビ〉

とは、バラバラになった正反（イハ）の電気は、瞬間的にひき合って結びつき、光量子を放出して輝くことを表はして居る。言ひかへると、陰電子（サヌキ）と正孔（アワ）とが、衝突的に結合し、四光子に変る現象のことである。光が出るといふ事は、要するに「結晶の破壊現象」

であって、生体としてみれば「代謝」である。消失する代りに、光を放つのである。

〈ヤクサ　カカヒコ　カガホロシ〉

とは、「いろいろな発光の輝きが、次々に現はれる」といふ意味である。物理的には、正反の電子が、発光現象を起すまでの段階に励起されて、光が出るのであるが、その励起状態が止むと、直ちに発光が止むものを「螢光」と言ひ、励起状態が止んでも、なほ発光が持続する場合を「燐光」と言ふ。生物では、生きて居る間光る螢の光と、死んでも光が続く魚の燐光が、よく知られて居る。ホロシとは、今も蕁麻疹をホロセといふように、出現する意である。

すべての物質は、やがて崩壊してアマに還元する。すべての生命質の内部でも、物質が代謝されて、崩壊がつゞいて居る。モノがカタチつくられて居るといふ事は、分子の結合（結晶）によるものであり、それは、正反の電気の結合力によって居る。それが代謝して崩壊し、結合が破れれば、電子は光量子となって光を発する。則ち、自然の螢光や燐光は、「熱を伴はぬ光」として、誰の目にも目立つ例であるが、実は、このことは、すべての物質の崩壊には、必ず伴ふ現象なのである。物質が存在するにも崩壊するにも、みな正反の電気現象に由来して居る。

以上の物理は、カタカムナ人が、人体の背光とか、眼球の輝き、その他諸物質の結晶破壊に基く発光現象、則ちルミネセンスの本質を直観したものであり、このカムヒビキは、そのサトリを示したものである。

▼今までどうして猫や犬の目が光るのか？　キリストの冠光や、仏像の後背が何を意味するか？等、はっきりわからなかったが、我々の人体からも、強弱の差こそあれ、誰でも、たえず光を発して居るわけである。よろこびに満ちて居る時の瞳の輝きや、全身から漂ふその人の雰囲気などは、誰にも感じられるものであるが、白光や後光や光彩を、仏像の囲りに描くのも、又、神秘な心霊現象として、特殊な霊能者や透視能力者らが、見ることの出来るとされて居る光の正体も、このような物理であったと思はれる。なほ、熱を伴はぬ光といふのは、電子の振動が、光の振動数になれば光を発するのである。光のエネルギーを、物質が吸収すれば、分子が回転運動を起して熱になるのであって、光そのものが熱に変ったり、熱が光に変るのではなく、エネルギーの変換である。

さて(十五)のカムヒビキを要約すれば、次のような意味になるであらう。

『物質や生命質は、始元量アマが、自由に統合した結晶質であり、その内部は、目に見えないモノが凝集して、真暗闇の状態に置かれて居る。しかし、その結晶質の分子の結合力（則ちサヌキ、アワの親和力）が破れて結晶が崩壊すれば、結晶に参与して居た正反電子（サヌキ　アワ）等がバラバラになり、その中のいくつかの正反電子が、衝突的に結合し、振動を起して光を発する。則ち、正反電子の励起（振動）によって、発光現象を呈するのである。そして、励起状態が止むと、直ちに発光も止む螢光や、又、励起状態が終った後も、発光現象が残存する、燐

光が認められる。』

## （十六）「心の現象」の物理を示すカムヒビキ

アマカムナ
アマカムヒビキ
　サ　サ　サアー　ア
オキツ　カヒヘラ　　ナギサヒコ
オホヤソ　マガツ　　オキサカル
ヘツナギサヒコ　　ヘツサカル
カヒハリムクロ　　アマナイツ
アマナサカムク　　ココロサカ
オホマトコベラ　　カムナホヒ

「心の現象の物理」とは、「心は、どういふものから現象されるか？　といふ精神現象の物理」

といふ意味であって、一般の心理学や、精神現象の解釈とは、多少異なって居る。

〈サ　サ　サアーア〉

とは、海岸の砂浜に、波が打ち寄せる、磯辺の音のヒビキであり、則ち、波が砂地を馳け上る際に、砂と接触して発する音と、波の水が、砂地の底水に流れ落ちて、消えゆく音とを表はして居る。本来海水は、一応静止の状態に在るものが、地球の動きや、天体の引力によって運動を起し、海岸では、陸地に傾斜する磯波が起きて居る。磯波は、或ひは小波と成り、或ひは大波や怒濤となって打ち寄せる。絶えざる磯波の響は、波水が、底水に吸収されることによって消えてゆき、又、次の響が打ち寄せては消えるといふことの、繰り返へしである。このスガタを表はすのが、サ　サ　サアーア　といふヒビキであり、後述するように、カタカムナ人は、この磯波の響から、心の作用、則ち精神現象の物理を、相似象として直観したのである。

▼**能のハヤシ**　「能」は、日本伝統文化を集大成した芸術の最高峰とみられ、以後の芸能の源（原点）ともみられて居るが、その「マ」といふものには、アマの息吹きのような、この磯波の響が、相似象的に感じられる。大・小鼓、太鼓等のハヤシのカケゴエは、まさに、ハーとか、ホとか、イヤー　イヨーヲンヨー等と、カムヒビキそのものである。それは、いかにも大らかに、静かに、壮重にくり返され、又、リズミカルに響くこともあれば、突如、鏡を裂くような鋭い気迫を放つ響もあり、あるひは又、巨

樹を倒し、海を覆し、火を噴くような烈しさに満ちた響もあって、それはさながら、天然自然のヒビキそのものゝ相似象をあたりに醸しあげて、そこに展開される「能」の舞台をハヤスといふ、人間の考へ得る、最高度の演出として、こころにくく思はれる程のものである。「マ」が抜けては「能」では無い。

〈オキツ　カヒベラ〉

とは、沖の波の静かさを表はした歌詞であるが、物理的には、調和平衡を得た、心の恒常状態を、掛けて表はして居る。

▼オキは沖のことであるが「オキツ」と、オキに個々の意味のツがついて居るのは、オキは海全体の広いもので、波は個々の水が起すといふ気持であらう。波が静まれば、沖は、海本来の、平らなスガタになるわけである。カヒとは、カもヒも、アに同じく、図象文字でみれば、ハジマリのヒトツを表はし、「ヒトツ」に、則ち、「アマに、統合されるカタチ」を意味して居る。ヘラとは、舌ベラ等ともいふように、形が平になって居るものをいふ。オキツカヒベラとは、「海といふものは、平であることがハジマリであり、統合の相（スガタ）であり、恒常の相である」といふ意である。

▼カタムキ　沖の方は平で、岸だけが傾いて居る。この「カタムキ」といふ事が、普通には見過されて居るが、実は、非常に大事な問題で、モロモロの物理現象は、みな、そこから始まる、と言ってもよいのである。これが、カタカムナ人の感じ方であった。カタムキには必ず「反」の力が働いて、復元しよ

うとするのが、アマからうけた本来性である。そもそも、アマのウヅメ（渦巻流）も、アマのカタヨリから生じ、サヌキアワの電気性の正反も、カタヨリから始まる。およそ天然の現象も自然の現象も社会現象も、亦、病気や精神の現象も、みな、この相似象である。後出のように、アマナ（原子核に当る）のカタヨリから、骨の分極も始まる……。

最初は極めて僅かなカタムキから始まるので、人間の場合も意識に上らず、せいぜい「何となく、どこか、ヘンだ」といふような、気分的なものである。しかし、意識に上らぬ僅かなカタムキにも、「直感」には、パッと、『平衡感覚的』に気づくものがあり、無意識裡に、バランスを保たうとする。それが健全なスガタである。（サヌキ（男性）とアワ（女性）がひきあふのも、同性が反発するのも、すべてこの、アマナの行動である。）ところが、現代人は、この平衡感覚的な直感が劣化し、カタムキが甚しくなるまで気付かず、快・不快の意識があらはれてから妄動して、心身のストレスを起して居る。

個体でも社会現象でも、カタヨリがひどくなり、分極が固定すれば、電気欠亡部位は、「癌的病状」を呈することになる。

▼ムリな精神修養を強ひるよりも、イヤシロチや、性の交換栄養等によって、電気を充分にあたへつゝ、カン（直感）を鍛へることが、最も能率のよい、最高の修養法であり、何よりの健康法である、といふ所以は、こゝにもあるわけである。

〈ナギサビコ〉

とは、ナギサ、則ち波打ち際の響が、山彦のように伝はり続く意、歌詞に掛けられた物理的意味は、「粒子（ナギ）が、分裂（サ）を持続して居る」といふ事で、分極状態を意味して居る。

〈オホヤソ　マガツ〉

とは、古事記などに、「大八十禍津神」として出て居るものの語源である。則ち、個々の禍ひの大部分を支配して居る神名が示すように、「荒狂ふ怒濤」を表はす意味と、「怒り狂ふ心の状態」を表はす意味とが、掛けられて居る。マガツは「曲がごと」等と言ふように、禍ひの意、つまり正常でない状態である。

〈オキ　サカル〉

とは、沖の荒れる相（サマ）を表はし、物理的には、立体的に生じた（オキ）、分裂の（サ）、カタチ（カ）が、定着的に固定（ル）した相、則ち「分極状態」を表はして居る。沖が台風や季節風等で荒れて、「オキツカヒヘラ」でなくなった場合である。

〈ヘツ　ナギサビコ〉

とは、ナギサビコがヘツになること、則ちヘツとは、平になる意味である。つまり、波打ち際の響が消えて、平に静まる状態であり、掛けられた物理的意味は、粒子の分極が消滅し、恒常の状態（オキツカヒベラ）に復元する意味である。

〈ヘツサカル〉

とは、沖の荒れた状態（オキサカル）が静まって、平になる（ヘツ）といふ意味で、物理的には、分極（サカル）が、調和平衡の恒常の状態（ヘツ）に復元する意味である。

〈カヒハリ　ムクロ〉

とは、甲皮張（カヒハリ）骸（ムクロ）　則ち、「骨膜と骨」の意である。骨膜とは、骨を覆ふ膜で、一般には、そこに炎症が起って水がたまるとか、骨膜炎になるといふ位の関心しかないが、カタカムナ人は、カヒハリ・ムクロと、精神現象との、重要な関係を観じて居たのである。

〈アマナ　イツ〉

アマナとは、ここでは骨の細胞の原子や、骨膜物質の細胞の原子の、原子核に当る。イツとは、電気粒子（正反性）の意味である。則ち、原子核内には陽子があって陽性電気を帯び、外側をまわる電子は陰電子を帯びて居る事は、今の原子物理でも知られて居る。

〈アマナ　サカムク〉

とは、そのアマナ（原子核に当る）が、正反に（サカ）片寄り向く（ムク）といふ意味である。物理的には、骨が誘電物質（絶縁体）である為に、原子が、核の片寄りによって、電気的に分極し、核磁気が、核の周囲に発生するといふ事である。

▼これは、現代物理にはまだ無い、カタカムナ人の驚くべき直感である。人体は「半導体」であるが、骨とか、毛髪等は、「誘電質」である為に、「分極」を起す。わかりやすいものでいへば、例へば髪の毛を梳かして居ると、パチパチと帯電する現象がみられるのは、毛髪が絶縁体である為に、電気が流れず、プラスサイドとマイナスサイドに分極して、マイナスサイドが高い電荷をもち、プラスサイドとの間に大きなカタヨリが出来る。そのようにして毛髪の一部に発生した高い電圧が、瞬間的に空中に流れ、許容力の大きな空間電荷の中に吸収されて毛髪の分極は解消する。その際、パチパチといふ音をたてるのである。骨も、誘電質である為に、骨の原子の原子核（陽電気を帯ぶ）が、何かの理由で中心を離れて、一方にカタヨルと、原子核の周りをまわって居た陰電子（陰性電気を帯びるサヌキ）は反対側にカタヨリ、則ち分極を起す。原子内の正反の電気が分極すると、原子内に電荷が生じ、磁場が、原子核のまわりに発生する。電子は回転して居る為に、回転運動の磁気となり、原子はクルクルとまわり出す。これが「オホヤソマガツ」の状態を起すわけである。

〈ココロ　サカ〉

とは、「心の作用に、正反性（サカ）が、分裂的に現はれるのは、物理的には、このような、電気の分極現象である」といふ事を表はして居る。つまり、骨の分極現象は、心が平衡を失ひ、甚しい動揺を生じて居る状態と、対応して起って居る、といふ直観である。例へば、怒り狂ふ心の底には虚ろなむなしさが、歓喜の極みには悲哀が伴ふような、極端な大波の状態から、日

常的な愛と憎、好と嫌の如き、小波の状態に至るまで、さまざまの精神現象は、前述のような、骨の分極現象の程度に対応して居る、と観じたのである。

〈オホマ　トコベラ〉

とは、骨原子の分極の電荷が、骨を覆って居る骨膜の、膜原子の電荷と共振し、電流や電圧を高めると共に、次第に、内外の環境の、空間電荷の共鳴によって、吸収的に消失する、という物理を表現したヒビキである。

▼言ひ換へれば、分極がなければ、電荷、は生じない。(良導体や半導体は電気を流してしまふから分極が起らない。絶縁体、又は誘電質とよばれる不良導体は、電気を流すことが出来ぬ為に、電気のカタヨリ、則ち分極を起すのである)骨は誘電質であるから、分極によって電荷を生じ、その電荷によって回転磁気を生じ、電荷はグルグル回り出す。これが、「オホヤソマカッ」で、怒り狂ふ大波のような精神状態を起して居るときの、骨の現象であるといふ直観である。

そして、このような骨の状態は、当然、骨を覆って居る骨膜に、正反性の電気現象を誘発し、拡大共振を起す。共振すれば電荷を増し、それによって勢を得てエネルギーはふえる。(心はますますオホヤソマガツで荒れ狂ふ)ところで、もしエネルギーがふえなければ、分極状態は、骨の中にとどまったまゝ中々離れない。(心は、いつまでも気分が晴れず、憂鬱状態をくりかへす)しかし、共振を起してエネ

ルギーを増し骨から骨膜に共鳴吸収され出すと、はじめは拡大共振を起すが、次第に膜外の環境、則ち、身体の内の骨のまわりの空間や、肉や血や皮等の組織から、更に身体の外の空間の電荷に、次々に共鳴を起させ、吸収されてゆく事によって、エネルギーは消失してゆくのである。吸収されたエネルギーは、おほむね熱になる。そして、電荷がとれれば、自然に磁気も消え、オホヤソマガツの状態もおさまる。(心も、怒り心頭に達して、カッカとする状態が、無限に続くわけはなく、興奮はやがて静まり、熱も冷める)。カタカムナ人は、このように、心の状態の物理を観じて居たと思はれる。

実際に我々の経験でも、カッと怒りを発散したり、泣いたりしてしまへば、あとはかへって、サッパリするが、そこまでゆかず、いつまでも心が正反千々に分裂して、陰鬱な状態を続けることがある。性格にもよるが、早くサッパリする為には、どんどんエネルギーが高まって、分極が早くとれなければならぬ。いつまでもモヤモヤして居るのは、エネルギーが不足で、骨が分極状態にとどまり、なかなか解消できない故と考へられる。この状態が甚しくなれば、精神病に陥る。これを平常状態にもどす為には、修養の低度の人は、大てい「ヤツ当り」とか「ヒステリー」とかを発して、電荷のエネルギーを増し、共鳴吸収を促すといふ、自分勝手な自衛手段に訴へるから、周囲は迷惑するが、本人は痛まらず、案外健康的である。又、充分にコントロールをわきまえた達人なら、例へばより高次の関心事へと昇華させるとか肉体を激しく使って転化させるとか、そもそも僅かなカタムキの間に気付いて復元し自身も周囲も傷つけない。しかし、なまじ「修養」を志すような努力家は、他に向って怒りや悩みをブチまけるようなマネは出来ず、従って、骨はいつまでも痛みつづけて、当然、五臓六腑に悪影響をもたらし、

胃・腸・肝・腎・膵等に電気欠亡状態が続き、悪性の癌などの因となる事が考へられる。

〈カム　ナホビ〉

とは、このようにして、心身は、もとの恒常安定の状態に復元する、といふ意である。

以上の如き個々の歌詞の意味を、総合して判断すれば、（十六）のカムヒビキに示された「心の物理」は、次のようになるであろう。

『カタカムナ人は、磯波の響と、その現象が、人間の心の現象と、その生理に、相似することを直観した。彼らのサトリを要約すれば、先づ磯波は、海水の傾斜（カタムキ）に基いて起ること。波個個の水が、砂粒子を動かして、音を発して居ること。波が、砂底の水に流れ落ちれば、さわがしい音は消え、地下を通して、波の水は、大海の水に還元し、海水は、恒常の静けさに復元すること、等である。

次に、心の現象は、現代人一般の想像とは大いに異り、人骨と骨膜に於る、電気的現象であることを直観したのである。人骨は主として石灰質で構成されるが、電気的性質としては誘電質である。そこで、骨や骨膜の状態が、カムヒビキの歌詞に示された内容と、どのような関係に成るかを、もう一度吟味してみよう。

〈オキツ　カヒベラ〉

といふ状態は、恒常の状態であるので、骨は電荷を現はさない、電気絶縁の状態に置かれ、骨膜の膜電位だけが、精神を支配して居る状況と考へられる。

〈ナギサビコ〉

といふ状態は、粒子が分裂して居るカタチの意味であるが、骨物質の原子に於て、核の片寄りによる、電気的プラス、マイナスの極が出来る。所謂「誘電分極の状態」に在ることであり、骨が電荷をもつ状況である。

〈オホヤソ　マガツ〉

とは、荒れ狂ふ意味の状態である。そのことは、骨の誘電分極により、骨物質原子の核（アマナ）の周りに起きる、核磁気エレメントが、回転運動の状態に在り、それに伴って、誘電分極の電荷が、激しく移動運動を起す状況である。心は怒りの状態である。

〈オキ　サカル〉

とは、立体的に分れる意味であり、骨膜が膜電位を発生して、骨に接する膜面と、膜の外面とは、正反性の電荷をもつ状態になる。心は、正反性に動揺する心理状態である。

〈ヘツ　ナギサビコ〉

とは、粒子分裂が消滅する事によって、恒常の状態に復元する意味である。そのことは、骨の誘電分極の状態が消失して、恒常の状態に成ることを示して居る。

〈ヘツ　サカル〉

とは、調和平衡を保つ意味であり、骨の電荷が、空間電荷に共鳴吸収される状態を示して居る。則ち、安定した心の状態と言へる。

〈アマナ　イツ〉

とは、原子核（アマナ）と、核外電子（サヌキ）とが、骨原子の、正反性の電気現象に参与する意味である。

〈オホマ　トコベラ〉

とは、骨の分極電荷が、骨膜の膜電荷と共振し、電気エネルギーを増すと共に、身体内外環境の、空間電荷の共鳴吸収によって、消失する現象を直観したものである。

〈カム　ナホビ〉

とは、本来の恒常状態に復元しようとするポテンシャル能力があり、心も安定状態に直る意。』

以上の物理は、現代科学に於ては、未解明の領域であり、従って、このカムヒビキの内容の、正邪を批判することは出来ない。一般的通念では、心は頭脳細胞が司ることになって居る。然し、私達は、直観に優れた、カタカムナ人のサトリを重要視して居る。我々が、無意識に使ふ言葉の中に、「骨を折る」といふ言い方で、心を配って苦労する意味を表はして居たり、「粉骨砕身」とか「骨身を惜しまず」とか「恨み骨髄に徹す」とか「骨をけずる」とか、「骨ま

で愛す」とか又、「骨惜しみ」等といふ表現が使はれ、又、「老骨」といふ言い方は、年をとって、骨まで硬化した感じを出して居る……。

カタカムナ人の直観した「心の物理」を、専門の方達が、実験により確められるよう、「お骨折り」をお願ひしたい。

昭和四十七年二月二十四日

楢崎皐月述

文責　宇野

# 五、余　論

**1、カタカムナ文明と、他の古代文明との違ひ**　現代人の一般常識では、孔子の教へや、釈迦の悟りや、キリストの救ひ、等と称ばれる精神的なものと、自然科学技術の求める智識や真理とは、別系統の学問とされて居る。しかし、カタカムナ人のサトリは、物心一貫して居る。又、カタカムナの文明は、多くの民族を攻め従へ、巨大な宮殿や城塞を残した、所謂、ペルシヤ文明、ギリシヤ文明、エジプト文明、シナ文明等々とよばれる種類の文明とは、全く異るものである。それは、孔子が、人間の真の「文明」として憧憬し、賞讃した、「堯舜の世」に比すべきものであり、アソカ王が志した、「人天交接」のサダルマ（正法）の実現といふべきものであったと思はれる。「それ程優秀なカタカムナの文明とは、一体いつ頃のもので、それが、どうして後代に伝はらずに、古事記等の神話におきかへられてしまったのか？」おそらく、この疑問が、実証的に説明されぬ限り、一般人は、「カタカムナ」を受け容れ難いであらう。将来研究が進めば、「カタカムナ」の物的証拠も発見されるであらうが、直観の劣化した後代人は、本モノとニセモノを判断する為には、証拠物件がそろはねばならぬと思ひこんで居る。従って、

八世紀の壁画が発堀されゝば大さわぎをするが、それに驚く位なら、もっと驚かねばならぬ筈の事実に出逢って居ても、たとへば、長い間の「三種の神器」のナゾにつながる、カタカムナの文化の内容に対しても、その信憑性を、みわけるだけの「カン」が無い。おそらく、もし外国人から、その事を指摘されるとか、三種の神器のナゾを質問されるとかすれば、少しはピンとくるであらうが、何といっても、「科学的な証拠がない限り、信じられぬではないか？　それ程優秀なカタカムナ人が、どうして天孫族(?)に滅ぼされたのか？　滅ぼされるようでは優秀ではないではないか?」等といふ反論をもち出すのが、現代人的な思考のクセである。ものごとを自分自身の直感の勘考（カン）で判断することの出来ぬのが、一般の現代人の弱みである。

他民族を改め亡ぼし、捕虜を働かせて豪華な王宮をつくるような、則ち弱肉強食の闘争に強い種族が、地球上に勝ち残って、現代の社会を築き、現代の科学体系をもつに至ったのであって、私達の祖先のカタカムナ人は、強力な征服者の出現の前には、もろく潰されてしまふ、いはば善良な、静穏な種族であったと想はれる。

こうした傾向は、人類のみならず、猿などの世界にもみられる現象で、凡そ生物は、競争に勝たなければ生存を保つことはできず、意欲的でない、オトナシイ種族は、闘争には弱く、亡びやすいものである。

しかし、人間の場合の闘争は、「知性」の発達に応じた複雑さが加はり、武力や智力や意欲に強いだけが、人間としての優秀さか？　といふ事には、大いに疑問がある。

カタカムナ人的な静穏な善良さとは、所謂栄養失調や智能の低い為の、無気力なオトナシサとか、ムリな忍従のスガタとは、本質的に違ふものである。賢愚強弱は、外見によっては測り難い。真のヤサシサには、カシコサが伴ふものであり、真にオトナシク従ふには、真の根強さや、きびしい鍛へがなければ、生存を保つことは出来ない。

人間の才能とか、天才とかと言はれるものの、本質は一体何なのか？　真の偉さ、優秀さ、真の強さ、正しさの根拠は何なのか？　といふ事を、真につきとめた時、人は、最も何でもない、平凡な、アタリマエな、素朴な、ジミな、つつましい、目だゝぬものの存在に気付き、改めて見直し、始めて、真の「強さ」とは何であるかをわかり、真のスナホさといふ事の意味を知るようになれる。

## 2、天皇家とカタカムナ文化

いつの世にも、弱者は強者に征服されるが、しかし、みかけ上の上部の政治組織等は、全く変革されても、彼征服者の心持や言葉まで悉く変へる事はできないから、弱者は地に潜んで暮し、ひそかに伝統を守り伝へる役を果すことになる。これが、実は、案外に大きな底力となって、弱肉強食の表相を支へる、民族の根の力となるのである。

カタカムナ人の場合も、征服者たる現在の天皇家の祖先（天孫族）の勢の盛な間は、表面に出る事は全く不可能であった……。もし、「三種の神器」と称されるものが、天皇家の本来に伝はる宝物であったのなら、それらの表象物を創作して、子孫に伝へる所以の意味が、わからぬ筈はなからう……。戦利

品として、彼征服者の歴史や遺物を、自分達に都合よく合理化したものではないか？　等といふような詮議は、終戦以前には、到底できない事であった……。もし当時、勝者として君臨した天皇家の祖先の態度が、本当に堂々として居たら……、といふのは、勝負は時の勢であって、その事自体は、実は何らやましい事でも秘むべきスジでもなく、唯、問題は、そのあとの、「君臨のしかた」にあったのであるから、もし当時、天皇家の祖先の人々が、被征服民の文化、則ちカタカムナの伝統を尊重する雅量をもち、正しく理解して、受けつぐ努力を払ってさへ居たら、天皇家は、後世、讃められるべき歴史をもつ事になって居たであらうにと惜しまれる。

なぜなら、天皇家の祖先は、カタカムナ文化を無視し、亡ぼそうとした報ひとして、後世、真の民族のホコリを知らぬ日本人を生み出してしまふといふような、ツミの面を蔵しながらも、二千年にわたる、世界に比類のない存在として日本民族の平和の象徴となり、知らず知らず、亡ぼした筈の、カタカムナの文化を、実は「理想」とし、カタカムナの「伝統」を「温存」させる為の、逆の一役を果して来た、と、言へるからである。

惟ふに、当時の上層部の意見としては、先住民の文化を亡ぼし、鉄製の宝物（表象物）は「三種の神器」として獲得し、図象文字は漢字に改め、儒教仏教をとりいれて精神革命をはかる事であった。といっても、スラスラとそうなったわけではなく、さんざん揉めたあげくの事であらうが、とにかくそれに成功した。しかし先住民は全部殺されたわけではなく、住民の用語まで変へたわけではない。征服者の言葉は、カタカムナ以来の民族語の中に融合し、今日の「日本語」のもととして定着したのであらう。

そして、その後の「天皇家」は、内実には人間的な葛藤もあったが、日本歴史にみられる如く、貴族や武家達の闘争の際にも、常に別格として尊重され、実力上の支配者も、天皇家の承認を得ぬ限り、権力を行使できぬタテマエで、少くとも天皇家は、人民の宗家（オヤ）といふ立場を貫き、則ち皮肉にも、天皇家は、亡ぼした筈の、カタカムナの世界観を、理想像として、うけつぐ役を、無意識のうちに、果して来たことになる。

征服後も、当初は苛烈な権力闘争が続き、日本の古代史の欠如もその為と考へられるが、そうした異質な荒々しさも、やがておさまっていった。それといふのも、要するに、彼らが亡ぼした筈の、カタカムナの伝統が、実は、日本語を使ふ日本民族の中に生き続け、天皇家の在り方をも、かくあらしめる力となって働いて居た、と言へるであらう。秀吉や家康たちのような、表面に現れた英雄を生んだのも、この民族の根の力に違ひないが、又そのカゲで、それに抵抗する支へとなって、黙々とカタカムナの伝統を伝へ得たのも、この日本語につちかはれた、民族の根の底力の故に他なるまい。しかし、天皇家をはじめ、日本人の誰しも、この事をハッキリと意識しなかった。それが、カタカムナの、民族の伝統とは知らず、「天皇」の特別な神秘性として、天皇崇拝の信仰を生み、又、日本史に記載され、日本人のイメージに残ったものは、表面に波風をたてた、大小の英雄たちの仕事だけであった。

支配権の交替に関する権力争ひの、やむを得ぬ処置であったにしても、冷静な歴史の目を以て観れば、「天皇家」にとって、「カタカムナの文化」は、決して「討覆」（古事記）すべきものでは無く、正しく究明して、堂々と受けつぐべきであった。小細工を弄する必要はなかったのである。少くとも、古

事記遍纂当時存在した「本辞」「旧辞」や、「一書」といはれた「原資料」は、そのまま保存されるべきであった。「偽りを削り実を定め」（古事記）といふのも、彼らの個人的な主観的理由である。その為に、この貴重な日本の古代の原資料を、抹殺し去ったといふ一事だけは、何としてもゆるされぬ、人類文化に対する「罪」であった。

この辺の**不明朗さ**が後世に長く禍根を残し、現代の日本の抱えて居る、いくつかの深刻な問題の、端緒ともなった事が考へられる。

我々は、日本人の原流を求める研究の方向を、外来の文物にむけるよりも、外来の移住者や征服者の渡来以前に、既にこの地に在住して居た、「先住民」の究明にこそむけるべきではないか？ 他民族が、鉄を鍛へる技や、農業の術をもった時代に、日本の地に、より高度の文化があったとしても、フシギはない。もとより外来の文化の影響は、大きなものであったに違ひないが、何もかも外来の文化に啓発され、外来の文物渡来以前は、全くの未開であったとする方が、不自然である。むしろ、既に高度の潜在的な力をもって居たからこそ、新しい外来の文化を受け容れゝば、短時間のうちに、日本全土に、本国ソコノケの、美事な文化を開花結実せしめ得た、といふみかたをすべきであらう。何かの事あるごとにあらはれる、日本の庶民の民度の高さ、則ち、日本民族の文化の根の深さのイハレは、どうしても、カタカムナの上古代まで遡るのでなければ、解明しきれるものではない。（前号及び次号参照）

「先住民」の文化といふ事が、私達のいふカタカムナ人に、ストレートには結びつかぬかも知れぬ。あるひは、カタカムナ人も亦その昔、日本列島以外の地から、移り住んだ種族であったかも知れぬし、天

皇家の祖先と、カタカムナ人の関係も不明である。老子教の古い伝によれば、日本には、天孫族以前に「噫示八仁（アシヤジン）」（亜細亜？）が住み、「八鏡之文字」をもって居たと言はれる。（第三号八頁五十一頁参照）

この「アジヤ」といふ名称が、カタカムナ文献の発見された「芦屋」といふ地名と関はりがあるかどうか？　といふような事も、当時楢崎が調査した遺物と共に、やがて公的に、追究されるべき課題である。ともあれ私達は、少くとも、現行の「カタカナ」文字の原型の声音符をつくり出し、我々の「日本語」のモトを生み出した人々を、『日本民族の祖』と考へてよいと思ふのである。とかく、国粋的に「神話」や「天皇」を、無条件に信奉する一部の人々があるかと思へば、古事記、日本書紀、三種の神器、等ときくだけでも、アレルギーを起す、といふような、不自然な両極端に分れる人々が多いのであるが、私達は、我々の長い歴史から、もっと聡明に学び、我々の、日本語の源流といふものに、真にスナホな目を、むけるべきである事を痛感して居る。

人類の歴史をみれば、強烈な意欲と、合理的組織力をもつ人々がグループをリードし、そのおかげで、地球上に、現在の人類繁栄時代を、もたらした事は確かである。小規模の民族間の闘争に、かち残った勝者が、次第に大規模の国家、民族間の闘争に、立ちむかふ事になり、闘争の大規模化につれ、その勢のゆきつくところ、人類の絶滅が予想されるに至って、心ある人々の間に、人類の真の在り方が、真剣に求められるようになって来たのである。

カタカムナ人が、天孫族の来襲に際して敗けたといふ事は、争ふ意欲が弱かったからであらう。又、敗けたといっても、それでカタカムナ人の後裔が、全部消え失せてしまったわけではなく、争ひを好ま

ぬ心を蔵し、表面は敗者として従ひながらも、依然として、持ちつづけ、生きつづけて居たものがあった筈である。前号にも述べたように、地球上の地形から言っても、日本列島は、世界の民族のふきだまりの位置にあり、有史よりもはるか以前から、地球上のほぼあらゆる人種の、混血があった事が考へられる。天変地異や気象の変化に追はれ、安住の地を求めて、たどりついた諸民族は、各自の多様な経験をもって、この、四季の変化も複雑微妙な、日本の地に定着し、火山の爆発・地震・雷・台風・洪水等々と、少しも油断のできぬ絶えざる刺戟にゆさぶられながら、しかしそれも熱帯の砂漠や、極地の寒さのような、非人間的なきびしさではなく、賢く勤勉に働けば、豊かな稔りに恵まれる、美しい風土の中で、渾然と醸成され熟成されて、遂に高度の文化に達し、後代の日本語と日本民族の原型をつくりあげた種族が、カタカムナの上古代にあらはれて居た、と考へてもよいであらう。そして、その後も、北方系、南方系、朝鮮系、大陸系、等さまざまの外来の種族を包容しながら、カタカムナ人の後裔たちは、西欧諸国のような烈しい反抗や、血なまぐさい革命はたくらまずに、地に潜み、つねに勝者の繁えるカゲにあって、それを支へ、カタムキは復元し、倒壊を防ぐ、民族の「根」の力となって、しかも、それらの役を、すべて無意識の裡に、あたかも天然現象のような態度で黙々と、果して来たのであった。私達はこれらの一々を考証することは出来ぬから、専門家の研究にまつしかないが、カタカムナの文化に親しむにつれ、こうした事が考へられるのである。

## 3、昔はよかった

日本のみでなく、世界のどの民族に於ても、初期の時代は、カタカムナ人的であったに違ひない。又、地球上の隔絶された地域には、今なほ、「カタカムナ人的」な人々が住んで居る。そして、又、実は、現代人と雖も、その性情の奥に、誰しも、カタカムナ人的なココロを潜めて居ない筈はないのである……。思ふに、いつの世、どこの民族にあっても、表面に現れた、意欲的な、闘争に強い人々のカゲに、オトナシイ、善良な、庶民の支へがあってこそ、社会は保たれ得たのである。そして民族の文化の度は、結局、このような庶民の、知性の度によって決められる。

私達が、「カタカムナ人」をとりあげたのは、戦前の日本の、国粋的、民族主義的な思想の如きものとは全く異る視野から、世界の諸民族の歴史の「相似象」の、最も「原型的」な例として、こゝに人類的な、一つの「指標」を示すものとしてである。

いつの世にも、どこの民族に於ても、数千年来、心ある人々は世相を嘆じ、「もう世も末だ」とか、「昔はよかった」といふ想ひを抱いて居た、といふ事は、どの民族も、最初の頃の「カタカムナ人的心情」を失脚した後代に至って、「昔はよかった」「昔はこんなではなかった」といふ、民族的な無意識の記憶が、再燃してくるのだと云へるであらう。しかしそれなら、「昔」とはいつ頃の時代をさし、「良かった」とは、どのように良かったのか？　といふ、ハッキリとした認識はなかった。その「昔」とは、千年や二千年の昔でない事は確かである。我々からみれば大昔の筈の二千数百年前、既に孔子は乱世を嘆き、イニシへを讃へて居るが、その口調は、まるで現代人と変らない。

人々が、「昔」「昔」といって、無意識に想起して居る「古代」とは？……「神々」としか言ひようの

ない人々の住んだ時代……西洋人の「ギリシヤ」と日本人の「神代」とは、大分ニュアンスは違ふようだが……とにかく、そのような、人類的な追憶のカナタに存在した、「大昔」の人たちの良さとは、一体何であったか？……「カタカムナ人的」な人々を滅ぼして、勝った筈の、強い優者達が、その後、いかに平和を意図し、ヒューマニズムをとなへ、智慧や誠意や熱意をつくして、戦争をなくそうとはかっても、結局、弱肉強食の競争にかりたてられ、人々の切実な希望とはウラハラに、人類は、過去地球上に生滅した、他の生物と同じく、共倒れに絶滅するまで、闘争を繰返すしかないとしたら、それはあまりにも愚かではないか？

個々の種族が、地域的に接触する程度で、自然発生的な変遷にまかせて居た、長い経験のあげく、我々は、ようやく「地球単位」の視野で、人類全体の将来を見通し、宇宙をながめ、自分達の過去の歴史を、反省できるようになったのである。そして、「昔はよかった」のが、どうして「世も末」と嘆かざるを得ぬような有様になってしまったのか？　真に、人類の在るべきスガタとは、どのようなものか？　我々は、次代の子供の教育の基本を、どこにおいたらよいのか？……こうした人類的な課題に対して、今、私達は、こゝに、一つの「基準」を示し、過去の遠い上古代に於ては、意識なしに「昔はよかった」状態であった、その「良さ」を、現代人の知性を以て、高い次元で解明し、そのままでは、モロい、弱みをもつその「良さ」を、正しい「認識」にのせる事により、今の世に、現代的に再現させる、といふ、大きな人類の理想を、将来に托しうるまでになったのである。則ち、その、一つの「基準」を示すとは、世界のどの民族にも稀な、はるか上古代のカタカムナの伝統が、明らかに現代の日本語と、

カタカナ文字の中に、「生きた遺物」として今日につながって居る、この事実を基として、カタカムナ文化の内容を、解明する事である。そして、それは、我々日本人として、当然の責務と思はれるのである。カタカナ文字の起源は、決して漢字でも、又単なる記号でもない事を、日本人は知るべきである。

我々が、現代に至って、ようやく人類的体験が熟し、「地球単位」に、自然の循環系や、動植物の生態系を、考へる態度になったのに比べて、カタカムナ人は、先述の如く、上古代の当時に於て、既に、太陽輻射のみならず、広大な、アマ始元量をくみ入れた、全宇宙的な循環系を、観察して居た。〈イノチ〉と〈クラシ〉の思念を、ハッキリ言ひわけずに居られぬ日本語の伝統は、実にこのカタカムナ人の、全宇宙を含む無限の循環を直観した世界観に基くものであった。イノチもクラシも、「ライフ」や「ヴィ」の一語ですませて居る西欧人は、イノチとクラシそのものへの、直感を失ったのか？ あるひは高次元に昇華させたものか？ その辺の消息は、軽々しく断じられないが、イノチとクラシに関するカタカムナ人のサトリは、我々に、深い反省の念を起させる。（次号詳述）

**4、相似象学の立場　直観の物理**

私達は、アマテラス大神やクサナギのツルギの神話等を、頭から否定するのではない。なぜなら、古事記日本書紀や上記等の伝へる内容は、私達のいふカタカムナの時代からみれば、はるか後代のもので、既に、「ヤタのカガミ」や「フトマニのツルギ」や「ヤサカのマガタマ」や「ミスマルノタマ」等の、表象物の真の意味が失はれ、「三種の神器の宝物」になってしまった後代の神話と思はれるからで

ある。それにはそれなりの、象徴する意味があるに違ひない。ただしかし、私達のいふ「カタカムナのサトリ」とは、そのような、三種の神器や、神話の神々の名や、地名等にのこされて居る言葉の意味を、そのカミ（起源）にさかのぼり、日本語をつくり育てた日本民族の、精神構造のナリタチの「根拠」を示すものである。それによって、古事記等の研究を志す人々にとっても、始めてそのナゾが、根本的に解ける事になるであらう……。

私達の研究は、他の多くの古代研究と、何らことをかまへるものではない。なぜなら、カタカムナ文献の解読によって、始めて、少くとも日本民族に関しては、従来の常識よりもはるか上限に、文化の発祥が見出される事が、判明したからである。このことを共通のよろこびとして、それぞれの分野の研究を進めたいといふ私達の真意を、誤解なく、うけ容れて頂きたいものと念願して居る。

▼弥生縄文期以前に、日本列島には、人が住んで居なかったかの如き学説は、戦後に破られたが、今なほ、縄文前期以前の研究はゆきつまって居る。それは実証が難しいからである。しかし一方に於ては、無名の研究者達の努力が次第に実を結んで、十万年以前に、既に日本列島には、人が住んで居たといふ事を、認めざるを得ぬ状勢となって居る。又、宇宙の虚空にも、科学の定説にないフシギな事件が続出し、又今まで、古代人の荒唐無稽の幻想の産物と思はれて居た、神話や壁画や建造物の意味が、改めてとりあげられ、要するに、従来の学問智識の常識というものが根底からゆらいで来た。私達の「カタカムナ文明」なるものが、公的にとりあげられ、その内容が、マトモに検討される日もくるであらう…。

しかしながら、私達は、その日を待って居られない。といふのは、戦後の教育によって、「日本語」といふものに対する日本人の直感が、いよいよ甚しく劣化しつつあるからである。私達の世代の（五十代以上）日本人も、明治以後の教育によって、カタカムナ的な、つまり日本的な感受性は大いに失はれたが、最近の様相をみて居ると、少くも私達の世代に於て、カタカムナの文献を、何らかの方法で、後代の人々の読みうる形に、記録保存しておかなければ、後年になってからでは、絶望とは云はぬまでも、後世の研究家をして、非常な困難に陥らしめるに違ひない、と思はれるのである。この事は、せいぜい数千年前の、サンスクリット、パーリー語、アラム語、スメル語等々の解読に当ってさへ、学者達のなめた苦労のほどを、想起すれば明らかである。

戦前の日本人は、とにかく、三種の神器が、どういふ意味をもつかはわからぬながら、それが、天皇即位の際に、なければならぬ重要な表象物である事を、知らぬものはなかった。戦後の若者にとっては、三種の神器といへば、「電気冷蔵庫と掃除器と洗濯器」、とか、「カーとカラーテレビとクーラー」とかのイメージしか浮ばぬといふ。そして戦後の小学生は、「三種の神器」といふ名称すら教へられては居ない。「三種の神器」などと言ひ出せば、それだけで、それこそアレルギー的にケ嫌ひされるような、反動的な偏見が強く、三種の神器は、単に国粋主義者か、神道関係の信者だけが有難がる、天皇家の私有の宝物位に解されて、日本歴史の教育からは、消されたようである。

三種の神器の表象する意味を、明らかにしようともせず、長い間、即位の象徴として来た天皇家も、ウカツであったといふべきであるが、三種の神器に托されて居た、カタカムナ文化の内容が解明されて

みれば、今日の現状を、ただ天皇家だけの事件として、見棄てるべきではない事になる。「三種の神器」などと称したのは、天皇家の祖先の意見で、カタカムナ人の責任ではない。なぜならカタカムナの「ヤタノカガミ」は神鏡などではないし、ムラクモノ剣は、「フトマニノツルギ」の象徴であって、人や蛇を切る太刀や、カタナではなく、「マガタマ」も、決して単なるアクセサリーではなかったのである。(前号参照)

▼人間の、個人的な意識、無意識の行動などといふものは、歴史の興亡の大きな流れの中にあっては、まことにはかないもので、私達の気持なども、さゝやかな老婆心に終る率は高い。おそらく、歴史の興亡の底で、何万年もの間をもちこたへて、伝へつづけられて来たカタカムナの伝統は、日本語の存在する限り、生きつづけるであらうし、将来も、私達以上に直観の鋭い人は必ず生れるに違ひない。ただ、今日、この歴史の接点に生れ合せた私達が、このカタカムナの伝へを手にし、それを、私達の子孫に受け継ぐ努力を、今の私達に出来る限りの方法を以て、つくしておくことは、当然の事で、もはや、その事の成就や、効果や、自分達の非力を、云々すべき問題ではないと思はれる。

このカタカムナの文献を、文字通り心血を注いで解読した私達は、この解説に当っても、何よりも先づ、自身の「直観」を正して、カタカムナ人の「ココロ」を及ばずながら追体験する気持になって書いて居る。読んで下さる人々も、何よりも先づ、自分自身の生物的な「カン」を頼りに、自身の裡に潜められて居る筈の、彼らと共通の「ココロ」を以て、読む気持になってみて頂きたい。そのような交流な

しに、人間的なアタマで、理解してすむ学問とは違ふので、従来の学問勉強の努力意識は、不必要なのである。

**▼直観性能の発揮**　要するに、人間特有の直観性能の発揮が、必須条件なのである。これは「非科学的」「非常識」なことであるが、「科学否定」や「没常識」ではない。従来の常識からははづれ科学の定説からみれば非科学的であるが、決してイカガハシイ言ひぐさではない。それどころか、真の科学者ならば、当然そうあるべき態度であり、近々千年二千年の間につくりあげた現代人の常識や理論は、徹底的に批判されてよいので、そうした自由さなしに、「古代のナゾ」を解き、真の「人類的な反省」ができるものではない。ただし、その批判や反省が、単なる神秘思想や、ロマンチックな、又、ファンタスチックな、ひとりよがりに流れず、真に正鵠を得る為には、どうしても、高度の知性に支へられた、鋭い「直観」を必要とするのである。

公害問題を始め、原因不明の奇病の多発、核兵器の恐怖、人間性の荒廃等の、現代文明の破綻は、直観性能の保全の重要さを忘れ、末梢の欲望に走った結果の、諸現象の悪循環に他ならない。

人間の「エラサ」を、表現力や目前の仕事で測り、「アタマの良サ」を記憶力や反応の速さでみるのは、「カン」の悪い話である。人間の「真価」は、直観の鋭さ、深さを以てみるべきであり、ほんとうの実力は、直観性能の絶えざる鍛練によって培はれるのである。「昔」の人は、その理は自覚しなかったが、めいめいの「カン」のマトモさで人をみる事が出来、真に優れた体験者をエライ人として仰い

だ。「昔」の人が、「十目の見る所」を正とし、直の古字としたのは、人々のカンのマトモさを頼りにして居たわけで、単なる多数決思想ではなかった。しかるに現代人は、「カンなどは原始的なアテにならぬもの」として、科学的な測定器の方を信用し、人の優劣を測るにも、記憶力や意欲の強さや、さては学歴や家柄等で決めることが、一般常識として通るようになったといふ事は、めいめいのカンが鈍化したからで、とりも直さず、しらぬ間に、人々が、直観の鍛練を忘れて居た証拠である。

しかし人々が意識しなくとも、最後は「実力」がモノを言ふのであり、人間の「実力」を測る最も支配的な条件は、学位でも家柄でもなく、要するに、「カン」の度である。しかしカンの試験は難しいから、記憶力や、個々の形や数に示せる能力をテストして、間に合せて居るが、弊害が多い。（しかし、もし、今に直観の物理が進めば、人間の知性や人格の度を、より妥当に測る方法も、可能になるかも知れない……。）

▼カン　私達は、屢々「カン」の重要性を指摘して来たが、私達が、「カン」の訓練実習を、人間の子の教育の、第一としなければならぬとする所以を明瞭にする為に、「カン」といふ事を、前近代的なアイマイな観念で放置しておかずに、現代人の高度の知性を以て、ハッキリと認識する必要がある。

私達のいふ「カン」を説明すれば、……所謂、目、鼻、耳、舌、触等の五感が、動物機能的な「直感」であるが、人間の場合は、過去の経験や智識も、「カン」を構成する要素である。則ち、内外の刺戟を取捨選択する接点に於て、平衡感覚的に、セッナに働く作用が「直感」であり、その直感をスナホにし、

直感にもとづく判断、則ち「直観」をマトモにして、思考を進めることが、私達のいふ「カン」、つまり「勘考」である。今まで、宗教や道徳の教へが、漠然と「修養」とか「修行」「鍛練」等と称して、目ざして居たものの実質は、要するに、実は、自分自身の「直感をスナホ」にし、それによって、時々刻々、事に当っての「判断をマトモ」にすること、則ち、「カンの養成」につきる、と言へるのであって、たとひ、いかなる時代に、いかなる社会に生きるにしても、結局、自分の「食」について、「性」について、又、仕事や学問智識の上の取捨選択に当って、自分の人生の方向について、あるひは突サの危険に際しても、何よりも、自分自身のカン（勘考）が、マトモに、活性に働くことこそ、最も肝要なポイントである事を、カタカムナのサトシは、明快に示して居る。マトモな直観なしに、智識や技能を進める事は、盲目的、自殺的行為に他ならない。正しい「カンの養成」を忘れた民族は、人類から陶汰されるであらう。

科学が進み、智識がふえながら、神秘思想や迷信が横行し、病気や不幸が悪質化し多発するのも、要するに「カン」が鈍い為に、神秘な現象の「本性」をつかめないからである。その意味で、二千年前の人も現代人も、大して変りは無い。又個人差が甚しく、現在でも、古代人と変らぬ性能をもつ人も存在するようである。

科学技術の発達により、人間の感覚できぬものを測定する、各種の機械がつくられ、精密な数値を示して、人間のカンのあてにならぬ面が強調され、人間のカンより、機械を信用する方が文化的だ、とする風潮がもっぱらである。たしかに我々の感覚は劣化した。カンを最も尊重すべき筈の、病気の診断

や、人生の占ひまで、機械に任せる人もある……。しかし、機械の能力を、合目的に、有効に駆使するには、人間の智能が必要で、何と言っても、今のところ、まだ、人間の「カン」の働き以上の能力をもつ機械は存在しない。又、こうした人間の「カン」とは、どういふものか?を解明するに足る智識もなく、人間の「カン度」を測定する機械もないのである。

▼私達は、カタカムナ人の優れた直観生活をしのぶにつけ、我々現代人は、新しい次元に於て、科学技術の智識や器械をも駆使する、新しい「カンの鍛錬」といふ事を、人間の子の「教育の基本態度」とすべきである事を痛感して居る。私達は、科学技術の発達を排撃するのではない。又、観測される「実証」を基礎として来た科学の態度も、あくまで尊重すべきであると思って居る。ただ、その「観測」といふ事の定義を、単に、従来のような科学的手段の観測に限定せず、「人間の直観」といふ観測法も加へるべきであり、それには、人間の直観性能を重視し、これを鍛練することに努めねばならぬと思ふのである。このような態度にならぬ限り、科学は自縄自縛に陥り、ゆきづまりを打解する事は不可能であらう。

カタカムナの時代は、鋭い体覚的直感が、ストレートに、鋭い直観につながり、鋭い思考を働かす事が出来た。その点、我々の感覚機能は確かに劣化した。しかしそれとても訓練次第で、日常生活的な「食」「性」の体覚的直感は、新しく発生しうるものであるし、又、顕微鏡や望遠鏡や、各種の器械を使って、我々の、劣化した面を補へばよい事である。重要なことは、そうした感覚にうつる現象を『どう判断するか?』であって、その「直観性能」そのものは、我々現代人と雖も、生命のある限り、決して

失っては居ないのである。「カン」は生物機能であるから、手や足の機能と同様に、鍛錬次第で、大いに発達する。我々もこの事に気づいて自分の直観を鍛へれば、カタカムナ人のヒビキを聴くだけに、我々の「カン」を高調させる事が出来るのである。

この根本を知れば、「劣化したものは仕方がない……」と投出す事は意味がない。それどころか、今もなほ、人間の「カン」ほど、「感度」の良い観測器は無いのである。この優れた性能をもつ人間の「カン」の力を、無視したり、低次元のまゝに放置したりせず、大いにその「可能性」を発揮すべく、鍛えるべきである。我々のもって居る「カン」の力は、科学技術の少々の発達の為に、鈍化し磨滅してしまふようなものではない筈である。進歩した科学技術の手段は、我々の手や眼の感覚の延長として、高度のカン（勘考）の働きうる為の、資料を提供する役を果すであらう。

長い人類の歴史からみれば、数千年来の劣化や麻痺の程度は、訓練次第で、新しい開発も可能な筈である。私達は人間の「カン」の性能を、このように高くみて居る。現在の各種公害問題等の試練は、この事を反省する、チャンスとすべきである。全部の人のカンをただす事は不可能であるが、少くも、教育と政治の根本をこゝにおき、「カン度」の高い人が尊重されるだけに、社会の常識をただす事を、目標とすべきである。そして、その為にも、「カタカムナの文化」は、我々の、重要な指標となるものである。（次号参照）

「カタカムナの文化には飛行機や、電気器具は無かったらう」といってケチをつけるのは当らない。高度の文化には、「アンバランス」は無い。カタカムナでは、必要なものは、必要なだけ発達して居た。

アンバランスに発達するのは、人間の「欲望」がしからしめるのである。そして欲望のまゝに妄動するのは、要するに、「カン」が鈍くなったからである。一時的に繁栄し、トクをしたように見えても、やがて破綻がくる、といふ事を、「カン」が悪ければ見通せずに、欲望にふりまはされるわけである。こうした事は、少々「カン」の良い人なら、誰しも気づく事であるが、さて、それを、ハッキリと指摘し、その解決の方法と、根拠を、示すことは出来なかった。私達が、カタカムナの文化を紹介し、相似象の会誌によって、今後明らかにしてゆくことは、この「直観」の物理である。

要するに、直観とは、全体の関連を、大きく把握するハタラキであり、本質本性をみぬき、根拠をつかむ力であり、いふまでもなく、それこそ、アマーカムの関連をサトル力に他ならない。そして、そのような能力は、人間の性能として、そなはって居るものであるから、我々と雖も、上古代人と同様に、発輝できぬ筈はない、と思はれる。

従来の、現象を実証する物理学と共に、この「直観の物理学」が、認められて当然であらう。そして、それについて、我々よりも、はるかに「カン度」のよかった、カタカムナ人の残したサトリ程、参考になるものはないであらう、といふわけである。「科学に弱い」といふことを日本人の劣等感とせず、「直観の物理」こそ、日本人の独壇場とし、奇妙さ量の多い能力を、大いに発揮できる筈である。（空想と直観参照）

▼人々のカンのよい間は、カンの事など考へずに、カンを活かして居た。カンが劣化してくると、カン

を、みづからいやしめるようになった。私達が、カンといふ事を、真剣に考へねばならなくなり、人間の修養や教育のポイントが、実は、カンの鍛練に他ならなかったと気付いたのは、我々のカンがよほど劣化し、今や、重大な瀬戸際に在るといふ事であらう。現在の人類が、過去の、カタカムナの「昔」の文明に、匹敵するだけのレベルに成熟しうるか？　それとも、滔々としてこのまま崩壊におもむくか？……「人為のほどこし得る所にあらず」として、なりゆきのまゝに放置すれば、現在の人類の未来は絶望的であるが、今から気がついて、その気になりさへすれば、その瞬間から、我々の衰へた直感性能はよみがへり、新しい次元に於て、発生してくるものがある。これは科学的判断ではなく、カタカムナの「アマーカム」のサトリに基く直観であり、その意味で、我々の人類はまだ若く未熟で、反省のチャンスに恵まれて居る。反省とは、人間の直観性能を、生物の本来のスガタの「ナリ」にそって鍛へる以外に活路はないといふ事である。そしてそれは、我々現代人にも、決して不可能な事ではない。

「その気」になりさへすれば……。

それは、まことにアタリマエな、自然な事なのであるが、ただ、「その気」になりさへすれば、といふ、極めて簡単にして、極めて至難な一事が、つねに、古くて新しい、人間の、一人一人の「心」の問題として、かかって居るのである。

（昭和四十七年五月六日）

# 編集後記

▼一般的に言へば、現代は、まだまだ科学を奨励して、科学智識を国民に教育しなければならぬ時期だ、と思はれて居る。しかるに、その科学に疑問をもたせるような言動は、世を迷はすものと非難されかねない。

▼「今どき、神様や神話をとりあげるなんてナンセンスだ」「何万年も前の古代人が、そんな高度の物理を知って居た筈がない」「訳者の感情移入か、読みすぎに違ひない」等々の批判も多い。

▼体操やスケート等の妙技なら、誰の目にも、その、人間わざとも思へぬ、人間の機能の、発達の極限の「素晴らしさ」と、一般人の手足との差は明らかである。しかし、アタマやココロのハタラキのように、目に見へぬ性能は、肉体のわざのように、誰の目にも鮮やかに示すといふわけにはゆかない。

▼私達がカタカムナ人の直観の「素晴らしさ」を、いかに述べても、同じ日本人同士、日本語で話しても、なかなか通じなくなってしまった。

▼「会誌には、カタカムナの内容だけでなく、時代考証も載せよ」との意見も、読者から寄せられて居る。しかし、相似象学は考古学ではないし、又、それは私達には不可能である。なぜなら、私達も、個人的には、いろ〳〵考へた結果の確信であるが、それを発表する立場ではない。しかしこれ程の文化をもった民族の遺物がない筈はない。カタカムナの文化に関心をもたれた読者の中から、その気持で、物的資料の考証や、カタカムナ人と、ネアンデルタール・クロマニヨン等の人類等の前後の時代考証をはじめ、他民族の歴史との関連なども、追究しようといふ方が、あらはれて

下されば幸である。

▼古事記・日本書紀は、カタカムナの文化を含む、日本の古代に関する、千三百年前の人々の一つの「意見」であったと言へよう。それが現在では最古の公的資料であるにしても、だからといって、その内容が、全部正しいとは限らない。マ違った解釈は、正さるべきである。「上記」（ウエツブミ）は八百年前の人の「意見」である。今私達が、現代人の「意見」を出してもよいであらう。どうか、読者の鋭い直観を以て、御批判をいただきたい。次号はひきつづき、カムヒビキによる、「カムナガラのミチ」を解説する予定である。

▼近ごろ人類の未来について、悲観的な意見が真剣に論じられて居る。そして、そうした警告は、既に二千年前から、心ある人々によって発せられて居た。唯しかし、「なぜそうなったのか?」「それならどうすればよいか?」といふ、真の解決策はまだ無かった。私達が、カタカムナの文化にふれて、真に打たれたのは、そこに、まさしくこの「解答」をみたからである。則ち、人類のあるべきスガタの原点が、そこにあったからである。これに共振しうるだけの高調波をもつ人々に、則ち直観の鋭い人々に、どうかこの会誌を読んでよく吟味してみて頂きたい。なほ、くれぐれも拙い解説にわづらはされず、カタカムナ人の直観のヒビキをジカに聴きとって下さるよう念願する。

▼あまりにも「アタリマエ」でない事がまかり通る世の中には、「アタリマエ」な事は、かへって「常識ハヅレ」とみられる。しかし、人間が「アタリマエさ」をわからなくなっても、天然自然は「アタリマエ」なスガタで永遠的に運行して居るのであるから、それにハヅレれば、生存が全う出来なくなるだけである。私達が、人間の「高度の直観性能」の鍛練を、何よりも重要視するのはこ

の故であり、そこにこそ、人類の存亡にかゝはる重要な鍵がある事をつきとめたのである。

▼直観の鍛練と言っても特別の事ではなく、先づ、自分の身の、食、性に対する、スナホな感覚からはじまるので、例へば、我々の直感のスナホさを測る簡単なバロメーターは、「玄米」に対する反応である。近代医学に見放された危篤の病人でも、もし玄米のオモユが入れば……まして「オイシイ」と思へるなら、生命をとりとめ得る……といふ実例はたくさんある。

▼最初から「オイシイ！」と心から思ふ人、別においしくはないが健康の為に食べる人、どうしてもおいしいとは思へぬ人、おいしいもまづいもない、そんなものはイヤだと拒否する人、玄米でも白米でもどうでもよい無関心の人……。

▼もはや今日は、玄米白米の善し悪しを論ずるトキではない。又、「玄米さへ食べれば」といふような信仰の対象にすべきものでもない。既に日本人の白米食経験も二・三百年、西洋風の食事の経験も百年、日本人にとって、玄米食の妥当性は「アタリマエ」の理なのである。

▼玄米にはサネ(生命核)がある。生命力(アマナ)の密度が濃く、自分自身に栄養があり消化力があるのみでなく、触媒担当者となって、周囲のものを活性化する。(カタカムナ人が「稲」をとりあげ、その栽培法を工夫したことは次号詳述)

▼幼い頃からムリな生活をし、病気・入院・手術の苦しみをくりかへし、アハヤお棺に入りかけて、玄米を食べることを教へられ、生れて始めて、「健康」といふことの意味をサトった「オヤ」は、我が子にはこの思ひをさせたくないと、一生懸命、玄米を美味しく炊いて食べさせる。「子」はオカゲで、腹痛も虫歯の辛さヒトツも知らずに成人する。「オヤ」の苦労のほどは知らず、結果

の恩恵だけをうけた「子」は、「転ばぬ先の杖」の、健康の有難みは、「オヤ」ほどに感じないが……、「子」の健やかな姿をみるのが「オヤ」のよろこびであり、「オヤ」とはそのようなものである。

▼「玄米」といふものは、食べてみればどんな御馳走よりおいしく、しかも、確かに「百薬の長」である。そしてこの事は、一たびわかってみれば、あまりにもアタリマエのことで、他人に教へても謝礼もとれぬ程、人間としてあまりにも当然な行為なのである。

▼ただ、「玄米を食べればよいのだ」といふ一事を、真にサトルまでに、「オヤ」は、ほとんど一生をかけて苦労しなければならなかった。しかし「子」には、そのような体験は不必要で、唯食べさへすれば「健康」がめぐまれる。

▼「カタカムナなんて難しくてわからぬ」といふのは、丁度、「玄米なんて食べられない」、といふのと、似て居る。ほんとうに食べてもみず、炊き方をよく研究してもみず、食はず嫌ひの「子」もあれば、スナホに食べてみようといふ「子」もある。食べて「オイシイ」と頷く「子」もあれば、「噛ムのは面倒クサイ」と受けつけぬ「子」もある。

▼「カタカムナ」にゆきつき、解読するに至るまでの、五十年七十年の、個人的な苦労を、私達は語らず、結果の「カタカムナ」だけを、心ある人々に伝へて死のうとして居る。

▼私達のような体験をしない人々に、「カタカムナ」の真価を直ちに理解していただく事はムリであらう。科学になじんだ人々に、科学の概念にない、「アマ始元量」から入ることには、トマドヒがあり、科学の概念にない事を、科学用語を用ひてわからせる事自体が、ムリな注文である。私達

の死後、これが、どのように扱はれるか、無視されて終るか、それはもう、私達の力のどうしようもない事で、後の人の責任にお任かせするしかない。

しかし、「カタカムナ」のサトリは、決して難しいものではない。人間として、あまりにも「アタリマエ」の「コトワリ」である。それが難しく思はれるのは、私達の解説が拙い故であるが、最大の難点は、めいめいのもつ、近代人の固定的な先入観念を打ち破ることである。

▼丁度、ビフテキやコカコーラに馴れた口には、「玄米」は抵抗があるようなものである。しかし、上手に炊かれたものなら、どんな人の口にも本当に美味しいものである。玄米を食べるべきリクツなど何も知らぬ幼な児は、例外なくよろこんで食べる。ほんとうに「オイシイ」と感じるものが身の養ひになる。「玄米を食べる」といふような、何でもない行為から、人間の健康の基礎がひらけてくる。「オヤ」のような苦しい体験などなくても、「子」は教へられるまゝに、食べさへすればよい。

▼しかしながら、玄米の味を真にわかり、その恩恵をうけて、真に「心身の健康」を全うするには、ただ「玄米を食べさへすればよい」といふのではダメである。どうしても、カタカムナのサトリが優先する。その真意を知った上でなければ、オヤの苦労の結果は、その「子」一代の僅かな恩恵に止まり、その「孫」は、又、モトのモクアミで、同じような苦労を繰り返す事になるであらう。

▼カタカムナを解読するまでには、五十年七十年の苦しい体験が必要であったとしても、その結果わかったカタカムナのサトリそのものは、極めてアタリマエな事で、それを読む人にとっては、いはば「始めて玄米を食べる時」のようなものであ

る。問題はその態度ヒトツである。

▼「玄米を食べてみよう」といふような気持で、会誌を手にして下さった方々に、出来るだけわかり易いようにと、会誌は学術論文の形をとらず、日本古来の「絵巻物」をくり展げるようなつもりで編んで居る。「その気」になって読んでさへ下されば、決して難しいものではない筈である。

▼現代の物理学は、物質と生命質を分けて居るが物理学が生命の理をも扱ふのでなければ「自然さ」がない事になる。又、物質が元素から成り立つといふなら、その元素の発生源を見とどけるのでなければ……、元素原子の構成について、電子中性子陽子（原子核）等の、いかに部分的に精密な研究があっても、その最後の、「最も小さなものは何から発生するのか?」が説明されなければ、その物理学はスジが通らぬ事になる。

▼私達は、「アマ始元量」などと言ふより「宇宙量」、「マリ」といふより「宇宙始元子」などと、現代人ムキの名をつけても悪くはないであらう。しかし私達は、自分が、この事を発見したとは思はぬし、自分の手柄にする気もない。それは、人間の個有振動が高まり、アマ則ち宇宙始元量のヒビキに共振できるまでに高調すれば、誰しもサトれるものであるといふ体験から、既にカタカムナの上古代にそれをサトって、アママリ等とよんで居た、その本来の言葉のイミを生かして使ふ方が、不自由な現代語を下手に作るより、はるかにふさはしいと思ふまでである。「述而不作」とはこのようなアマのヒビキを聴いた人の共通の心境であらう。自分の作品に銘を入れようとせずに名品をのこした工人の気持も、自分の力が作ったとは思はなかったからであらう。「英雄は英雄を知る」とか「己を知る者」とか言ふ言葉のように、振動数のあふ者は、説明なしに相通じる共鳴

共振を、ひとりでに感応するのは正直なものである。

▼いまに、何とかして、子供ムキの、やさしい、「カタカムナの童話」を、ぜひ書いてから死にたいものと念願して居る。

▼次号はひきつづき、カムヒビキ第三部として、「カムナガラのミチ」を掲載し、それで、第三号からのカタカムナ文献の特輯を終る予定である。カタカムナ文化は、相似象学の根拠であり、その直観の物理によって、第六号から、相似象学の独自の学を展開する。

（昭和四十七年七月十日宇野）

# 相似象学会について

▼相似象学会は、相似象を学ぶ勉強会であります。
▼「相似象」は、天然、宇宙、人間界を通じる森羅万象に、相似る象（ファイニ カタチ）があるといふ物理であります。
▼婦人の知性の遅れは、民族の後進性に連なるもので、本会の目的は、知的水準の高い母性の養成にありますが、要は、日本民族の優生化と、人類文明の軌道修正を志すものであります。
▼会誌相似象を発刊し、会合を開設して、直観を鍛錬し、婦人の特性である、前駆流の高調に努めます。
▼会員は会誌の配布を受け、開設される会合に参加できます。
▼会誌発刊の都度、会誌代を納める以外に、一切の費用も義務も課せられません。
▼会員は婦人に限りません。葉書又は電話にてお申込み下さい。

相似象学会誌＝相似象＝第四号

初版　一九七二年七月二十八日発行
八版　二〇〇五年五月　九日発行

〈購読会費〉一冊一〇〇〇円

〈編集者〉宇野多美恵
〈発行者〉宇野多美恵
制作▼株式会社現代社

発行所▼相似象学会事務所
（〒一五〇-〇〇四五）
東京都渋谷区神泉一七―二
電話＝三四六一・八九九三
振替＝〇〇一五〇-一-一六一八四四

（印刷・壮光舎印刷　製本・誠製本）